

H.19文化庁「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業

日本語教育指導者養成講座

報告書

2008年3月31日

兵庫日本語ボランティアネットワーク

H. 19年度文化庁「生活者としての外国人に対する日本語教育事業
日本語教育指導者養成講座

目 次

H. 19年度文化庁「生活者としての外国人に対する日本語教育事業

日本語指導者養成講座について	1
第1日	
オリエンテーション 兵庫日本語ボランティアネットワーク(HNVN) 代表 長嶋 昭親	5
自己開発のためのストーリーテリング(1)	
「自己紹介(異文化ワークショップ)」 関西国際センター 非常勤講師 山田 久美子	9
感想文	10
第2日	
生活者としての「外国人」の現状と課題(1)	
「相談業務の現場から」 RINK 木村 雄二	12
「インドシナ難民とその家族について」	
NGO ベトナム in Kobe 代表 HA THI THANH NGA	17
「中国帰国者への日本語支援の現場から」	
神戸外大「日本語学習を助ける会」ユニティ教室/中国帰国者日本語ボランティア協会	
北川 秀子	19
感想文	21
第3日	
生活者としての「外国人」の現状と課題(2)	
「日系労働者とその子どもたちについて」	
NPO 法人 篠山国際理解センター 矢持 ヴェロニカ ミチコ	24
「日本語ユーザー(フィリピン)から」～地域社会に受け入れられてこそその生活～	
子ども多文化共生サポーター / 柏原日本語教室「こんにちは」畑 ロレーナ	27
「日本語ユーザー(韓国)から」	
子ども多文化共生サポーター / 港島日本語教室「こんにちは」許 智 仁	28
「日本語ユーザー(中国残留孤児一世)から」	
神戸外大「日本語学習を助ける会」ユニティ教室/中国帰国者日本語ボランティア協会	
澤 政道	30
感想文	31
第4日	
「外国から来た子どもの状況と課題ー1	
「外国人児童生徒の思いから学ぶ、受け入れ、日本語学習、教科指導など」	
神戸市立本山第二小学校 国際教室 村山 勇	34
「小学校での実践報告」	
HNVN/神戸市立T小学校日本語支援ボランティア 長嶋 昭親	37
「中学校での実践報告」～数学で出てくる日本語をどう教えるか～	
講師:神戸市立生田中学 JSL指導員 久永 雄介	40
ワークショップキーワード	43
感想文	44
第5日	
「生活者としての外国人への日本語学習支援」	
「学校教育との違い」 兵庫日本語ボランティアネットワーク 永安 龍三郎	48
「自己開発のためのストーリーテリング(2)」 大阪大学大学院文学部教授 青木 直子	51
第6日	
自己開発のためのストーリーテリング(3)	
「異文化体験学習」 コミュニカ学院院长 奥田 純子	55
感想文	58
第7日	
第二言語教育の理念と理論	
「国語教育、英語教育との違い・第二言語教育の理論と理念」	
大阪大学大学院文学部教授 青木 直子	60

第 8 日

日本語支援法―1:「自己学習、自己学習支援について(ポートフォリオ作成について)」

大阪大学大学院文学部教授 青木 直子……………69

第 9 日

日本語支援法―2:学習者のニーズに応えるための戦略―1

「実践演習―1」 港島日本語教室こんにちは コーディネーター 尾形 文……………77

感想文……………81

第 10 日

日本語支援法―3:学習者のニーズに応えるための戦略―2

「実践演習―2」 神戸定住外国人支援センター 高橋 博子
兵庫日本語ボランティアネットワーク 後藤 ひろ子
港島日本語教室 許 智 仁……………84

感想文……………87

第 11 日

「外国」から来た子ども支援の状況と課題―2

自己開発のためのストーリーテリング(4)

「総論:学校での日本語支援」 神戸市立本山第二小学校 教諭 村山 勇……………90

「神戸生田中学での体験から」 神戸市立神戸生田中学校 教諭 槌木 一彦……………97

「地域支援ボランティアからの報告」 兵庫日本語ボランティアネットワーク/「えんの会」 永安 龍三郎……………100

感想文……………102

第 12 日

「外国」から来た子ども支援の状況と課題―3(他地域での先見実践について)

「外国の子どもたちが抱える「生きづらさ」をめぐって」

(1)「下福田中学での『選択国際』のとりくみ」 大和市立大和中学校 教諭 柿本 隆夫……………105

(2)「すたんどばいみー」とわたし すたんどばいみー CHUOP SARARN ……114

(3)「選択国際と中国人としての自分をえらんだこと」 すたんどばいみー 西岡 歩……………115

(4)「選択国際と私」 すたんどばいみー グエン・ゴック・バオトラン……………119

(5)「運営委員会のこと」 すたんどばいみー 宮脇 英理……………119

感想文……………121

第 13 日

「学校での支援活動について」～兵庫県の子ども多文化共生教育の取り組みについて～

子ども多文化共生センター 樋口正和……………124

「地域での支援活動について」～兵庫県内の日本語支援活動について～

兵庫日本語ボランティアネットワーク代表 長嶋 昭親……………129

修了生の会提案文……………132

修了生アンケート ……133

H. 19年度文化庁「生活者としての外国人に対する日本語教育事業
「日本語教育指導者養成講座」について

0. はじめに

本養成講座は 文化庁から平成19年10月1日付け19庁文第198号で委嘱を受け「生活者としての外国人に対する日本語教育事業(退職教員を対象とした日本語指導者養成)」を実施した。

1. 講座名:「日本語教育指導者養成講座」

2. 事業委嘱期間 平成19年10月1日～平成20年3月31日

3. 事業の趣旨・目的

兵庫県には約10万3000人の外国人が居住している。そのうちの4割が新渡来者であり、日本で生活するために彼らの多くが、居住地域、勤務地域で日本語学習を望んでいる。その要望に応えるために、県内には約70箇所の日本語教室がある。どの教室も恒常的な学習支援者不足である。

また、彼らに連れてこられた子どもたちも増加の一途をたどっている。子どもたちへの支援はどの教室も経験が浅く、試行錯誤で支援に当たっているのが現状である。

兵庫日本語ボランティアネットワークは県下の行政機関(国際関係課、教育委員会)国際交流協会、ひょうご日本語ネットと密接な連携関係を持っているので、人的ネットワークを生かすことができる。また、兵庫日本語ボランティアネットワークは日本語学習者のニーズに応えるための日本語学習支援者養成講座を開催してきた実績がある。この利点を生かし、「退職教員を対象とした日本語指導者養成講座」を行うことができる。

兵庫県では小、中、高等学校の教員が約4万人在職し、毎年約1000～1200人が退職する。退職者の多くが、退職後、地域社会で活動を望んでいるが、成人を対象とした社会教育の経験がある人はほとんどいない。ましてや日本語教育のノー・ハウを身につけた人はほとんどいない。

ここでは、彼らの教育経験を生かしながら、地域の「外国人」の日本語学習支援活動に必要な態度、知識、スキルを新たに身につけ、地域の日本語学習支援教室に通う成人や学校に在籍する日本語学習支援を必要とする児童生徒の支援者として活動できるように以下を目的とする。

(1) 講座修了者(退職教員)が兵庫県内各地の日本語学習支援教室や学校で活動する機会とする。

(2) 講座修了者(退職教員)が自分の経験を生かし、外国から来た子どもへの日本語学習、母語学習、教科学習支援に参加できるようにする

3. 地域の状況

(1) 兵庫県内には約10万3000人の外国人が在住し、そのうちの4割が新渡日者(ニューカマー)である。県下各地に点在している。

(2) 新渡日者(ニューカマー)には、中国帰国者とその家族、インドシナ難民とその家族、日系労働者とその家族、日本人の配偶者約2000人が日本で生活するための日本語学習を望んでいて、県下各地の教室で学習をしている。

(3) その多くの教室で支援者不足や支援者の質の向上の問題に直面している

(4) 新渡日者(ニューカマー)が連れて来た子どもたちは、地域の学校の中で孤立していて、日本語学習、母語学習、教科学習の支援を求めている(県内の日本語支援を必要とする児童生徒約800人)。

4. 事業の内容

(1) 研修講座名:「退職教員のための日本語学習支援者養成講座」

(2) 研修の具体的内容

① 学習目標

ア.「生活者としての外国人」の状況を知り、彼らの日本語学習ニーズに応えるための基本的知識や技術を習得させる

イ. 地域での日本語学習支援活動の実態を知り、支援活動をするための心得と態度を身につける

ウ. 学習者の持つキャリアを日本語学習支援活動にどう生かすかなど自己開発計画を作る

② 講座内容

No	月日	場所	内容	講師
1	11月24日 (土)	のじぎく会館	開講式 オリエンテーション 自己開発のためのストーリーテリング(1) ～自己紹介(異文化ワークショップ)～	長嶋昭親 山田久美子
2	12月1日 (土)	のじぎく会館	生活者としての「外国人」の状況と諸問題 ー1 インドシナ難民とその家族について 中国帰国者とその家族	木村雄二 ハーティタンガー 北川秀子
3	12月8日 (土)	のじぎく会館	生活者としての「外国人」の状況と諸問題 ー2 日系労働者とその子どもたちについて 日本語ユーザーから(1) 韓国 日本語ユーザーから(2) フィリピン 日本語ユーザーから(3) 中国	矢持ベロニカ美知子 許 智仁 畑路ロレーナ 澤 政道
4	12月16日 (日)	県民会館	「外国」から来た子ども支援の状況と課題 ー1 外国人児童生徒の思いから学ぶ、受け入れ、日本語学習、教科指導など JSL教室の実践報告 小学校での実践報告 実践上の悩みを語り合う	村山勇 久永雄介 長嶋昭親
5	12月22日 (土)	のじぎく会館	生活者としての「外国人」への日本語学習支援について ～学校教育との違い～ 自己開発のためのストーリーテリング(2) a.「自分はどんな教師だったか」「どんな教師になりたかったのか」	永安龍三郎 青木直子

No	月日	場所	内容 b.「どんなボランティアになりたいのか」	講師
6	1月5日 (土)	のじぎく会館	自己開発のためのストーリーテリング(3) a.異文化体験学習 b.私の異文化体験について	奥田純子
7	1月12日 (土)	のじぎく会館	第二言語教育の理念と理論 a.国語教育、英語教育と日本語教育の違い b.第二言語教育の理念と理論	青木直子
8	1月19日 (土)	のじぎく会館	日本語支援法ー1 自己学習、自己学習支援について (ポートフォリオ作成について)	青木直子
9	1月27日 (日)	のじぎく会館	日本語支援法ー2 学習者のニーズに応えるための戦略ー1 実践演習ー1	尾形文
10	2月2日 (土)	県民会館	日本語支援法ー2 学習者のニーズに応えるための戦略ー2 実践演習ー2	高橋博子 許 智仁 後藤ひろ子
11	2月9日 (土)	のじぎく会館	「外国」から来た子ども支援の状況と課題ー2 自己開発のためのストーリーテリング(4) ～私の学校での体験～ a.総論・学校での日本語支援 b.神戸生田中学校からの報告 c.地域ボランティアからの報告	村山勇 樫木一彦 永安龍三郎
12	2月16日 (土)	ひょうご国際プラザ	「外国」から来た子ども支援の状況と課題ー3 他地域での先見実践について 「外国人の子供が抱える生きづらさをめぐって」 (1)「下福田中学での『選択国際』のとりくみ」 (2)「すたんどばいみーとわたし」 (3)「選択国際と中国人としての自分をえらんだこと」 (4)「選択国際と私」 (5)「運営委員会のこと」	柿本隆夫 CHUOP SARARN 西岡 歩 グエン ゴック ハオトラン 宮崎英理ほか
13	2月23日 (土)	のじぎく会館	(1) 講座を受けて考えたこと、「これからの行動計画について」 (2) 学校での支援活動について (3) 県内の地域日本語教室紹介 閉講式	人権教育課 長嶋昭親

(4)本講座の企画委員

	氏名	所属
1	由田克彦	兵庫県産業労働部国際局国際政策課
2	村上安弘	神戸市国際文化観光局国際推進室国際交流課
3	樋口正和	兵庫県教育委員会
4	久山悦孝	神戸市教育委員会
5	水野マリ子	神戸大学留学生センター
6	青木直子	大阪大学大学院
7	村山勇	神戸市立本山第二小学校
8	長谷武司	(財)兵庫県国際交流協会
9	酒井滋子	(財)兵庫県国際交流協会
10	岸本美紀	(財)アジア福祉教育財団難民事業本部関西支部
11	奥田純子	神戸日本語教育協議会
12	高森正雄	ひょうご日本語教師連絡会議
13	長嶋昭親	兵庫日本語ボランティアネットワーク
14	湯口恵	兵庫日本語ボランティアネットワーク

(5)受講生および修了生について

兵庫県教育委員会人権教育課、神戸市教育委員会指導課の協力を得て県内の小学校、中学校、高等学校へメールで案内をしていただいた。

兵庫日本ボランティアネットワークの個人会員、団体に案内をした。

その結果以下の通り受講希望者が集まった。

ア. 受講申し込み者 35 人(当初から出席しなかったもの 3 人を含む)

イ. 受講生の概要

- a. 性別 男 14 人 女 21 人
- b. 学校別 小学校 9 人 中学校 10 人 高校 14 人
中高一貫校 1 人 中高経験 1 人
- c. 年齢別 ~55 歳 8 人 56~60 歳 14 人 61~65 歳 4 人
65~70 歳 3 人 70~ 2 人
- d. 地域:淡路、社、佐用町、伊丹、尼崎、西宮、芦屋、明石、神戸などなど

ウ. 修了生 28 人 (男 11 人 女 17 人) 87.5%

当初から参加しなかったもの:3 人

途中辞退者:3 人

・皆勤 8 人 ・12/13:11 人 ・11/13:5 人 ・10/13 :4 人

エ. 修了生の会へ入会希望者 25 人/28 人

第1日目（11月24日） オリエンテーション

講師 兵庫日本語ボランティアネットワーク 代表 長嶋昭親

<本養成講座の背景>

H.19文化庁「生活者としての
国人」に対する日本語教育事業
託を受けて、退職（予定）教師を
に、日本語支援者養成講座を開く
たった。

本講座は兵庫県産業労働部国
国際政策課、神戸市国際文化観光
国際推進室国際交流課、兵庫県教育
会、神戸市教育員会、（財）兵庫
国際交流協会、（財）アジア福祉教



「外
の委
対象
にい

際局
局国
委員
県国
育財

団難民事業本部関西支部、神戸日本語教育協議会、ひょうご日本語教師連絡会議、兵庫日本語ボ
ランティアネットワーク、神戸大学留学生センター水野マリ子教授、大阪大学大学院青木直子教
授、神戸市立本山第二小学校村山勇教諭が企画委員となり、企画し実行した。

<養成講座の趣旨>

- ・ 小中高などいろいろな学校教育の経験者（20年から長い人で40年ほど）である方々が本講座に
応募し参加した。教師経験を生かし、地域の日本語支援活動や、近年非常に増加している外国人
児童・生徒への日本語・教科支援活動に関心を持ってもらい、支援活動に参加する手立てを自ら
構築していくことを目指す。
- ・ 養成講座受講者同士でネットワークを作り、日本語学習支援活動を行っていくとっか
かりを作ることを目指す。
- ・ 日本語学習を必要とする人たち、子どもたちの日本での社会的位置や、社会的背景などを知るこ
とで、グローバル化する日本社会の中でわたしたち支援者と彼らとの出会いが何を意味するかを
考えあう。
- ・ 学校教育と日本語支援活動との違いを知る。
- ・ 学習者のニーズがどういうものかを考え、地域の（生活者としての）「外国人」に対する日本語 学
習支援とは何かを考えあう。
- ・ 学習者とともに多文化共生社会・協働社会を作るにはどうしたらいいかを考えていく。
- ・ 阪神大震災以降、兵庫県では駅の標識が英・中・韓の3ヶ国語表示になるなどの多言語化がすす
んでいる。しかしまだまだ外国人が置かれている状況は厳しいといえる。われわれがどうやって
地域に住む外国人と手を結んでいけば、よりよい環境を築いていけるかを考えていく。

<今後の講座予定に関して諸注意>

- ・ 修了証：本講座 10 回以上出席された方に発行。
- ・ 気象警報がでたとき：午前 9 時以降に兵庫県南部（阪神・播磨南地区）に大雪・大雨・暴風警報が出ていた場合は休講とする。
- ・ 開講場所：2 月 16 日・2 月 2 日は県民会館 902 号教室（なお 12 月 16 日は HNVN の定例会とかねて「子ども支援の状況と課題」について行う予定）。2 月 16 日はひょうご国際プラザ（「外国」から来た子ども支援の状況と課題について、神奈川から講師を招き開催予定。なお実際に日本語支援教育を受けている子どもたちも参加予定）。

<兵庫県内の日本語学習支援の状況とその課題>

（１） 兵庫県内の在住外国人 （グラフ・データ等は添付レジュメ 2 ページを参照）

2006 年 12 月時点で 12 万 954 人と、人数はそれほど増加しているわけではない。韓国・朝鮮人の方々の割合は減ってきている（もともとは 60 パーセントほどあった）。中国からのニューカマー多い。特に日本人男性の配偶者として来日される方々が多い。

中国人配偶者を受ける背景…ブローカーを経由して 200 万円くらいの費用がかかるといわれている。中国人配偶者は、中国から前夫との間の子どもをと一緒に来日。その子どもが日本で学校に通うようになったり、母親がパートに出るなどして子どもの面倒を見ることができなくなったりすることで、彼らに対する支援が必要になっていく。こうした特長については 2 日目 3 日目に当事者や支援団体からの報告で触れる。

<2 回目の講座までに宿題>

Q1 日本語学習支援の対象者（生活者としての「外国人」）とはどんな人たちか？

Q2 兵庫県での生活者としての「外国人」の特徴は？

（２） 地域日本語教室および子ども支援グループの位置 （レジュメ 3 ページ参照）

この講座を受けた方々が、どのような役割を担うのか？

→詳しくは次回（2 回目）に考えていく。

<次のことを考えてみよう>

「朝青龍問題と日本社会の構造」について：

どうして朝青龍がマスコミからあれほどバッシングされるのだろうか？同じくマスコミからバッシングを受ける亀田一家との違いは何か？

亀田一家の場合…先輩・後輩の違いが厳しい日本社会において、先輩に対して敬意を払おうとしない（長幼の功を立てない）亀田兄弟はいわば世間の常識はずれである。しかしあと半年もすれば世間は亀田一家問題について忘れてしまうのではないか（長嶋さんの考え）。

朝青龍の場合…長幼の功や「やりもらい（おくりもの）」のしきたり等がある「日本という異文化」におかれた（特に、あるレベルの特殊技能をもった）人であるという状況がある。

「ハーメルンの笛吹き男」のように、日本相撲界で活躍するモンゴル力士を全員モンゴルに朝青龍が連れ帰ってしまえば、日本の相撲協会・世間は考えを改めるのではないかな？

参考資料

兵庫県内の外国人登録者数（地区別・主要国籍別）

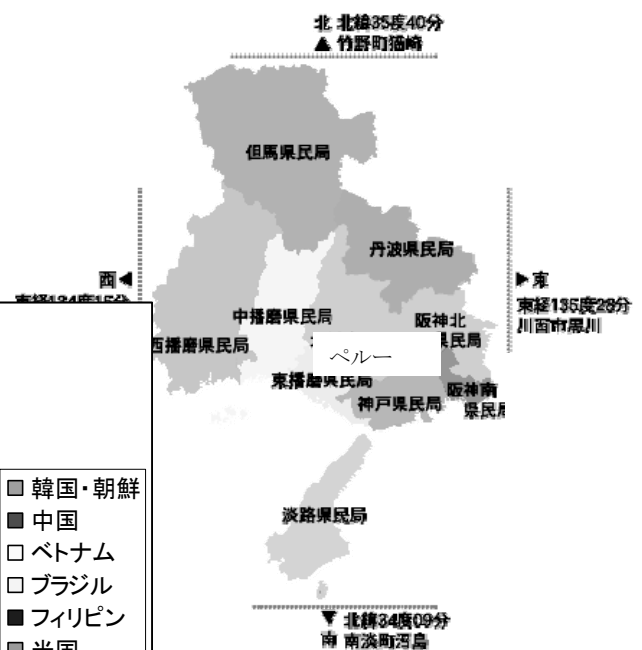
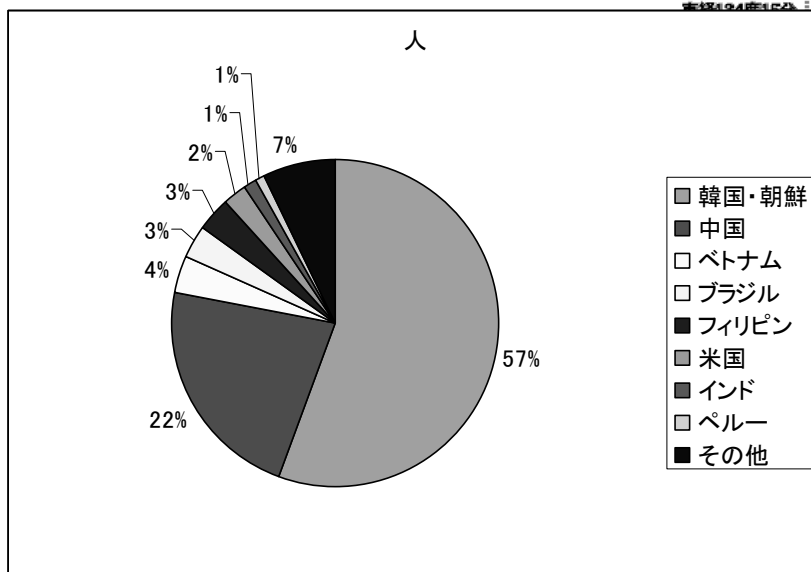
2006. 12 末現在

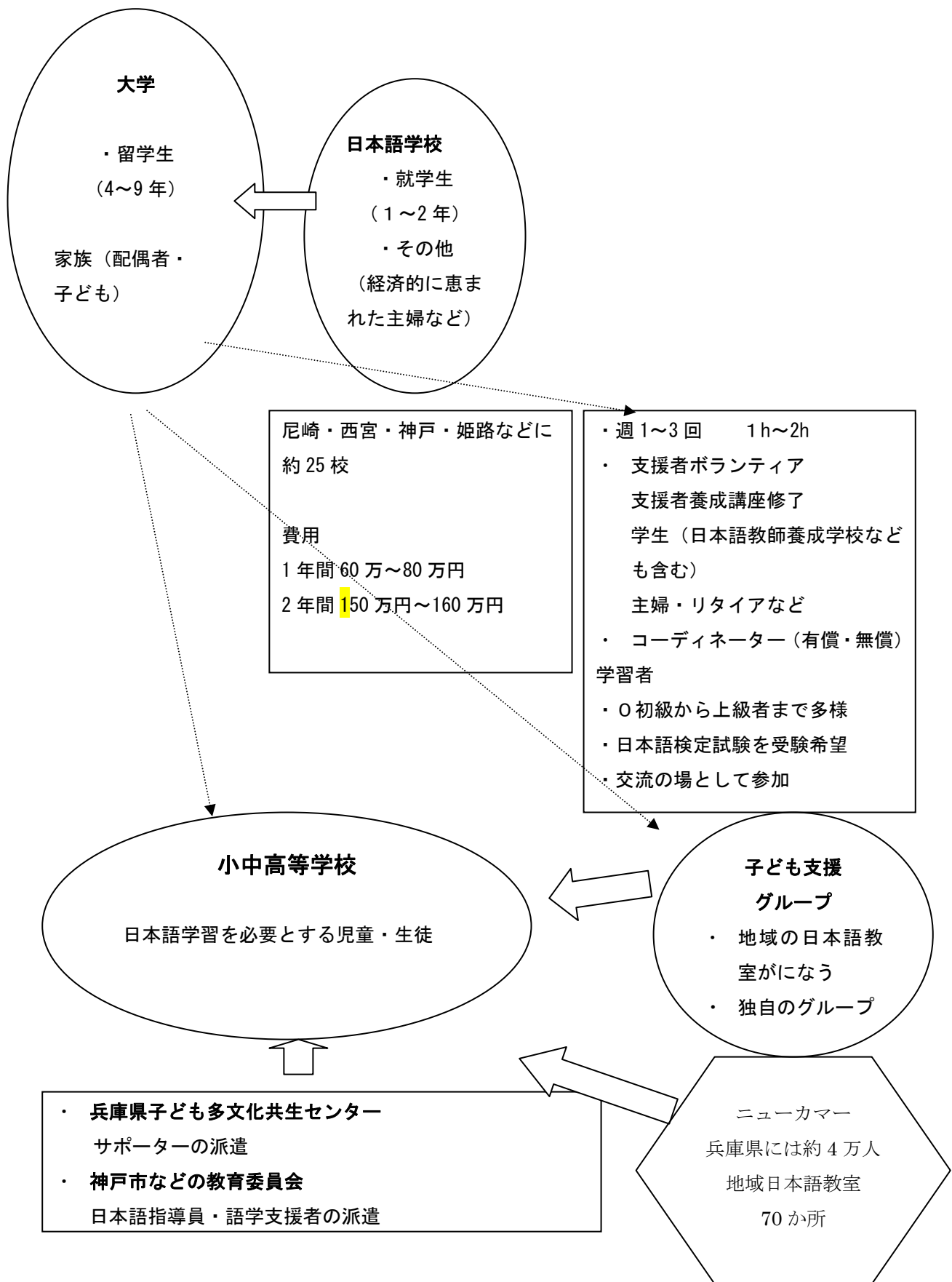
	合計	韓国 朝鮮	中国	ベトナム	ブラジル	フィリ ピン	米国	インド	ペルー
兵庫県	101,691	56,601	22,723	3,695	3,556	3,167	2,372	1,286	929
神戸市	44,099	22,803	12,606	1,253	658	838	1,269	1,057	226
阪神南	20,911	14,473	3,078	256	468	531	472	51	142
阪神北	9,262	6,842	1,141	76	443	145	237	41	39
東播磨	7,185	3,812	1,275	255	510	451	93	104	177
北播磨	3,559	1,020	1,028	172	613	237	84	2	112
中播磨	11,708	6,723	1,934	1,541	327	436	122	3	136
西播磨	1,869	796	452	49	93	107	45	20	64
但馬	1,198	170	624	7	89	166	33	0	5
丹波	1,302	189	440	71	314	166	18	0	12
淡路	598	173	145	15	41	80	19	8	17

兵庫県の特徴

- ① 韓国朝鮮人の割合が比較的多い
- ② ベトナム人が多い（神戸、中播磨＝姫路）
- ③ 日系南米人が点在している
- ④ 日本人の配偶者が点在している

兵庫県在住外国人国別構成比





自己開発のためのストーリーテリング（１）

～自己紹介（異文化ワークショップ）～

関西国際センター 非常勤講師 山田久美子

1 自己紹介…「語り」のための場を作るために

- ① 6～7人のグループに分かれる（5グループ）
- ② 自己紹介「グループメンバーの名前を覚えましょう」

- I 名前
- II 名前＋誕生日
- III 名前＋誕生日＋趣味
- IV 名前＋誕生日＋趣味＋好きな食べ物



2 「みなさん、なんでここに来たん？」…「語り」の場を構築しよう

- ① 4人グループに分かれる（8グループ）
- ② 「みなさんはどうしてこの講座を受けようと考え、この場所にきたのでしょうか？ここに来るまでに至った経緯を、ご自分の教育経験等を踏まえて、グループで語ってみてください。」
 - ・ 語る内容を考える時間
 - ・ 語る順番（誕生日順？）
 - ・ グループリーダーを決める（タイムキーパーなどグループ行動をしきってもらおう）
 - ・ 約30分の時間を「語り」の時間にあてる→グループリーダーにより、個人の「語り」の時間を微調整してもらおう。語りの長さ：1人約7分～8分の間
 - ・ 話し手の「語り」の途中で自由に、聞き手が質問等で割り込んできても構わない。
 - ・ あるいは「語り」の後で質疑応答という形でも可。話し手の好きなスタイルで語ってもらおう。ただし、聞き手の存在を意識してもらおうように指示する。

3 「みなさん、なんでここに来たん？」…みんなの「語り」を共有しよう

- ① 先ほどの自分の「語り」から考えられるいくつかのキーワードを付箋に書き込み、それをA4用紙に貼り付けていく。
 - ・ 付箋は長文防止のため、2cm×5cm程度の長方形タイプにする
 - ・ キーワードはいくつ書いても良い（できるだけシャープペンではなく、ペンで書いてもらおう）
 - ・ 「語り」にはふれなかったが、自分にとってのキーワードだと思えるものも書き込んでもらおう

- ② キーワードが書けた人から、自分の A4 用紙を壁に貼る（グループごとの机においておく？）
- ③ 全員のキーワードを共有する
- ④ 全体で感想・意見の交換

4【時間が余れば・・・】 講座の一覧表からみなさんが楽しみだと思える活動はどれでしょう？

******* 第1日「感想文」*******

- ・ とても役に立った。まず頑張りたい。
- ・ ちょっと不安だが頑張る
- ・ 不安だったが、自己紹介を通して少しずつリラックスしてきて、楽しい雰囲気になれたので、これなら続けられるかな？と思っている。
- ・ 本当に何の下地もない者ができるのか不安ながらも、これも挑戦と通ってみようと思う。
- ・ なんの予備知識も持たずに参加したが、これからもう少し頑張ってみようと思う。
- ・ これからの内容が楽しみ。
- ・ 同じ思いの仲間たちと一緒に頑張っていきたい。
- ・ 聞くだけでなく話す機会が与えられ、お互いに知り合えたのが非常によかった。
- ・ ステップアップの自己紹介は大変だったが、最低限同じグループの人の名前を覚えることができた（講師の先生の思惑通り！？）
- ・ 同じグループの人と親しくなれた。
- ・ 新しい出会いができて楽しかった。
- ・ 友人が増えて楽しみ。
- ・ 同じ意欲を持っている人々と知り合い、楽しく話し合いができて大変よかった。
- ・ 新しい出会いが未来の日本語教師ボランティアのネットワークにつながっていくことを思うと楽しくなった。
- ・ 13回ともにできる場を大切にしたい。
- ・ 楽しく学べてよかった。
- ・ 3時間が全く長く感じられなかった。
- ・ 最初はかなり緊張して参加したが、ストーリーテリングあたりから皆さんになじんできてとても楽しいひと時を過ごせた。
- ・ 受講者のみんなも穏やかで暖かそうな方々ばかりで、これからの講座が楽しみになった。
- ・ ほかの人の話を聞くのが楽しかった。
- ・ ワークショップは退屈せず楽しかった。
- ・ グループで語り合うなかで、楽しく皆とやっていけそうな気持ちになってきた。
- ・ すべてが初めての経験で新鮮な気持ちになれた。
- ・ 他人の話を聞くのは苦手だが、いろいろな人の話を聞いて参考になった。
- ・ 参加者の動機、目標を知ることができとても参考になった。

- ・ 多様な目標を持って皆さん参加されている。
- ・ それぞれ動機が違うけれど、それなりの目標が聞けてよかったと思います。
- ・ それぞれの方がいろいろな下地のある方なので、スタートが違っていることを実感した。
- ・ 肩肘張らずに、自分の生地そのまま外国の人たちと触れ合っていけばいいのかな、と思えるようになった。
- ・ 自分を見つめなおす機会になった。
- ・ なんとなく講座に参加したが「自分がどうしてここに？」が少しはっきりしてきたように思う。
- ・ 「なぜこの講座に？」を自分の言葉で人に語ることで、自分の思いがよりはっきりしたと思う。
- ・ 自分が早期退職にいたった経過を考えると、この講座を受ける時間や実際にボランティアできる時間について不安はあったが、皆さんのお話を聞いていて、自分のできることできる部分で活動したらよいのだと思った。
- ・ ストーリーテリングの意味の大切さが理解できた。
- ・ 心のバリアが取れたように感じる。
- ・ 教職経験者ばかりのためか、皆さんそれぞれの意見があり、本講座の趣旨や展開に不満（？）な方もいらっしゃるようで、親しく話し合うのはなかなか難しかった。一日本人という前に、一教師という姿勢でいいのか？と少し考えさせられた。
- ・ ワークショップ等はとても苦手なので、今回の講座は苦痛だった。もしかすると自分はこういうことに向いていないのかもしれない。
- ・ 自分のことを話すのはちょっと苦手なので、ちょっと苦しかった。
- ・ 緊張した。
- ・ 日本語の教授についてよりも、異文化とのふれあいが多いのだと思った。
- ・ 姫路でベトナムの人が多いらしいので、ベトナム語を教えてほしいと頼んだ。
- ・ 旧勤務地の職員と久々に話すことができとてもうれしかった。
- ・ 宿題が難しそうで、どうしようかという気持ち。

第2日目(12月1日)

題目：生活者としての「外国人」の現状と課題 「相談業務の現場から」

講師： RINK

木村 雄二

第一部 在住外国人（外国籍住民）の現状と課題

（1）はじめに

◇ 外国籍住民に関する〇×クイズ（略）

もはや、電車の隣の席に外国籍住民の方が座っていても驚かないような時代だが、分かっているようで分かっていないことが実際多々ある。

◇ 外国人（外国籍住民）の人口 2006年12月31日現在 外国人登録者数 2,084,919人

17万人のオーバーステイ…日本社会が彼らを必要としているという現状。

国際結婚の離婚率…約4割程度か。

兵庫県の場合…外国籍住民の数は全国的にも多い。128カ国。

◇ 外国人（外国籍住民）とはどんな人たち？

ことば？在日韓国朝鮮人は。肌の色？

サッカーの三都主は。→はっきりと区別できない。

◇ 受け入れの経過および関連する事柄

1980年代半ば～1990初頭

1990年6月1日

外国人労働者受け入れが社会問題として登場

入管法改訂

日系人受け入れ・研修制度拡大

27種の在留資格

1993年4月

研修生・技能実習制度開始

2000年

第2次出入国管理基本計画（経済・労働・人口政策）

研修生・技能実習制度拡大

2003年

超過滞在外国人25万人、5年間で半減の数値目標

2004年

経済連携協定（EPA）・自由貿易協定（FTA）交渉

DV法改正、国民健康保険法施行規則改定

2005年

第3次出入国管理基本計画（経済・労働・人口政策）

入管法改訂（旅券確認業務など）

2006年

入管法改訂（個別識別情報など）



→つい先日始まった、指紋と顔写真をとる制度。

◇ 労働力流入は「時の流れ」

国連試算（2000 年） 日本の人口が 2050 年 1 億人→2100 年 7500 万人に減少

経済水準を維持するためには 60 万人/年間が必要

日本経団連試算（2003 年）2025 年 には消費税率を 18%にする必要がある。消費税率を

10%で維持しようとする 610 万人が必要となる

だから、外国籍住民の数はこれからも増加していく傾向にあるといえる。

◇ 外国人（外国籍住民）を取り巻く社会

外国人労働者受け入れ状況…現在でも非常に少ないといえる。

過度な犯罪報道…外国籍住民が事件を起こした場合にそれが新聞に載る確率が日本人のそれより 4.5 倍くらいある。→特に根拠となるデータはないはずなのに、「なんだか知らないが怖い、気持ち悪い」という気持ちが生まれる。モラルパニックが起こる。

（2）どんな問題を抱えているのか

◇ 外国籍住民の全般的な問題

日本に住む外国籍住民は、多くの人が 4 つの問題を抱えている。

日本国憲法で保障されている「基本的人権」は外国籍住民は含まれない。

1 「法律や制度の問題」－管理の対象

- ・ 出入国管理および難民認定法
- ・ 外国人登録法（これも「管理」するためで、日本人の「住民票」は「国民の福祉」のため。）

2 「こころ（差別）の問題」－差別、偏見の対象

3 「ことばの問題」－必要な情報が伝わらない

ことばが小学生レベルでも、頭脳は大人。

→子どもがことばの出来ない親を馬鹿にすることもある。

ことばの問題が、命の問題につながることもある（阪神大震災、オシム監督の例）。

4 「社会的な問題」－被害者になりやすい対象

- ・ 人身売買
- ・ DV
- ・ 労働問題

→こういった問題の背景に「在留資格」がある。

◇ 外国人（＝外国籍住民）の差別・人権問題とはどういうものか？

「外国人である、日本人ではない」というだけで不利益を被る

① 日本人にはできて、外国人にはできない

- ・ 選挙権がない
- ・ 国家公務員にはなれない
- ・ 学校と認められていない（朝鮮人学校、ブラジル人学校→私塾扱い）
- ・ 国立大学入試を受けられない（現在は個々の大学の判断による）
- ・ 健康保険を作ってもらえない（人もいる）

② 日本人にはされなくても、外国人だとされること

→自分の身に振り返って考えると、非常に深刻な問題。

- ・ 外国人登録証携帯義務…もっていないと罰金
- ・ 入居差別…現在神戸でも裁判中
- ・ 就職差別
- ・ 入店禁止…「外国人お断り」と書いた紙が張ってあったりする
- ・ 仕事…単純労働の禁止・搾取・賃金未払い・突然の解雇・労災隠し
- ・ 家族…結婚しても一緒に住んでいないと「外国人」だけ帰国させられることがある
- ・ 医療…医者に見てもらえないことがある、勝手にエイズ検査をされたりする

第二部 相談ケーススタディ

◇ 相談例（ケース紹介）

（婚姻）在留資格がなくても日本人と結婚できるか、どうすればいいのか。

結婚を予定している相手が捕まってしまって、強制退去されそうだ。

（離婚）知らない間に離婚届が提出され、夫は他の女性と婚姻していた。

相手が離婚に応じない、親権の問題。

（子ども）出産費用がない、父親が認知しない。

子どもができた途端、夫の母から家を出て行けといわれた。

教育問題。

（死亡）単身で来ていた人が病死した。

在留資格のない母親がなくなって子どもが一人残された。

日本人の夫がなくなった。

（検挙）友人宅で料理をした帰りに、銃刀法違反で逮捕された。

（労働）建設現場で労働災害に遭ったが、会社は何もしてくれない。

低賃金労働に抗議をしたら、社長たちから暴行を受けた。

（医療）診察を拒否だれた、治療費が払えない。

（DV）夫の身体的暴力・経済暴力・在留資格・親権・文化否定

→問題の背景には「ことばの問題」が含まれる場合が多い。

→複合差別（外国人だから、女性だから、（日本以外の）アジア人だから）

→いまでは遺産相続問題等の相談も増えてきている

→在留資格に関する相談・・・夫の協力がないと在留資格が更新できないという現状

◇ 区・市役所等の窓口で問題のあった対応

- パスポートがないと外国人登録はできない。
- 在留資格のない人は、外国人登録はできない。
- 在留資格のない人は、入院助産の手続きはできない。
- 本人が来ないと婚姻届は受理できませんので、タイから奥さんと呼んで二人で来て下さい。
- 在留資格のない人の婚姻届は受理できない。
- 外国人登録していないと、婚姻届は受理できない。
- 外国人登録していないと、母子手帳は渡せない。
- 生活保護を申請すると在留資格の更新はしてもらえない。
- 日本に一年以上、いないと国保には加入できない。
- 韓国人と婚姻するのは考えた方がいい。大体がビザ目当てだから。
- (公用ビザ) 外国人登録していないと、国保に加入できない。

→実際に窓口で言われたことであるが、上記の諸事はすべて正しくない。
正しい情報を提供することが大切。

第三部 相談されたとき

(1) まず考慮すること…傾聴することが基本

- 相談者の最善の利益を考える
- 相談者の自己決定を保障する
- 相談者との信頼関係の構築
- 通訳者の確保

(2) 回答や解決方法がわからないとき

知らないことは自分で答えてはいけない→他機関にたずねて正確な情報を。

行政の外国人相談窓口／外国人支援 NGO・NPO 団体／弁護士会／医療機関／教育機関
／労働基準監督署／労働組合／大使館領事館／女性相談センター／行政書士会／

(場合によっては) 入国管理局！／その他

(3) 信頼関係の構築

- 守秘義務の厳守
- 問題に直接関係のないことについてはあまり聞かない。
- 確かな情報の提供

正確な情報をのみを提供する

- 言うてはいけないこと、してはいけないこと。

「もっと大変な人もいますよ」

「あなたにも問題があるんじゃないの」

「もっとちゃんと話し合ったら」

「～すべき」

「わたしが一番良い方法を考えてあげます」

「もう少し我慢すれば」

- ・ 問題からの逃避を勧める
- ・ 批判する

自分の役割の限界を知ることが重要。どう断るのかも一つのノウハウである。

(4) 個人的に深入りしない

ある程度の距離をとることが、関係の長続きにつながるのではないか。

第四部 課題の解決に向けて

◇ 多民族多文化社会共生は、人権尊重から

○ 国際人権基準に則った法制度の改善

人権尊重の視点にたつことがもっとも重要で、「世界人権宣言（1948採択）の文言をいかに生かしていくか。「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等である」

国際人権規約 社会権規約（A規約）自由権規約（B規約）1979

人種撤廃条約 1975 拷問等禁止条約 1999

女性差別撤廃条約 1985 子どもの権利条約 1994

○ 知識・情報の提供

- ・ 生活関連
- ・ 法律・制度問題

○ 社会的な変革

- ・ 日本社会の意識の変革
- ・ 地域社会からの変革

社会の意識の変革は一足飛びには行かないものではあるが、地域社会からの変革として、地域にいる同じ人間として、自分のできる範囲で、できることを。相手と同じ目線に立つことが重要である。

質疑応答

木村さんからの逆質問「アジアの友達がいる人は？」

↓

「日本人もアジア人である」という視点。

題目：「インドシナ難民とその家族について」

講師：NGO ベトナム in Kobe 代表 HA THI THANH NGA

0 はじめに

多い日で一日 30 件以上、日本全国から相談が寄せられる

↑日本にベトナム人が相談できる窓口があまりないことが原因

I 在日ベトナム人とは

◎ 難民・ODP について

- ・ ベトナム南部の人は南（マレーシア側）、北部の人は北（香港・中国側）に流れるのが特徴。
- ・ 長さ 10 メートル、幅 3 メートルくらいの船（帆船）に 100 人くらい乗り込んで亡命。
- ・ 難民＝お金がない？→実は、ベトナム金がないと難民にはなれない（亡命船には大金が必要なため）。
- ・ 最低限の物資（服 1 着等）だけもって亡命。
- ・ 75 年にベトナムを出て、他国の港についても 2 年以上も上陸を求められない難民もいた。
- ・ お金をたくさん持ったベトナム人の亡命船は海賊にあいやすい。
- ・ 難民が発生した 1975 年から 1978 年まで、日本政府はベトナム難民を受け入れていなかった。→インドシナ難民を受け入れることで、外国人が国民年金・健康保険に加入できるようになった。
- ・ 日本にきたら定住促進センター（政府）で日本語を学び、仕事を探し自分で生活（日本に定住）することとなった。



人はお乗るに

◎ ODP（難民者の家族 合法的に家族を呼ぶことができる制度）

難民・・・無国籍でパスポートを持っていない（代わりに再入国許可証を所持）

犯罪者のように取り調べられて、日本に入国を許されることもしばしばある。

通名の作り方・・・つけたい名前で宛名を書いてもらったハガキ・手紙をもらって区役所に届け出るだけ。

ODP（Orderly Departure Program＝家族呼び寄せ）・・・難民の枠で日本にこられるが、ベトナムの国籍を持っている。

◎ その他の在留資格のベトナム人

一般入国：結婚 留学 技術者 研修生など

働くために日本にくる人びと。

永住権は基本的に取れない。

家族を呼び寄せられる／られない、永住権が取れる／とれないなど、在留資格の違いによる扱いのちがいがたくさんある。

Ⅱ 在日ベトナム人の状況

ことば 文化 習慣の違い

- ・一番困るのがことばの問題。
- ・文化習慣のちがいによってもかなりトラブルが多い。
→見た目は日本人のように見えるかもしれないが、性格はぜんぜん違う。

【トラブル例】

- ・震災時に被災したベトナム人（神戸市に 700 人くらい）。
ベトナム人にとって地震は初めての体験で、家がつぶれた（戦争で家につぶれることには慣れている？）。「死ななくてよかった」「生きていてよかった」とまず考えて喜ぶのがベトナム人。「どうしてそんなに騒ぐのか？こっち（日本人）の気持ちがわからないのか？」と怒られた。
ベトナムでこういうことが起きた場合、政府は何もしないので、自分ですべてをやらなといけないと考えるのがベトナム人の本能。まさか日本政府が救援物資をくれるとは思ってもよらなかった。
- ・そのほかにも、女の子がピアスを空けたりするのはベトナムではよくあるが、日本では不良と扱われてしまうなど。

差別 就職 住居

家を探す・仕事を探すなどでいろいろな差別を受けた経験がある。
最近はこどもたちの就職差別がよくある。

低い進学率

大学にいても、結局は就職差別にあうので、進学しなくなる。

法律の壁

結婚しても、子どもを生んでも、ベトナム大使館・領事館に届け出ないことが多いので、大使館・領事館側が状況を把握していない。そのため、子どもが結婚する際に日本の区役所側に必要書類を提出できない。→ベトナム大使館・領事館は状況を把握していないにもかかわらず、お金さえ出せば証明書を発行するという状況。

親子の溝

親は帰化せず、子どもだけが帰化することがよくある（上記の就職問題などから）。
親は日本語が話せず、子どもはベトナム語が話せないため、親子の会話ができない。

母国の思い

子どもたちはベトナムについてよく思っていないことがよくある。

Ⅲ お願い

神戸にはいま 1,300 人ほどのベトナム人が住んでいる（ベトナム人だけではなく、43,000 人の外国人）が、「外国人」からみると日本はまだまだ住みにくい国。

なんらかの事情で生活しているベトナム人・「外国人」を受け入るという心を開いて、文化等を「知りたい」という気持ちを持ってもらいたい。「理解したい」という気持ちを持ってもらいたい。

題目：「中国帰国者への日本語支援の現場から」

講師：神戸外大「日本語学習を助ける会」ユニティ教室

中国帰国者日本語ボランティア協会

北川 秀子

1. 自己紹介

2002 年から 1 年間、神戸 YWCA の日本語教師養成講座を受け、ボランティア協会に入り現在活動中（今年で 4 年目）。

2. ボランティア活動の紹介

- ・ 活動日 月・水・金

午後 1：30～3：30

- ・ 場所 神戸市営地下鉄「学園都市」駅の隣 大学共同施設ユニティ 2 階

1987 年に設立（日中国交回復 1972、日府の肉親探しが始まったのが 1982 年）

学習者は中国帰国者 1 世、2 世、3 世と語学習に困っている外国人。



本 政

日 本

3. 活動内容

- ・ テキストと副教材

☆『みんなの日本語』

☆ 学習者のレベルに応じて教科書を変えている。

一世の方には、学習経験がない方もいるので、文型積み上げ方式ではなく、絵カードなどを使って単語レベルの概念から、日本での生活に困らない程度の日本語から教えている。

☆ 他にも協会が独自に作った教材ファイル（全 11 課）。

- ・ 学習形態

たいてい 1 対 1、または小グループ。学習者の希望に応じる。

- ・ 高齢者サロン「日本語大家族」

中国帰国者一世のための教室、国の新たな支援策。高齢者の一世（60～80 歳代）がさまざまな人々と触れ合える場所をつくる、という目的。現在、岡本でも同内容の活動をしている。

これまでの活動例：いけばな講習会、家庭菜園、芋ほりハイキングなど

これから：太極拳、習字

→このような活動のときにも、あつかう語彙を記したプリントを用意するなど、「日本語の学習」も含めた活動を心がけている。

- ・ パソコン教室など

情報化社会に取り残されないよう。

対象は帰国者の高齢者。

- ・その他の活動

ニュースレター、バス旅行、ボランティアの講習会 etc

4. 帰国者の自立と日本語学習の現状

- ・ 一世 60 歳以上の場合一家族を同行できる（国費）。中国帰国者定着促進センターで半年間、そのあと 8 ヶ月間中国帰国者自立研修センタ（現在は閉鎖）で日本語を学びながら就労相談を受ける。

自費で呼び寄せた家族は、すぐ仕事につかねばならず、日本語学習の時間があまり持てない。

生活保護を受けている（子供と同居すると受けられないため、基本こどもとは別居）。生活支援金がもらえる。

日本語の会話は達者だが、読み書きに自信がない、という人が多い。

「帰国後何年もたつのにまだ日本語が不自由な理由は、働くばかりで日本語を勉強するところではなかった」

- ・ 二世 13 歳未満…残留孤児、13 歳以上女性…残留夫人

30 代後半～50 代

日本での生活になれて早く働きたい、とおっしゃる方が多い。

単純労働に従事する方が多い（中国ではホワイトカラーでも、日本ではその技術・資を生かすことができない）。

昼は仕事・夜は勉強と頑張っている方が多い。

ストレスを抱えながら、働き続け、体を壊す人もいる。

日本語を困らない程度には話せるが、読み書きに自信がないなど、自分のニーズをはきりおっしゃる方がいらっしゃるので、そういう人には対応しやすい。

ずっと中国人の職場で働いてきている人の中には、来日 20 年が過ぎていても日本語が話せない人がいる。

家では中国語、日本語教室に来たときだけ日本語。地域の日本人の中に入っていけない、日本人の友達がいない、という現状。

- ・ 三世

学齢期にあたる小中高校生。2 世の親と一緒に来日し、地域の学校に入る。

あまりボランティア教室で出会うことは無い。

- ・ 帰国者の学習意欲

一世の方でも一生懸命日本語を勉強しようとする・・・「宿題をください！」

→これまで学習したい、と思っていたがそれがかなえられなかった

「日本語を勉強したい」という気持ちは、つまり裏返せばこれまで日本語に不自由を感じてきたということ。国の日本語政策の不十分さ。

5. ボランティアの役割

- ・日本語の習得→生活・就職につながる。
 - ・日本語支援の場であるとともに、「ほっとしたり、友達を作ったり、情報交換をしたり」という役割も担う。
- 何気ないおしゃべりも日本語習得のためになる。

*****第二日目感想文*****

<全体>

- ・知らなかったことが理解できてよかった。
- ・外国籍住民に関することをあまりできていないことに気づいた。
- ・全く知らなかった外国籍住民について、現状や課題がその一端でも知ることができよかった。
- ・具体的な課題と問題点の話が聞けてよかった。
- ・前回の宿題をどうしようか考えめぐねてきたが、今回の3名の方のお話や資料から、すっきり開放されたような気がした。
- ・在日外国人の抱えている問題はいっぱいあるのに始めて気づいた。
- ・在日外国人の直面する問題について、具体的な話を聞けてよかった。
- ・外国人の抱える問題がよくわかった。
- ・何事も知らない分野のこと、全く初めてのこと。この講座が初歩入門であることを願っている。知らないことを知るのはいかに興味関心がある。いいお話を提供していただいて、勉強になっている。片道2時間かけて受講を続けようと思う。
- ・この講座を受講してよかった。どんどん窓が開かれてゆく感じだ。
- ・在日外国人の話がよかったと思う。
- ・同じように日本に暮らしていながら、外国人というだけでずいぶん不利益を受けたり、不自由な思いをしておられるのだなと思った。知らなかったこともずいぶんあった。
- ・互いを理解しあう言葉の壁について考えさせられた。
- ・普段あまり考えていないことを教えていただいた。いろいろと知らなかった部分の一部が見えるような気がする。
- ・在日外国人について知らないことが以下に多くあることがわかった。たくさん考えさせられた。
- ・自分の生徒に中国から来た子がいるが、初めころは遠慮して生活していたが、言葉できるようになり、自信を持って生活できるようになっている。言葉の重要性を大切に感じた。
- ・学校の中で英語を学習している子供たちが、アジアの中の日本人としての意識が無いのに驚くことがある。でも今の日本の社会そのものは欧米人の対応の仕方と、アジア人へのそれと大変な違いがあるというのもよくわかった。
- ・流暢に日本語を話せる子供も、実際には文化がいろいろとわからなくて区別しているようだ。

- ・子どものころから身近に外国人がいて、共生しているという意識の無いまま育っていつて、気がついたら多文化・異文化共生ってこういうことだったのか・・・と気づくような環境を作りたい。
- ・レジュメを読むだけのものは自分でも読めるので退屈な感じがする。
- ・実際ボランティア活動に入ると、複雑な法律や問題にも直面することになるかもしれないと思って、容易に構えていられないと感じた。

<ハーティンガーさん>

- ・とても興味深かったし、よく理解できた。「難民」の実態がよくわかった。
- ・ベトナムの生徒の指導経験から、親の意識を新たに感じる事ができた。
- ・難民＝困窮者というステレオタイプを正されてよかった。
- ・ハーティンガーさんのお話は世界を広げてくれた。
- ・とても刺激を受け、外国籍の方が抱える問題を再考するきっかけになった。自分にできることを考えてみたい。
- ・自分の学校にもベトナム人の子供がいるが、在日ベトナム人の状況を知ることができてよかった。
- ・難民として入国して、日本で生活する人々の経過がよくわかり興味深かった。
- ・難民という言葉の意味を教えていただいた。自分が今まで抱えてきた難民ということとは少し違ったような気がする。

<木村さん>

- ・今の社会に持っていた疑問（？）批判と同じで、共感することばかりだった。
- ・クイズで8個も間違っしまい、いかに無知であったか改めて認識させられた。
- ・クイズには発見が多かった。
- ・最後の日本人もアジア人です、という言葉が印象に残った。
- ・結局、人権意識と法律の問題が大きいことを感じた。
- ・在留資格等、法的な規制についても詳細を教えてくださいとても参考になった。
- ・豊富な資料をもとにして、日本語講座を担当する上での注意点や、ニューカマーの定義など、いい勉強になった。資料も社会科で参考にでき、有益である。

<北川さん>

- ・経験に基づいた話がとても役に立った。
- ・中国帰国者への日本語支援ボランティアの活動、教授法、および一世・二世・三世の実態を垣間見ることができ、大変興味深かった。特に、助数詞ひとつについても丁寧に指導されているということが印象的です。
- ・日本語支援実態をより具体的に話していただき、大変参考になった。

<疑問・質問>

- ・改正入国管理法は、ほかの国にもあるのですか？
- ・外国人による犯罪の報道が増加しているが、件数は横ばいとのこと、報道のみが増加す

るのはなぜなのだろうか？

- ・ RINK の活動内容を、もっと詳しくお聞きしたかった。

第3日目（12月8日）

生活者としての「外国人」の状況と諸問題―2

題目：「日系労働者とその子どもたちについて」

講師： NPO法人 篠山国際理解センター 矢持 ヴェロニカ ミチコ

1 はじめに

<フォリナーサポーターとしての活動>

- ・篠山市内の小学校に通う子ども、あるいは子どもの親に対してサポートを行う。
- ・取り出し授業で日本語・学校のルール・コミュニケーションの方法を教える。
- ・日本にはじめて来たとき、戸惑うことがたくさんあった（電車のアナウンスが聞き取れないなど、日本語を勉強してきたのに何もできなかった、という自身の経験がある。）
- ・保護者に対しては、せめてひらがなを書ける・読めるようにサポート（ローマ字書きという手段もあるが、ブラジル人はローマ字が苦手な傾向がある）。
- ・小学校高学年・中学校の世代で来日した子ども→覚えなくてはいけない漢字の量が膨大。
- ・「やさしい日本語」で話してもらわないと理解できない（役所や郵便局など）→もう少し話し方に工夫を。
- ・中学生で来る子どもは就労が目的の子が多いが、日本では15歳以上でないと働けないため、それまでしょうがなく学校に通っている子どもも多く、日本語学習に意欲がないこともあるのでサポートが大変。
- ・ブラジルのどの地域出身かでも、学習レベル、日本へのなじみ度に差が出てくる（南北差）。
- ・小学校低学年で来る子供は日本語学習には問題はない。しかしいずれブラジルに帰ることが前提。日本語力アップ、ポルトガル語ダウン。→親子のコミュニケーションに問題が出てくる。



<外国人生活支援サポーターとしての活動>

あくまで「自立」を支援している→いずれは自分でできるようになってもらいたい。

- ・病院・市役所に行くときについていって、サポートするボランティア（ブローカー側の通訳で手が回らない人をサポート）。
- ・サポーター側でもわからないことがあって困ることがあるが、長年のサポーター活動を通して専門用語や通訳の仕方などがわかるようになってきた。
- ・市役所の市民課の担当者→外国人との接し方・法律など勉強してもらいたいことがたくさんあると思う。
- ・免許の取得について→ポルトガル語で免許書き換えの試験を受けることはできるが、新規で免許を取る際には日本語を使わざるを得ない→子どもたちの無免許運転につながっている。

- ・相談（税金に関して、保険の通知、役所からの通知など）も受けている（主に電話による）。
ふつう、会社に勤めている場合、社会保険などは会社側で加入させるはずだが、ブラジル人はそれを拒否することがある→出産時や病気になったときに莫大な金額がかかる。
日本人と結婚した場合にも分からないこと（保健師さんの家庭訪問など）がたくさん出てくる。
ビザの更新にもいろいろな書類が必要で、ブラジルから取り寄せた書類の翻訳などもサポートしている。

2 日系ブラジル人の現状

<篠山市の外国人登録者数(2006.12末)>

535人（兵庫県内で増加率が一番高い市である）

丹波地域（＋丹波市）あわせて1300人ほど。ブラジル人の数は約560人。

- ・来日するブラジル人の多くは、戦後ブラジルに移住した人の子どもだが、2世・3世までしか就労ビザはもらえない。現在は4世の子どもも多くなっているが、ビザが出ず20歳になったらブラジルに帰らなければいけない。
- ・日系人は何の問題もなく日本に適応するだろうという考えがあったかもしれないが、育ってきた環境が全く違うため日本の生活にすぐに適応できるということはない。
- ・自分の意思でなく親に連れてこられた子どもたちは、自分のいる状況を理解できないし、ことばの通じない、自分と同じ境遇の子がいない環境で一日の大半を過ごさなければいけない。→子どもの不就学、ひいては犯罪にもつながっていく。

3 日系ブラジル人が直面している諸問題

労働：雇用主とのトラブル（契約書の内容がわからずサインしてしまっ、あとでもめるなど）

→雇用主は契約書の内容を翻訳したものを用意するべきではないか

医療：健康保険に加入していない人が多い。医者もそれを考慮して精密検査をしてくれない、詳しい説明もしない。

住居：奥さんや子どもを呼び寄せた際、一緒に住めなくなったりするので自分で部屋を探さないといけないが、保証人の必要性・高い敷金の無理な請求などの問題がありなかなか難しい状況。

「外国人はルールを守らない」というイメージが付きまとうのか、外国人には住居を貸したくない傾向がある。

細かいルール（ゴミだしの方法など）は日本語で書いてあることが多いので、外国人には読めないという問題もある。

→国際理解センターではルールを絵で書いたもの、DVD等を準備している。

教育：篠山市では市独自のフォリナーサポート事業を用いている。

行政：市民課・税務課・国民保険年金課はよく同行する課。しかし年度が替わるたびに担当者も新らしくなり、諸手続きに戸惑うことが目に付く。

地域：労働時間の関係から、地域の人との接点は少ない。情報も入ってこない。

4 今後の課題 よりよい関係を築くために

<日本社会での自立を目指し、日本語会話の向上を図る>

- ・日本語教室を開いている。
- ・最近ではブラジルの食材が手に入りやすくなった。情報も手に入りやすくなっているなど、快適に日本での生活できるようになってきている。→日本語の習得の必要性が下がってきている

<地域住民としての自覚と参加>

- ・外国人に「納税者」になってもらうことが大切。→納めたお金がどこで、何に使われるかが理解できるように。
- ・地域とかかわりたいという気はあるが自分からは入れない、地域の住民も気になってはいるが、自分からは関わっていかないという状況がある。→外国人と日本人との交流ができる場を作る必要性。

<互いを理解しあう歩み寄りを>

- ・職場などで外国人と日本人の間に起きる「摩擦」がよく聞かれるが、これから日本にもどんどん「外国人」が増えていく時代において、お互いがお互いの文化を理解して、違いを認めるという歩み寄りがあって、よりより状況につながっていく。
- ・「ちょっとした気遣い」で変わることもある。

質疑応答：

Q：なぜ篠山にブラジル人がたくさん住んでいるのか？

A：ブラジル人は日本のどこで働くかは選べない（ブローカー側が決める）。大きな町ではいろいろお金も使うし、のんびりした環境で暮らせてうれしい、という声もある。

逆質問（講師から）

Q：ブラジル人のこどもを受け入れた経験について

A：（明石の小学校の先生）母親がブラジル人のお子さん。日本語もよくできたし、進学もよくできたという記憶がある。ボランティアが来て教えていた。

A：（芦屋国際中等学校の先生）オーバーエイジで両親ともに帰国した子ども。

学習に熱心に取り組んでいるという印象は受けるが、感じの問題が、思ったように学習が進んでいない。

「変な日本語を使うとみんなから馬鹿にされる」といった「プライド」を持っている子が多いので、そこをどうにかしてほしい。

A：（夜間中学の先生）義務教育8年を終え、日本で1年の義務教育を済ませ高校に進学したいという日系 2 or 3世の子ども。会話の進度は早い、書くことに問題があった。ちょうど震災時にあたり、学校に通えない時期があったが、自宅で学習を続け高校に進学、大学に進学した子もいる。

5歳くらいで日本に来て、会話はできるがいつまでも幼児語が抜けない、書くことが日本語でもポルトガル語でもできないというこどももいた。

→（矢持さんから）親が家で日本語が話せないため、ポルトガル語も日本語もどちらも中途半端になってしまう子どもがいる。ブラジルに帰っても勉強についていけず、学習に対してやる気が続かず学校を辞めてしまうこどももいる。日本でもブラジルでも教育に関しては問題になっている。

日本語ユーザー（フィリピン）から
「地域社会に受け入れられてこそ生活」

柏原日本語教室 「こんにちは」

子ども多文化共生サポーター

畑 ロレーナ

1. 日本で生活するフィリピン人について

◎ 日本に対する意識

- ・憧れの国、行ってみたい、生活がしたい。
- ・子どもが日本人と結婚する
＝家族みんなが良い生活ができる
＝家族が日本にいけるチャンスができる
- ・国としての出稼ぎ政策＝外貨獲得政策
→日本に来たい人が多くなる。
(フィリピンでは大学卒でないと仕事がない)



2. 多文化共生サポーターの経験を通して

◎ 子どもへのサポート

- ・母が日本で仕事→日本人と再婚→日本への呼び寄せ・・・突然日本での生活が始まる子どもが増えている。
- ・日本で勉強、生活するのはとても大変
言葉の壁→自分の気持ち考えを伝えられない。相手の言うことが理解できない。
ことばのかわりに手を出してしまう子どももいる。
- ・学習言語が分からない
- ・習慣の違いや価値観のちがいのトラブル
フィリピンでは細かな決まりは無い。
日本の給食の時間に家に帰ってしまう、外履のまま建物内にあがってしまう、ピアスをつけている、など。

◎ 保護者へのサポート

- ・保護者も日本語が十分でない
- ・習慣や考え方、価値観のちがい
親は子どもたちよりもフィリピンでの生活が長い。親にいくら注意しても直らない。
→子どもは親に宿題のサポート等をしてもらえない→学校に行かなくなる。
いろいろなストレスの中で生活している。
友達もいない、ことばも分からない
→同じ学校の保護者、地域の理解が必要不可欠になってくる。

3. 私にとっての「日本語教室 こんにちは」

- ・いろんな人とつながる場である。
- ・地域社会に出て行く場である。

「日本語ユーザー（韓国）から」

港島日本語教室 「こんにちは」

子ども多文化共生サポーター

許 智 仁

＊「日本語ユーザー」とは？

「日本語学習者」ではなく、日本語を学んで、その日本語を有用に活用しながら日本社会に参加している人という意味で用いる。

＊ 1999.10.来日

11月から港島小学校内の日本語教室「こんにちは」に週2回通う。

教材：新日本語の基礎（みんなの日本語）
中国人2人、ヴェトナム人1人、インドネシア人1人と一緒に勉強する。



＊ 2001

週1回日本語の支援を受ける。

いろいろな悩み事を相談できる支援者と出会い今でも仲良くしている。

＊ 2002

同じ団体で週1回日本語の支援を受ける。

外国で生活した経験があるのに、なぜか共通の話がない。

同じ人と人の出会いじゃなくなり、会いに行くのがつらくなる、続けられなくなる。

＊ 2003～

また「こんにちは」に通う。

日本語の勉強よりは悩み相談や支援者に会いたくて行くようになる。

＊ 2006～

兵庫県子ども多文化共生サポーターとして自己開発をしている。

日本に来る前は文化センターで週に3回日本語を勉強し、「これなら大丈夫」だろうと思って来日したが、長男が幼稚園に入ってから幼稚園の先生と連絡などで困難を感じるがあった。幼稚園のお母さん仲間から「こんにちは」を紹介してもらい日本語教室に参加するようになった。「受身」の授業から参加したが「やりもらい」の概念を支援者の人から何度説明してもらっても分からなかった。

韓国では「です・ます」形でしか習わなかったが、実際に使われている日本語はそれとは違って苦労した。文法的な日本語を勉強するよりは、日本人と話ができる日本語を身につけることが必要だった。ボランティアの先生と一対一が一番いいと思うが、ほかの人と一緒にやる場合、同じくらいのレベルの人と一緒に勉強するのが快適だと思う。

日本語だけで説明するよりは、漢字圏の人には漢字、英語圏の人には英語を用いて支援する、絵を使う、などの工夫が必要。

日本語は分かち書きしないので、一番やさしい教科書は子どもの本、と考えている支援者が多いが、実は辞書にないことば（オノマトペなど）が多く、実は難しいと思う。学習者と一緒に本屋に行き、教材を探すのがいいのではないかな。

◎ 文化の差異を感じることもある

- ・ 日本では正座をするが、韓国では正座はあまりしない。
 - ・ 韓国で女性は片ひざを立てて座るのが一般的だが、それをしたら「失礼だ」と怒られた。
 - ・ スープにご飯を入れて食べるのは日本ではしない。以前は子どもにも外ではやらないようにと教えていた。）
- 「それはだめ！」というのではなく「日本ではそうはしないから気をつけてね」といってもらえれば自分で調節ができる。

◎ ボランティア教室は「勉強する」場ではなく「日本語を話したり、相談をしにいく」場である。最初にあった週1回のボランティア教室で出会ったボランティアは自分と同じように子どもを持つお母さんで、いろいろ相談ができたし、自分が話すときにゆっくり聞いてくれて、「いい支援者」だと感じた。なんでも相談できる関係だった。相性があるボランティアの人の場合、「すぐに会いたいな」「またボランティア教室に行きたいな」と思うことがある。逆に話の合わない(自分が興味のある話しかないなど)ボランティアの場合、行きたくなくなる。なんだか姑と話しているみたいな感覚だった。

◎ 先生と学習者ではなく、人と人が話す場としてあるときに、ボランティア教室が楽しくなった。

◎ 長く日本に住んでいると、子どもの日本語が上手になり、話を合わせるのが難しくなる。日本の地理や歴史など、こどもから勉強の質問をされても、教科書も読めないしわからないことも多く、今は自身もサポートを受けながら勉強しようと思っている。

◎ いい支援者とは？→学習者の「辛いところ」がわかっている人。教材中心に勉強することも重要だが、「話すこと」を重要視してほしい。教材は「サザエさん」や「ちびまるこちゃん」などが分かりやすくいいのではないかと自身の経験から思う。

質疑応答：

Q：日本語は文脈が長くてわかりづらいというが？

A：主語がどこ？動詞がどこ？とぜんぜんわからなくなることが多い。英語や韓国語は分かち書きがあるのでわかりやすい。

Q：日本語と韓国語は似ているのでは？

A：文章の組み立て方は日本語と韓国語が似ているが、話すのはいいかもしれないが、長くなればなるほど分かりにくくなる。勉強し始めたときは「これはわかりやすい」と思ったが、勉強すればす

るほど分からなくなってくる。

Q：日本語の敬語と韓国語の敬語の違いで困ったことは？

A：なかなか使い切れないことが多い。

「日本語ユーザー（中国残留孤児一世）から」

神戸外大「日本語学習を助ける会」ユニティ教室

中国帰国者日本語ボランティア協会

澤 政道

＊残留日本人孤児の一世。

…終戦時で13歳以下で日本に残っていた子供。

澤さんは、1947年生まれで。終戦時に、中国は混乱状態で、日本人は仕事がなかなか見つけられない状況であった。澤さんが生まれたときはご両親はお金がなく、病院にもいけず、産婆さんも呼べず、8歳のお兄さん・11歳のお姉さんが出産を手伝ったという。母親も食べ物も食べられず、母乳も出ないため栄養失調に陥っていた。澤さんは中国人の養父母のもとに養子に出された。やさしい養父母に会って幸せだった。実のご両親・ご兄弟は澤さんの家にたびたび訪れてくれたが、それを知った養父母は家を引越し、ご両親と離れ離れになった。



文化大革命のあと、推薦で学校に入ることができた。1979年7月くらいに肉親を探し始め、1985年にやっと訪日でき、京都で肉親（母・兄・弟）と会うことができた。すぐに来日の手続きをし、1986年4月生活促進センターに入所し、4ヶ月間日本語の生活習慣、日本語を勉強した。しかし、日本語の勉強は不十分だったといえる。そして実家に移った。生活指導員が毎日家に訪れ、仕事を見つけろ、生活保護は国民の血税から出ているんだと説得を受けた。職安にいくと障害者の窓口を進められ、悔しく、屈辱的な思いをした。友人の紹介で見つけた仕事は給料も少なく生活補助（ママ）よりも少ない。職場は社長から社員までとてもやさしかったが、給料の問題でやめた。次の仕事はいじめにあいやめた。その次の仕事は日本語もほとんど分からない状態で、給料を左右するテストを受けさせられた。テストはよくできて、よい給料を受けることができた。そこでは1年ほど仕事を続けた。自分の話す日本語を直してくれる人はいないが、仕事に関することばは分かる。中国で身に着けた技術、知識をつかって、仕事を起こそうと思った。いろいろな人から支援を受け、自分の鉄工所を持つにいたった。

日本に帰ってきてから3年たったのことである。1992年に新たに工場を作った。その後大きく体調を崩し、しばらく休業した。新たに仕事を再開してから、事故にあい、左手を損傷した。何もやる気

がなくなり、日本語を勉強する気持ちもなくなった。マキノ先生から「日本語を進めてみなさい」というアドバイスを受け、日本語の勉強を再開した。なかなか勉強が進まなかったが、ある日テレビで水戸黄門の歌を聞き、長い間かたくなになっていた自分を反省した。中途半端な日本語、障害者の体の自分は、考えを新たにし、日本語を早く覚え社会に貢献したいと思うようになった。

60歳を超えた自分は時間がなく、いらだっている。今年に入り夜間中学に入学した。しかし、国語の勉強が40分なのが足りない。神戸外大の日本語教室に入りなおした。自分が考えていることをもっと伝えたいので、これからもっと勉強を続けたいと思っている。勉強はすればするほど難しくなる。勉強したことを自分自身のものにする、実際に使えるようにするのが重要。年をとり、衰えを感じ、反応も鈍くなっているの、自分の勉強を反省しなければいけない。知識が少なく、教材や辞書を手放すことができないが、話すことがとても重要だと思っている。できるだけ日記をつけ、先生にチェックしてもらおうなどの勉強もしていこうと思っている。

*****第3日目感想*****

<全体>

- ・ それぞれの立場から生の話を聞けて本当によかった。
- ・ 日本語を苦勞して学ばれていることに敬意を表する。
- ・ たくさんのことを知ることができた。
- ・ 日本語ユーザー各人からさまざまな話が聞けてよかった。
- ・ 支援者の役割として、語学学習の支援者に対しても相談相手としての対応まで求めていることを知り勉強になったと思う。
- ・ 相手とのコミュニケーションをとることにばかり集中して、相手が最後まで話すことを待たないということは、結構ありがちなことだと思う、自分でも字をつけようと思う。
- ・ 日本語講座の内容について、あいまいな状況で受講しているが、前回・今日とベトナム・中国・韓国・ブラジル・フィリピン、それぞれの立場からそれぞれの悩みを抱えながら日本語の習得に努力しようとする力強さを感じ、責任の重さを感じた。
- ・ それぞれの立場で日本に來られている話が有意義だった。
- ・ 今まで知らなかった日本の政策から、日系人の方々が來られて共生しているということをじかに知らされ、世界が広がった気がする。
- ・ 国々によって、習慣や生活が異なっていることは予想していたが、話を聞いて難しさを痛感した。
- ・ 中国・韓国・フィリピンのかたがたからの各々の経験からの日本語支援者に対するようぼうが大変参考になった。
- ・ 自分では気がつかなかった部分がたくさんあり、今日のお話は大変貴重な内容だった。
- ・ それぞれの国のユーザーの方の貴重なお話が聞けて大変よかった。
- ・ 自分自身に置き換えてみると、ことばも分からず外国で生活することになった場合、同じようなことが起きるだろう。もし自分がその国でもらいたいことは、今日話してくださった方たちと同じだろう。われわれ日本人は、これから外国人を受け入れる時期に來ている。考えかたも変えていかねばならない。うまく共生できるようにしていくべきだ。そのためにはことばの支援が

いかに大切か、できうる範囲の支援が必要だと思う。

- ・ 自国から外国である日本に来て、ことば、習慣の違いに苦労し、努力されてきたことがよく分かった。
- ・ 日本社会になじめるよう努力しながら、滞在が長くなると、こどもの教育の問題（自国のことば・文化を忘れていく等）などさまざまな悩みを持って日々暮らしておられることが分かった。単に日本語のサポートだけでなく、精神的な心に寄り添うようなサポートも大切なのだということが分かった。
- ・ ブラジル・中国・韓国・フィリピンそれぞれの国の話を聞かせていただいて、いかにことばの壁が大きな障害になっているのかということがよく分かった。
- ・ 母語の差も大きな問題になっているようだ。
- ・ 日本での生活をどうあるべきか、われわれ日本人でも親子関係の希薄な場合が生まれている中、大変苦労することが覆うのは同じだと思う。
- ・ 日本語ユーザーからの事例体験は、分かりやすく、苦労された実感がのぞけ、学ぶことが出来た。これからの研修態度に役立て、参考にしていきたいと思う。
- ・ 日本の支援態度の貧しさの実感と改善の必要性を感じた。
- ・ ブローカー業者の質の向上を。
- ・ 日本に来てよかった、永住したくなるような受け入れできる行政に力を入れてほしいと思った。
- ・ いろいろな国の日本語ユーザーの方がとても上手な日本語で熱心に話してくださって、ありがたかった。
- ・ 自分がいい支援者になれるのかどうか、自信はないが大切なことは人としてかかわること、本当に基本的なことなのだと分かった。
- ・ 具体的に問題点や、疑問点を話していただき、注意しなければならない事柄を知ることができた。まだ知っておかなければならないことがたくさんあるのではないかなと思う。
- ・ 生活者の声は体の中にずっしりと染み通っていく感じがする。
- ・ 日本語ユーザーの日本社会での多くの障壁、それに対する苦闘が少し理解できたかと思う。彼らが感じていること、考えていることにいつか寄り添えるようになればいいと思った。
- ・ 日本語を教える、という意識よりも、人と人としてこころを分かち合うという気持ちが大切だということを改めて感じさせられた。

<矢持さん>

- ・ 地域での活動がよく分かった。チャレンジだと思って取り組むことを教えていただいた。

<許さん>

- ・ 実体験に基づく話だった。痒いところに手が届くような支援を期待されているような印象を受けたが、多文化共生社会における対等な人間関係を築くためには① 待つ ② 相手の立場を考える ③ 相手の意向を聞く（こういう方法もありますよ）程度の言い方は出来ても、「こうしてほしい」というような自分の考えの押し付けはしないほうがいいと思う）ことが必要。要は、相手の性格。何を求めているのかを察知し、よく考え、理解したうえでの支援をすべきなのではないか？確かに国民性という一つの傾向はあるが、同じ韓国人でも生育暦や環境によって、性格も異

なるので、日本語指導、支援の仕方一つについても、一人一人よりよい方法を検討して対応しなければならないと常々考えている。

- ・ お父さん、お母さんを大切にせる教育を！その通りだと思った。
- ・ とても参考になった。日本語ユーザーが何を求めて教室に通ってこられるのかを理解することが大切だと思うのだが・・・自分に分かるのか自信ない気がする。
- ・ 許さんのお話は、これから支援を志すものにとっては、とても参考になるお話が多かったと思う。

<澤さん>

- ・ 長くサポートを続けていかれる熱意、日本に溶け込む努力は本当にこころをうった。澤さんのご多幸をお祈りします。
- ・ 60 歳という同じ年齢で、残留孤児として日本に戻られた澤さんは、本当に苦勞され、また日本に帰国しても努力されているお話を直に聞かせていただき、本当に学ばせていただいた。
- ・ 大変感銘を受けた。頑張る力をもらったような気がする。
- ・ 牧野先生の名前をきき、懐かしく思った。

<畑さん>

- ・ 突然、日本にきた子どもたちのいろいろなストレスの中での生活の重みが伝わった。
- ・ 日本語教室でのよかった勉強法がちょっと知りたかった。

第4日目 (12月16日)

「外国から来た子どもの状況と課題－1」

この日は兵庫日本語ボランティアネットワーク 2007 年度第 2 回研修会と同時開催し、地域の子どもも支援グループや日本語支援ボランティアと合同研修をした。

題目：「外国人児童生徒の思いから学ぶ、受け入れ、日本語学習、教科指導など」

講師：神戸市立本山第二小学校 国際教室 村山勇

<村山勇さん>

国際教室担当の前は、普通教室のち、港島教室のワールドクラスで 6 国際教室に関わって 14 年になる。



担当の年。現在、

<国際教室とは？>

- ・ 日本語力が必要な教科（国語・社会科など）の時間帯に、国際教室に来て勉強。
- ・ 多くて 7、8 人の児童（学年・本語能力ばらばら→本山さんがあわせていろいろと教材を準備する。）

国籍・日各人に

(1) 子どもと関わるとは？

子どもと接した事があまりない人の子ども感：子どもは天使である」「子どもは真っ白」？

→子どもも生活者の一員であり、天使でも真っ白でもない。「のりやすく、あきやすい」。

<子どもたちが国際教室にくと>

- ・ すごく甘える、あるいはすごく荒れるなど、普段は見せない特別な姿を見せる。
- 普段、ことばが通じずにたまっているフラストレーションなどを一気に発散させる。
- 同じ国の子ども同士、母語を使ってたくさんしゃべる。

↓

こういったことを受け入れ・共感しながらやっていく。しかしながら、子どもの言いなりにはならない。(子どもは教師を試してくる場合もあるので、ある意味駆け引き。主導権は教師側におくように)

- ・ 文化の違いも如実に現れるが、子どもによって出来ること、能力は異なってくる。

例) 日本人ならみんな空手ができるのか?? 中国人なら漢字がよく書けるのか??

→ステレオタイプで子どもを見ない。

→エポケー：判断留保（すぐに判断をせずに、少し待ってみる）

- ・ 無意識のうちに「日本化」「同化」教育が行われているという感想を持つ子どももいる。

→相手の文化の尊重という視点を持つことが重要。

(2) 外国人児童の保護者の来日の理由と意識、生活（子どもたちの来日の背景）

- ・中国・ロシアの残留孤児・婦人の家族。→国籍上は日本人だが、文化背景は全く異なる。

「中国語（普通語）」や「筆談」で大丈夫？と思うかもしれないが、実はあまり通じない。

- ・ブラジルから来た子どもたち。

ブラジルはポルトガル語ということを知らなかったり、文字をみてポルトガル語と認識できなかったり。→文化的・言語的に大きく異なる。

神戸では東灘近辺に日系の人たちが多い。

- ・国際結婚。日本人男性と結婚したフィリピン人女性。結婚して2，3年後、フィリピンにいる自分の子どもを呼び寄せるというパターン。

→家庭も学校も子どもにとって安らげる場所ではない。

- ・留学生、ビジネスマンの子ども

→いずれ帰国するのが前提なので、日本語の勉強もしなければならぬが、帰国後のことも考えて、母語の勉強もしなければいけないという状況。板ばさみ。

子ども・・・日本語ができなかったり、見た目が日本人ではないがために、言いようのない不安（いじめを受けはしまいか、など）を覚える。

親の生活・・・派遣会社の厳しい管理、長時間労働（朝の5時か～夜の9時など）

→子どもの面倒がほとんどみられない、日本に来るために作った借金、同じ国同士の人でも仕事の面で心が許せない、日本語ができなくても、できすぎてだめなど。

教育・・・親の都合で帰国の予定がずるずると延びていく。転校など。

<資料1「K少年院」のケース>

島本篤エルネストさん（神奈川県教師）が久里浜少年院に行ったときの話。

入院者の中には外国人の少年が多いが、彼らにインタビューすると「もっと日本語を勉強すればよかった」という答えが返ってくる。「日本語が分かれば、今こんなことはしていない」。また、今やりたいことは？の質問の答えは「日本語を勉強したい」。

→これから外国人児童に関わっていく人は、これだけ重要な役割を担っているという意識をもってもらいたい。

実際の実践例：「その子を紹介しよう新聞」（資料＝略）

「ペルーのいせき新聞」写真や情報はインターネットですぐわかる時代なので、情報を大いに活用して、クラスや学校などにどんどん紹介していく。

→みんなが知ることで、今までよく知らずに遠い存在だったのが近い存在になっていく。

(3) 外国から来た児童生徒の状況

- ・「義務教育ではない」をどのように捉えるか？

受け入れたら日本人と同様に扱う。しかし「同様」とはいったい何か？

→お知らせは日本語、テストもみんなと同じで日本語、これは同様ではない。

テストは出来る限り子どもの母語に翻訳したものを与える、など「子どもにとって利益になること」を同様に与えていく。

- ・ バイリンガルだからうらやましい？→実は「ダブル・リミテッド（母語も日本語もどちらもできていない）」ということがある。
- ・ 来日年齢と進学の関係
 - 10 歳くらいで来日した子が一番進学する率が高い。
 - 5 歳くらいで来た子は学校教育を受けていないし、母語の基礎もできていない。
 - 13 歳で来た子の場合、中学校で学ぶべき膨大な内容に追いつかない。

（４）受け入れの実態

- ・ 「個性を育てよう」というスローガンがあるが、実際には「みな同じであるべき」という圧力が存在し、親も子どももストレスを感じている。
- ・ 学習スタイルのちがいの存在：「手で書いて覚える文化」（日本、東アジア）「耳で聞いて覚える文化（メモを取らない、目で見えて覚えるなど）」（ラテン）の違いも存在する。
例）割り算の書き方も国によって異なってくる！

（５）学校でよくある意見

「日本語ができないからといって、特別扱いほしない」「テストや教科書の翻訳はしない」？

→特別扱いと「必要な配慮」とは違う。

テストは翻訳をされたものを出す、母語で発信するという努力をするべき。

（６）小学校全漢字集七ヶ国語翻訳&教科学習用語について

（財）兵庫県国際交流協会（H I A）のホームページからダウンロードできる。

英語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、タガログ語、ベトナム語、韓国・朝鮮語の 7 か国語で、漢字熟語集、算数、理科の用語集

題目：「小学校での実践報告」

講師：兵庫日本語ボランティアネットワーク

神戸市立 T 小学校日本語支援ボランティア

長嶋 昭親

(1) 小学校での支援について

4年前から T 小学校で日本語ボランティアとして T 小学校で支えている。6年生のロシア男児、2生フィリピン男児、そして今年度らのフィリピン女児、イスラエルのダブル男児、9月からのエジプト5年生姉妹。いずれも週1回1～取り出し、あるいは放課後指導を



支援ボランティアをし～3年4月かと日本ト4、2時間行った。

① 生活言語の習得の速さと不確実性

この8月にエジプトから来日してきた女子児童姉妹（4年、5年）は生活言語を習得し3ヶ月半で次のようなことばを話す。

- ・ほんまに ・あつ、もう ・おらあ ・めっちゃ好き ・なんでやねん ・くそばば
- ・お前 ・関係ない ・なんじゃこりゃ ・さむすぎる ・まじい
- ・あほ・・・

→日々の学校生活から身に付けるけたものである。

村山さんのリソース集（前述）の使用、家庭での学習で3年生までの漢字はすごく上手に書けるようになった。

けれども、自分の思うことを自由に話せないことにもどかしさを感じ、姉妹で叩きあいになることがある、

(2) 高学年と低学年との支援のありようの違い

母語の浸透度の差により、必要とされることも支援も異なってくる。

上記のエジプト姉妹は母語のアラビア語が確立しており、家庭では、エジプトの教科書学習を行っている。

だが、1年生の下記の例にあるように、Sは母語が確立していない。Aはほぼ確立しているという違いもあり、支援内容も柔軟に考える必要がある。

(2) T 小学校での実践報告:二人の1年生のこと

	S	A
性	男	女
国籍	イスラエルと日本のダブル	フィリピン
在日歴	生まれ：日本 2年後：タイ 2年後：イスラエル 今年3月：再来日	2年前来日 保育園から小学校へ
日本語の能力 出会った時	出会った時：0	生活言語ができ、ひらがなが書ける
母語	フェブライ語：少し もう忘れかかっている	タガログ語 祖母・両親との会話で使う
母語以外	母の英語が分かる 母が家でできるだけ使うようにしている	英語を習いに行っている
支援	・ サポーター：(英・フェブライ) 1/w ・ 学習支援：神大学生（授業）1/w ・ 学習支援：長嶋(放課後)1/w	・ 学習支援：長嶋(放課後)1/w
現在の状況	・ 生活言語はほぼ習得 ・ あいうえおが完全に読めない ・ 漢字の一部の読み書きができる ・ 算数のたしざん・ひきざんはできる ・ 物事の認識力はAとかわらない ・ 模倣力がある	・ 学校生活に支障はない ・ あいうえおアイウエオ学習漢字すべて習得 ・ 算数のたしざん・ひきざんはSより少し速い
発達のあと	・ 最初に絵をかいたとき、形にならなかった(第1言語の確立ができていない) ・ 9ヶ月たって、自分のイメージの絵が形になって書くことができるようになった ・ 鏡字があったが、今はなくなった	放課後の学習時に自分の思いを話すようになった お母さんが妊娠していて、妹がほしいなど
学校との連携	大まかなことしか話し合えない (担任が12月に産休に入る) ・ 2学期当初に取り出しはしないで、クラスの中での指導を中心にする ・ 私の支援は放課後にする	大まかなことしか話し合えない (担任が12月に産休に入る)
困難点	あいうえおアイウエオを習得できない	・ 自分の思いを作文に書くまでできていない

	S	A
救える点	自分の言いたいことを主張できるようになった 例：「はさみとのりを職員室へ取りに行つて」というと「なんでぼくだけ、きょうは君がいけよ」といい、結局3人でじゃんけんした。	- Sや私に対して、要求ができる。 例：「ずうと、ずっと大好き」での役割学習で「わたしは犬をする」といい、それ以外はゆずらない。 - Sに「ちゃんと勉強しなさい」といい、分からないところを教える。

(3) ずうと、ずっと、大すきだよ（光村書店 国語下）の実践例

- ・週に1回、あまり活動時間が取れない中での実践。
- ・小学校では6時間くらいかけて扱っているものを、1時間でやらなければいけない。
- ・学校の授業に先行する（予習）か、学校の授業の復習になるのかはまちまち。
- ・この教材では「成長」「死」「愛情」とはどういうことかを学ぶのが目的になる。
「成長」→実際に活動時に保健室で身長をはかってみる。
「死」→身近におこった「死」（おじいさんが夏になくなった）について話してもらう。
- ・教科書からスキャンしたイラストを、はさみで切り取り、話の流れに沿ってのりで貼り付けていくという作業をおこなった。
- ・そのあと、教科書の文を読み聞かせをする
- ・Sはぼく、Aはエルフといったぐあいに役割分担をし、反芻して内容を理解させる。
- ・Sは絵を細かく観察し、読み聞かせ時にほぼ正確に内容を把握できた。

(4) 地域子ども支援グループ「こうべ子どもにこにこ会」でのSへの支援状況

S君との活動の様子（ゲストスピーカー：竹中さん：「こうべ子どもにこにこ会」）

S君は来日当初は精神的に不安定な部分があるのが、みてもわかった。子どもたちに「家・人・木」の絵を描いてもらい、それを心理学の先生に診てもらうことで、その子どもの状態などをはかろうという活動を行った際、S君は絵を描くことができなかった。来日9ヶ月たって今では落ち着いて、絵を描けるようになってきた。ひらがなカタカナは読むことは出来ても、書けない。漢字はすきで、学習意欲もある。「文字ってなんだろう？」ということに必要性を感じていないから、今のところひらがなカタカナに興味がないのだろうと思う。Sくんの興味を引き出すように（スタンプをあげるなど）工夫をして支援活動をしている。Sくんの家族とのお付き合いもとれている。

(5) 課題

- ① 学校、地域支援グループ、日本語支援ボランティア（私）との連絡があまり取れない。
- ② 週1回の支援では、ほとんど何もできないというのが現実である。

題目：「中学校での実践」
～数学で出てくる日本語をどう教えるか～

講師：神戸市立生田中学 JSL 指導員 久永 雄介

(1) はじめに

神戸市立神戸生田中学・・・兵庫県下では唯一 JSL 指導体系が出来ている学校である。

神戸大学の水野教授のプロジェクト（2003 年から）により始まった。

生活言語は出来る（友達とは話せる）が授業の日本語がわからないという生徒や、自分の国では得意だった科目でも、日本では学習言語がわからないために、あきら



めてしまう生徒に、学校で先生の話が聞ける、質問が出来るように支援をしていくのが目的。

(2) 神戸生田中学の JSL 指導システムとは

- ・ゼロ初級のこども対象。早い子で4ヶ月、長くても半年で日本語を教える。
- ・月から金まで放課後毎日 90 分の日本語授業。
- ・日本語学習終了後は、希望者に教科指導。
- ・現在教室に通っている生徒 12 名、ボランティア 7 名。

(3) どんな生徒に教えているか

日常の日本語はほとんど不自由なく、友達も出来て学校生活を楽しんでいるが、授業中先生の説明の言葉がわからず、何を言うているかわからなくなる。テストがあるといい点が取れない。母国ではかなりいい成績であったのに・・・。

【原因】

- * 母国での学習進度やレベルの速い。
- * 数字や記号は同じだが、日本語で言われるとわからない。（学習言語）
- * テストの問題の日本語が読めないのわからない。考えているうちに時間がきてしまう。
- * 「証明しなさい」・・・日本語で書けない。母語でなら書ける。

(4) 日本語ボランティアの役割

- * 生徒が数学の授業に参加できるようにする。（先生の話がわかり、質問したり質問に答えたりできる。）
- * 数学に対する勉強意欲を失わせない。（テストの成績を少しでも向上させる。）
- * 数学を通して日本語を向上させるように心がける。

(5) どう数えているか

- * 教科書を徹底的に音読させ完全に読めるようにする。(漢字圏、非漢字圏の生徒を問わず) …日本の漢字を日本語で読んで音を覚え、漢字をイメージすることで意味を推定できるようにする。つまり先生の話聞いて(音を聞いて)内容がわかるようにする。
- * 数学の用語や表現を、生徒がわかる言葉に言い換えて理解できるまで説明する。
- * 絵や図を書いたり、現物(三角定規や分度器、コンパスなど)があれば提示して理解を助ける。

【具体例】

教科書「未来へひろがる数学 3」(添付コピー＝略)

- * 音読させて読めない漢字に振り仮名をつけさせ、もう二度読ませる。
- * 2乗する…同じ数をかけること…「乗」はかける 「 $\times$ 」という意味であること。
- * 「正の数」「負の数」…正の数は $+a$ のこと。負の数は $-a$ のこと。(＋や－は符号という) 符号を取った a だけを「絶対値(数)」という。
- * 平方根はだからいつも正の数と負の数と 2 つある。(－ $\times$ －＝＋であるから)
- * 「 x の値」とは x の答(数)のこと。「値を求(もと)めなさい」は「計算して答を書きなさい」という意味。
- * 正方形は 4 つの辺 (へん＝線) が全部同じ長さで、4 つの角が 90 度の形。…では正三角形は…三辺が同じでそれぞれ (ひとつひとつ) の角が 60 度の形。
- * $\sqrt{\quad}$ は平方根の記号(きごう)

読ませる $\Rightarrow$ 分かるまで言葉を変えて説明 $\Rightarrow$ もう一度読ませる

(6) まとめ

外国人生徒に数学を教えるということは、まず「数学にでてくる日本語を教える」ことだと思います。それには数学の教科書が日本語で読め、理解できるようにするのが一番の早道だと思います。

日本語による先生の授業も試験問題も、漢字・かな交じり文を「音」で表現するか「文字」で表現するかだけの違いです。「音読」は両方の力を育てると考えます。音読による日本語の慣れが教科を理解させる早道だと思います。

ボランティアの心得

・ボランティアが教科(数学)そのものを教えたり、解法のテクニックを教えるということはやっていない。ボランティアは「教科(数学)で必要となる用語・日本語」をわかるように教えていく。

教科で必要になる日本語をどうやって教えていくかは、どの教科かにかかわらず共通。

→「教科書を徹底的に読めるようにする」のが第一歩・・・「ルート」や「へいほうこん」という音を聞いて「 $\sqrt{\quad}$ 」につながるように。

→学校で使っている教科書を教材に、まず読ませて、つかえた部分にふりがなをふるように徹底

して指導していく。

漢字圏出身の生徒の場合：文字を見てほしいの意味が分かって、声に出して読めい。つまり授業中先生の話していることがまったく理解できないことと同じ。

実際の指導例：「平方根」の資料参照

読めなかった、分からなかったことば・・・約 20 個。

「平方根」を「へいほうこん」と教える。

「学びましょう」を「まなびましょう」と読みを教え、「勉強しましょう」という意味だと教える。

「正の数・負の数」を「せいのすう・ふのすう」と読みを教える。

「つまり」を「いいかえると、別のことばでいう」という表現だ」と教える。etc・・・

教科書を徹底的に読めるようになることで、子どもたちが授業で先生が話していることが分かり、何をやっているのかが理解でき、分からないところがあったら質問が出来るようになり、生徒は「数学って分からないから嫌い、やりたくない」ということにはならず、自然と勉強にも熱が入るようになるし、ひいては日本語全体のレベルも向上していく。

ワークショップ

- ① 教職経験者は小・中・高校別々に
ープに別れ（約 10 グループ）、そ
現在日本語ボランティア活動に関
ているボランティアが数名ずつ加
グループを形成。
- ② 教職経験者は自分の学校で外国籍
児童を受け入れたときの経験、悩
みや、ボランティアは日ごろのボ
ランティア活動で感じる思いや悩
みなどを出しあう。（約 25 分間）
- ③ それぞれのグループで悩みの「キーワード」のようなものがあれば、それをポストイットに書き
出していく。
- ④ 各グループで発表



グル
こに
わっ
わり

外国から来た子どもたちへの支援「困っていること」キーワード

- ・ボランティアと生徒と親との連携
- ・個々の子供の問題点がわかりにくい
- ・多文化共生・日本語ボランティア・学校の調整は？
- ・学校との連携が無い。
- ・夏休みにボランティアが少ない
- ・一週間に 2 時間しか勉強の手伝いができない
- ・一人一人に合わせられない
- ・一クラスの人数が多い
- ・宿題の問題
- ・学校での様子をできるだけ聞かせてほしい
- ・予算の問題
- ・親の経済によって大きく子どもの教育が異なる
- ・ニーズが何か
- ・学校の指導体制が学校によって異なる
- ・支援体制
- ・学校と保護者の連携
- ・地域ボランティア団体と学校の連携不足
- ・情報交換の場が少ない
- ・学校で子どもの母語がわかる教師がいらない→サポーターに支援してもらえないとどうしようもない
- ・今の学校に該当の生徒はいない
- ・淡路島でも民間による「日本語サークル」があることがわかった
- ・地域の実態を知ることから始まる

- ・ 中学校で年度途中でいきなり日本語が全くわからない生徒が転入したらどうするか
- ・ 日本の歴史は日本人の親なら誰でも知っていることでも、外国からの親はそうではないので、話がかみ合わなかったり、宿題を教えることができない
- ・ 公の援助が足りない→金銭的な問題への対応
- ・ 各ケースに対応した学校があれば・・・
- ・ 時間が限られている
- ・ 人が足りない
- ・ 支援の限界
- ・ 家庭の機能不全
- ・ 学習意欲を消失した子に意欲を持たせたい
- ・ 学校に、保護者へのサポート・母語支援のサポートを要請、対応が難しい
- ・ 中高生に対して、ひとりで全教科もサポート
- ・ 教科学習に追いつかない
- ・ 学校：たくさんの生徒がいる中で手が回らない、ボランティア：対応時間が限られている→ボランティアの不足
- ・ 多数のボランティアのスケジュールの調整は？
- ・ 中国からの生徒は日本語がわからないが、英語が得意→中国では出身地によっては英語で指導
- ・ 中国でも日本語熱→日本についての知識がある人は、児童生徒が図書館を利用する人が多い
- ・ 子供は日本語ができるが親はできないので、子と親とのギャップができています
- ・ 中学生の高校進学
- ・ 進路
- ・ 就職の際の入管法

*****第4日目感想文*****

- ・ ボランティアと学校の先生との連携がうまくいっていない。
- ・ ボランティアで学習指導をしているか、でたり入ったりしている生徒のため、学習段階が身につけていない。どこまで教えたらいいか、悩みが多いようである。
- ・ 子どもの日本語能力習得は、親の学習意識も多く影響してくる。
- ・ 生活言語と学習言語とのちがいが、大きな問題になっているようだというのが、話を聞いていて分かった。学習言語の教え方とは特に専門用語の問題の説明は大変だと思った。
- ・ いろいろなところでサポートして、日本語に不自由している子どもの力の向上に尽力しておられることを知り、心強く思った。
- ・ 三人の講師のお話は大変参考になった（事例が多く示されわかりやすかった）
- ・ 日本語を教えることも難しいし、外国人に文化の違いも扱うのは、とても指導するのは難しいと思った。
- ・ 講義の内容がますます具体的な現場の話になってきたので、その困難さと手立てについての知識

を深めることが出来た。

- ・ 今回はとくに子どもにたいして教科書が読めるように指導された話を聞いて感じ納得できた。
- ・ この講習を通して、学校の体制が全くといっていいほど整っていないことに強く不安を感じるようになった。
- ・ 支援の実態が少し理解できた。個々についての支援が出来るようにするための努力が出来ればいいと思う。
- ・ 実際にボランティアに携わっていらっしゃる方の個々の問題点に触れて、大変な仕事だと思った。いろいろな場面に対するノウハウはその場に即して熱意で工夫されているのがすばらしいと思った。トラブルの根は異文化もあるが、人間共通の心の充足に帰することも多いと思った。
- ・ 子どもが日本語を話せるようになることと、学校での学習が理解できることとは同じではないことが分かった。
- ・ 学校で日本語支援がなされないことは、日本語能力を伸ばしたり、深い内容を理解するために大きなマイナスになっており、日本人の子どもとの間に差が出てくることが多いことが分かった。
- ・ 日本と母国をいったりきたりしている子どもにとって、日本と母国との教育の違い、ことばの違い等があり、なかなか子どもにとって厳しい状況になっていることが分かった。
- ・ 日本語が分かる子どもが病院などで親との間の通訳の役目を担っており、そのために学校を休まなくてはならないなどの問題もあることが分かった。
- ・ 高校にはいきたいが、漠然としたもので、目線とかもしっかりしておらず、家庭でも親も高校について分からず、そのことを自然な家族の話題にすることもない、ということが分かった。
- ・ 実際に子どもたちに日本語を教えておられる方のお話は大変参考になった。課題の一端が理解でき、なかなか解決は難しいとは思いますが、こつこつ進めるしかないのだと感じた。
- ・ HIA の小学生用の感じの音訓よみ、熟語集を利用したいと思う。
- ・ 「こつこつ会」、入会したい。
- ・ 淡路島の地域にボランティアのグループがあることが分かった。少しでも分かることからはじめてみたい。

- ・ 外国から来た子の支援のために、学校として取り組み、親の理解と協力、地域ボランティア団体との連携が必要で、また公としての援助が全く不足していることが改めて分かった。
- ・ 子どもたちへの日本語支援では、やはり学校・ボランティアとの連携が必須で、また時間的にかなりの時間を集中して取り組まないといけないと思う。
- ・ ボランティアの連携システムを作って、何人かで、毎日サポートしてやったらいいので、ぜひそういうシステムをもっと確立してもらって、参加したいと思う。
- ・ 「にこにこ会」のコーディネーターで若いのにボランティア活動をされているのが分かった。やはりボランティア（日本語）教室でも若い先生の方が活発な授業展開ができるのではないだろうか。われわれはまさにサポートという役割を果たす中で相手の心の支えになればいいのだろうか。
- ・ フェアプレイの精神がよく分かった。大切なことばだと思う。
- ・ 国際結婚や外国人のことをもっと詳しく知りたいと思った。
- ・ 子どもの支援の悩みはどこもおなじなのだなと実感した。
- ・ 家庭の中で、日本語の会話のない子どものハンディは計り知れない。
- ・ 子どもたちの日本と能力の向上に従い、過程の中で親子の会話が少なくなるというジレンマがある。
- ・ 小学校低学年の子どもは、友達との自分が話しているとき、ポルトガル語で話しかけないでほしい、恥ずかしいというという親の悩みもよくきく。
- ・ 具体的な実践例をお聞きして、大変参考になった。できればもう少しじっくりとお話をお聞きしたかった。
- ・ 講座の回数を重ねるごとに、当初「日本語指導」（単に日本語を教えること）と思っていたことが、いろいろな一人一人ちがった問題を抱えたこども（親自身も）がいるということが分かってきた。
- ・ 単なる日本語指導ということではない重いものがあるということが分かってきた。
- ・ 限られた時間の中でも、ボランティアの方々の発表や悩み・現場の声が聞けたのはよかったと思った。
- ・ 子どもに対する日本語支援は、大人とは違う課題も少なくないと思うので、一つ一つそれらを明らかにして、知恵を出し合うことが大切ではないかと思う。
- ・ 学校での支援と地域の支援との連携について、今後この面の整備が急がれるような感じがする。関係者が互いに協力し合うとより効果的な支援が出来るのではないかと思う。
- ・ 実際の学校の先生側の意見をお聞きすることが出来たことと、ボランティア団体側の意見をお話しすることができたのが収穫だった。
- ・ 知らなかったことを知ることが出来る場として大変ためになった。ケースから子どもたちの実態を知ることが出来、実際のサポートの場に還元していきたいと思った。

- ・ まさに、子どもの数だけ支援パターンがあり、本当に難しいことだなあと感じた。また今日も学ぶことの多い集まりでした。
- ・ その子の状況に合った支援を学校で、家庭で、社会で出来るよう考えていかないといけない。
- ・ ニューカマーの母国語が分かる人をやとうボランティアに頼りすぎていると思う。
- ・ 教材や情報の共有という点で、教師間で、情報が必要。
- ・ 教育の現場だけでなく、社会生活・行動を一緒にしながらの支援も大切なことだと思う。
- ・ ボランティアの方々の熱心さに感心した。
- ・ 子どもたちのそれぞれの能力、言語、さまざまなちがいの中で、日本語を教えることの難しさを感じた。
- ・ 「同化教育を無意識のうちにしていること」自分の学級の中でいろいろな場面でしているのではないかと振り返ることが出来た。
- ・ 小・中学校での学習支援の実践例を拝聴できたので、とても参考になってよかった。
- ・ 学習支援も教科書に始まり、教科書に終わるということがよく分かった。
- ・ ボランティア指導をされている方々の生の声・意見・悩みをワークショップをまじかに伺え、意見交換ができたのもよい経験になった。
- ・ もっと時間をかけて、意見交換ができればさらによかったと思う。
- ・ 本年 10 月中旬以降、アメリカ圏からの小学 3 年男子の日本語支援をやっているが、いろいろ大変勉強になり、これからの支援再開に役立てたいと思う。

第5日目（12月22日）

題目：「生活者としての外国人への日本語学習支援」

～学校教育との違い～

講師：兵庫日本語ボランティアネットワーク

永安 龍三郎

ビデオ：地域の日本語ボランティア教室で実際にどんな活動が行われているか

対象：大人の日本語学習者

3つのボランティア教室

- ・港島日本語教室「こんにちは」 学習者：ほとんど主婦
- ・西明石日本語教室 学習者：日系人、研修生
- ・「KFC（神戸定住外国人支援センター）日本語プロジェクト」学習者：主婦が多い

【各ビデオの授業の流れ】

① 文字の学習

学習者 主婦 来日3ヶ月

1. カタカナカードを1枚ずつ読ませる。
2. カタカナカードを5枚並べて支援者が指示した文字を選ばせる。
- 3.. 小さい「っ」と大きい「つ」の違いを説明する。

学習者が気づくように「サッカー」と「つくえ」を例にとる。

小さい「っ」の発音が難しい（読んだり、書いたりするときに抜けていることが多い）。

② 婦人服のカタログを使って生活に密着した日本語の練習

学習者： 主婦 来日8年

学習者： 主婦 来日1年

1. 学習者が「通信販売」の言葉が出て来ないため支援者が教える。
2. カタログからスカートを選ぶ。学習者にとって長音の発音が難しいことを支援。
者に言う。「スープ」「スプーン」などを示し、中国語には長音がないことを説明する。
3. Tシャツ、ポロシャツを見せる。襟を説明するとき学習者から「漢字は？」と聞かれ漢字を書く。襟があるのがポロシャツ、襟がないのがTシャツと説明する。支援者が中国語ではポロシャツとTシャツは同じですかと聞く。実際に学習者が着ている服を示す。
4. そのあとジャケット、ブラウスと見せていく。

以上は、日本語の教科書を使わずに、婦人服のカタログを使った活動

- ・生活に密着した授業。
- ・学習者が二人だと、お互いに教え合う。
- ・活動に書いたメモを保管しておく、後でどんなことをしたのかが分かる。

③「ペアで覚えるいろいろな言葉」の教科書を使ってお金に関する勉強

学習者： 主婦 初級

1. 支援者がお金に関する言葉で知っている言葉を聞く。

支援者が「銀行」を例にとるがなかなか言葉が引き出せず、自分の財布をみせて「財布」の言葉を引き出す。

2. 「お金をくずす」の意味を説明する。「かたまりをくずす」から 1,000 円をくずすとどうなるかを学習者に聞く。しばらく考えた後、500 円と答える

3. 「おごる」の意味を説明する。、あなたと一緒にご飯を食べに行きます。あなたの分と一緒に払います。

- ・ 日常生活で、勘違いしたりすると大変になることがある→「割り勘」ということばが分からず、お金を払わなかったら、その後「けち」だとレッテルを貼られてしまったという例を紹介。

④「みんなの日本語Ⅱ」を使った活動

「26 課 ～んです」の練習

学習者： ある企業の研修生 3 人

1. 26 課文型 1, 2 支援者に続いてコーラス。
2. 例文 1 を支援者に続いてコーラス。
3. 例文 3, 4 を学習者に読ませる。
4. 例文 5, 6 を支援者に続いてコーラス。
5. 練習 B 1 に入る。支援者が例を範読。あと各学習者に 1 から 4 まで絵を見ながら「…んですか」の練習。一人の学習者が質問文に変えなかったため支援者が訂正する。
 - ・ みんなの日本語はボランティア教室でよく使われている。
 - ・ 日本語能力試験を受けるための勉強。
 - ・ 研修生は母国で日本語を勉強しているが、日本でもボランティア教室を探して勉強している。
 - ・ 最近では、企業側から日本語を教えてほしいと要請を受けることもある。
 - ・ 研修生や実習生の給料は非常に少ない（8 万円前後か）、3 年日本にいる間に日本語能力試験を受け、帰国後日系企業に入りたいので、日本語がとても大事になる。

⑤「みんなの日本語Ⅰ」を使った勉強のようす

「19 課 ～したことがあります」の練習

学習者： 主婦 3 人

1. 19 課新出語彙を絵カードで練習「登ります」「泊まります」 etc.
2. 歌舞伎のカラー写真を見せ「～したことがありますか」導入。

「歌舞伎を見たことがありますか」学習者から「こわい」「おもしろい」の感想が出る。
3. 絵カードで「登ります→登ったことがあります→富士山に登ったことがあります。パチンコの絵カードで同様に練習する。
4. 練習 B 1 を見ながら練習。学習者の実際の経験を交えながら練習する。

「雪を見たことがありますか」のときに 1 人の学習者が南国出身の学習者に「見たことがありますか」と冗談で聞く。
5. 「東京に行ったことがありますか」の質問のとき、

「先月行ったことがあります」を「先月行きました」に訂正する。

6. 「牛丼」を使って練習しようとするが学習者の一人が牛丼を知らなかったため、もう一人の学習者が牛丼を説明する。
7. 「天ぷらうどん」が好きなことがわかったため「天ぷらうどん」で練習。
学習者同士で練習。「おいしかったです」と食べた感想まで引き出す。
8. 「ディズニーランドに行ったことがありますか」の質問
 - ・日本語能力試験を受けるためというよりは会話が目的。
 - ・日本語のレベルは三者三様。知ってる人が助ける。
 - ・主婦なので、子どもを連れてくる人もいる。
 - ・KFC の場合、保育グループがあるので、母親は勉強に集中できる。(保育グループを作っているのは KFC だけかもしれない)

【今日のテーマ】

「ボランティアの教室と学校と、どこがどう違うのかを考える」(20 分程度)

例) 有給／無給のちがい、自分より学生(学習者)が年上／年下

みんなが書いたことを見て回る(10 分程度)

面白い意見があったか出し合う

- ・授業時間内に外に出て行ってはいけない／外に出て行って活動する(実際にコンビニに行行って買い物をしてみる、駅で電車に乗ってみる)
→実際に外にでてみることで、何が出来ない／わからないかが分かるようになることも。
- ・経済的な支えがある／ない
→ボランティア教室は基本的に貧乏。市役所に申請したりすると、助成金が出る場合がある(それでボランティアの交通費をまかなったりする)。講師料などは出ない。
- ・学習する場所のちがい→みんな場所の確保に困っている。冷暖房の光熱費なども払わないといけない。
- ・ボランティア保険→KFC の場合、参加費年額 2000 円のうち、ボランティア保険が年間 500 円。支援者自身の負担。
- ・共通のことばがある／ない
→共通のことばがない場合、すごく難しい。ない場合はことば以外のあらゆる手段で。または「みんなの日本語」のような文法積み上げの教科書を使って、かなり綿密に計画を立ててやっていかないと、媒介語なしでは無理。
- ・正しい日本語
→一般に「日本人なら日本語を教えられる」と思っている人が多いが、そういうわけではない。日本語支援の講座などを受けて。日本語を話せる人は、日本語を勉強したことがない。「は」と「が」の違いを学習者に分かりやすく説明することは出来ず、むしろ元学習者のほうが上手に教えられる。ボランティアの場合、学習者の心の拠

り所となり、暖かい人間関係を作れるようにすることが大切。

・ 文字を覚える期間のちがひ

→学習者には自分に必要な漢字（住所・名前、駅の標示）があり、個人で勉強するのが難しいのでボランティアと一緒に。漢字の勉強に好き嫌いがある。ボランティア教室の場合、何かしないといけないことはないの、やりたい人はやって、やりたくない人はやらなくてもいい。覚えるのにとっても時間がかかり、大変なこと。

題目：自己開発のためのストーリーテリング（2）

講師：大阪大学大学院文学部教授 青木 直子

1. なぜ「自分はどんな教師になりたいのか」を考えるのか

授業中、教師は数えきれないほどの意志決定を行っている。

授業の中で教師がする意志決定は、「自分はどんな教師でありたいか」という意識に大きく影響されている。

しかし、長いキャリアのうちには

「自分はどんな教師でありたいか」を忘れることも、見失うこともある。

「自分はどんな教師でありたいか」と「今日、私はこんな教師だった」の間の距離は近くなることも遠くなることもある。

周囲の状況と「自分はどんな教師でありたいか」の間に摩擦が生じることもある。

自分自身の中に矛盾した複数の「自分はどんな教師でありたいか」像を抱えてしまうこともある。

そして、教師の「自分はどんな教師でありたいか」像が、学習者にとって、いつもありがたいものであるとも限らない。

だから、教師は、時には「自分はどんな教師なのか」「どんな教師になりたいのか」を考えることが必要。

2. なぜ比喩とストーリーテリングか

人間は複雑なものである。学びの場とは通常、複雑な人間が複数関わり合うところである。だから、授業とはとてもとても複雑な出来事である。教師も学習者も授業も「〇〇は△△である」というような単純な言葉では言い表せない。比喩やストーリーは、この複雑なものを複雑なままに表現する力を持っている。

3. 日本語学習支援者という新しい役割

日本語学習支援者は教師ではない。

日本語学習支援者の役割は指導することではない。

学習支援活動は授業ではない。

だから、支援活動をするにあたっては「自分はどんな教師でありたいか」を「自分はどんな支援者でありたいか」に書き換えていく必要がある。

もちろん、一人の人間のすることだから、そこには何らかの継続性もあるはずだが。

【ワークショップ】

①「自分はどんな教師になりたいか／どんな教師になりたいと思っていたか」を考えてみる（比喻で：例、そよかぜのような教師、女優 etc...）

②「わたしは〇〇のような教師になりたい、そのころは・・・」をグループで紹介しあう。

③「どうしてこんなことをするのか？」という質問に対して

わたしたちが授業をするとき、意思決定の連続。準備していったことを演じて帰ってくるわけではなく、学生の反応をそのつど見ながら授業をしていく。それでは何を持って意思決定をしていくのか？そこで働いている（大きな影響を与えている）のが、「自分がどのような教師になりたいか」という自己意識である。

長年教えていると、山あり谷ありで、いつの間にか「自分はいったいどういう教師になりたいか」を忘れてしまう、分からなくなってしまうことがある。

自分の中の理想の教師 像に紆余曲折を経ながら近づいていくもので、自分が「こうありたい」と願っても、思い通りにいかないこともある。また、自分の中に矛盾した理想の教師像がある場合もある。そして、自分が理想とする教師像が学生にとってありがたい教師とも限らない。「自分がどんな教師になりたいか」、また「それが学生にとってどうなのか」を立ち止まって考えてみるのが大切になる。

またこれを人と話しながらそれをやることが重要になる。誰かに話してみることで「わたしはこういうことを考えていたのか」と分かることがあるし、だれか自分と同じようなことを考えている人が一人でも周りにいれば、それが力になることもある。また、ほかの人の話をきくことで「そういう考えもあったのか」と、自分の考えの幅が広まり、他人を理解したり、ひいては自分が変わることも出来るかもしれない。

（なぜ比喻？）教師という複雑な仕事をことばで厳密に表現しようとするとても難しい。そういうとき、比喻や物語（ストーリー）を語るなかに、自分が教師として生きてきた全部が入っている。

④「自分がこういう教師になりたい」と今考えた、そういう風に考えるにいたったエピソード等がこれまでの生徒との関わり等の中であったか、グループで話し合う。

⑤ ストーリーを語る一つの効果に「響きあう」ことがある。自分の中に響いたこと、印象に残ったことを教室全体で発表してみる。

【受講生の発表から】

新しい学校に異動して、普通「教師」は「先生」と呼ばれて当たり前の中、生徒から「村井さん」や「セニョール」とか生徒たちから声をかけられる場面があって、ころとこころがつながっている感じがした。これから生徒指導の中でもこころをつなげる教師でありたいと思う。

「モナリザの微笑みのような教師」になりたい・・・ほめられる経験が少ない生徒たちがほめられたことで「もっとほめて、もっとほめて」といってくるという経験から。何を言ってもやさしく生徒の言うことをきいてあげられるような。

「嵐のような教師」になりたいと思ったが、学校学校で雰囲気が違うし、主体性をもった教師ではなく、学校の方針に合わせた教師にならざるを得なかった。

「看護師さんのような教師」に。数学が嫌いな生徒が多いが、放課後、少人数のグループで教えていると、生徒の顔がどんどん明るくなり「わかった!」といってくれるのがとてもうれしい、ととてもうれしそうな顔で話してくれた。

50年ほど前に受けた教育実習のとき、全力投球をした。学校を去る日に生徒たちがみんな泣いてくれて、自分の心が生徒たちに移ったような気がして、それがきっかけに教師を目指した。

場所が変わると今までやってきたことがうまくいかなかったり、今までやってこなかったことをやらなければいけないことがある。学校から地域の日本語ボランティア教室に場所を移すときも同じである。

⑥ 日本語学習支援者が教師ではない理由

育てるものではない、強制力がない、指導面が弱い（サポーターとしての役割のほうが強い）、仕事ではない、資格がいらない、個人対個人の対応、結果の責任を問われない、評価しない、生活中心の指導ではない（教師は教科中心）、善意、財政的な裏づけがない、法的な拘束力がない etc.

<なぜ日本語学習支援活動が「指導ではない」のか>

学習者中心

学習者のニーズが満たせるように助ける

外から与えられた到達目標がない

<日本語学習支援が「授業ではない」のはなぜか>

教師の計画通りに進めるものじゃない

時間の制約がない

相手によって中身が変わってくる

⑦ 自分が日本語支援ボランティアになったら、どんな教師になりたいか（自分が教育実習に行く前の学生のような気持ちになって考えてみる。

⑨ 『教師』としてなりたかった自分→『学習支援者』としてになりたい自分』について書いて、周りの人とシェアする。

第6日目(1月5日)

題目：自己開発のためのストーリーテリング(3)

「異文化体験学習」

講師：コミュニケーション学院長

奥田純子

★異文化能力のパワーアップ

異文化接触で重要とされる能力

- ①関係構築・維持能力：肯定的な関係を打ち立て、維持することに関する能力
- ②情報伝達能力：歪みや損失を最小にして情報を伝達することに関する能力
- ③承諾獲得能力：説明や説得をし、協力、承諾を適切に得ることに関する能力

(Ruben1989)

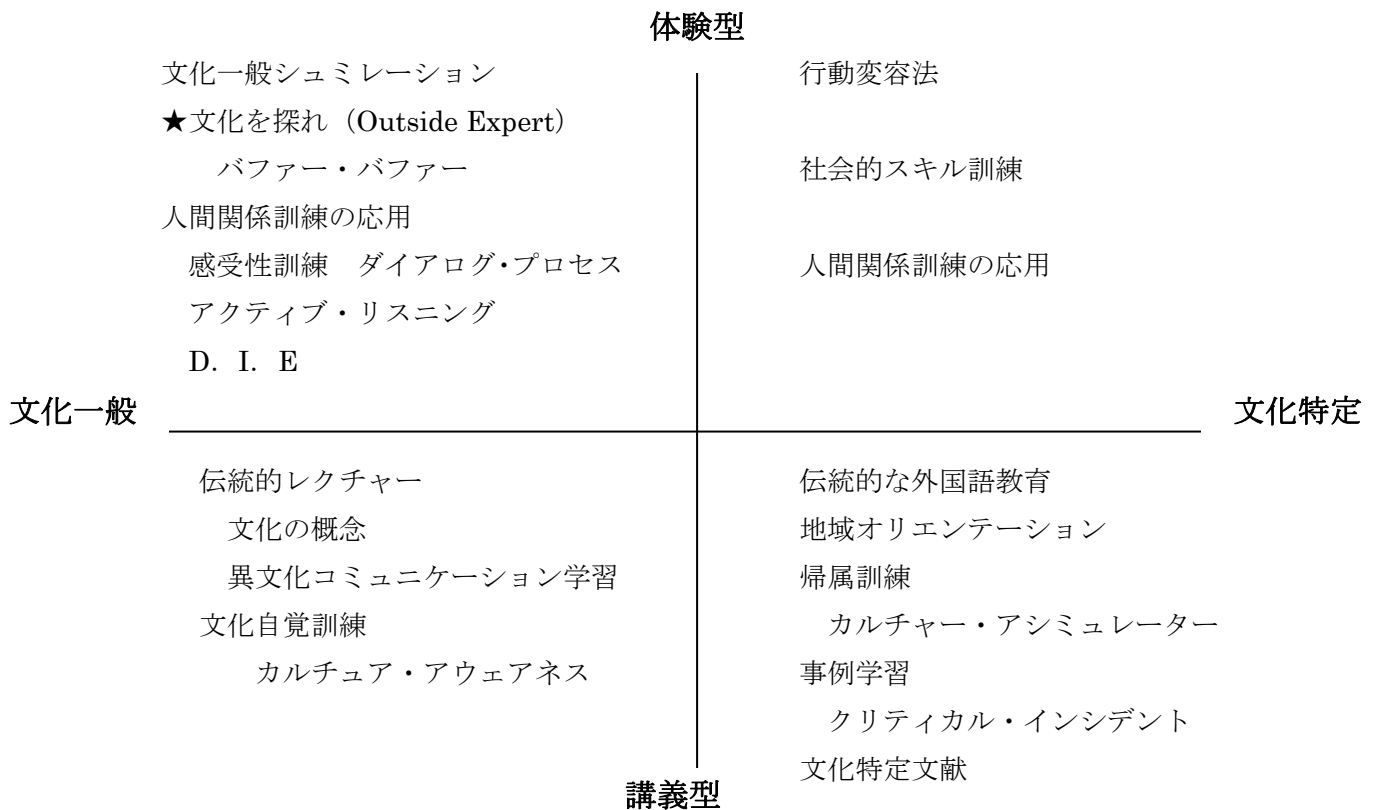
★異文化トレーニングの手法を使って

開発背景：① 異文化接触を異文化理解へ導くにはどうすればいいか。

② 言葉が通じたら相互理解や共通認識が即座に成立する、とは限らない。文化に起因する、すれ違いや誤解、摩擦をどのように乗り越えたらいいのか。

③ 文化の共通性を見出したり、新たな文化を創造したりするには、どうしたらいいのか。

異文化トレーニングとは：異文化背景の異なる人々と効果的で有意義な相互作用や相互理解を行える知識・技能・態度の育成を目指す研修プログラム



今回の狙い：異文化トレーニング→普段意識しないでも持っている「異文化能力」を増強する。

今回は「体験型」で「文化一般」にあたる部分を扱う。

文化とは？（ここでの共通認識として）→集団である。

継承性がある。

人が生きていくために絶対必要なもの。

① Learning style inventory（資料：略）をやってみる。

自分はどういうような学習スタイルを持っているかを測るスケール。

コツ：あまり考え込まずに直感でつけていく。

Kolb のスケール

CE（実際に体験する）↘

↗

RO（内省的に観察する）

AE（仮説を立ててみる）↘

↗

↖ AC（分析する）

② シミュレーション 「文化を探れ（Outside Expert）」 Pedersen 1988

- ・ 2 グループに分かれる（専門家とバルーンバ人）

★ 専門家

任務：バルーンバ国にはどんな文化があるのかを探る

方法：「はい」・「いいえ」で答えられる質問を用意する

☆ バルーンバ人：「はい」・「いいえ」しか言えない

シミュレーションの流れ

1. バルーンバ人と専門家とに分かれる
2. 専門家のグループが4つ（各5名程度）、バルーンバ人が6人
3. 専門家は、グループではいいえで答えられる質問を考えあう（10分程度）
4. バルーンバ人は隣の部屋でミーティング
5. 面接開始（机をはさんでバルーンバ人と専門家は対峙する形）
5分程度でバルーンバ人はテーブルを移る
6. バルーンバ人の文化の問題についてグループで話し合う
7. 発表
8. 感想を出し合う
9. バルーンバ人の種明かし
 - ① 「はい」「いいえ」しか言えない。
 - ② 異性との会話は許されない。もし異性から話しかけられたら、おもむろに無視する。

③ 質問内容に関わらず;

相手がニコニコしていたら ⇒返事「はい」

相手がニコニコしていなかったら⇒返事「いいえ」

文化の規定にあるものは後から聞いてみると単純。

→当人は説明できないかもしれないが、必ず根底にシステムがある
今まで自分が持っていたそのままの視点で見ると絶対に見えてこない。

→視点を変えてみる

★ 異文化接触の三側面

心理学的な三側面 「感じる（心）＝情動」「考える（頭）＝認知」「行う（体）＝行動」

例：初対面のあいさつを知っている＝認知

初対面のあいさつができる＝行動

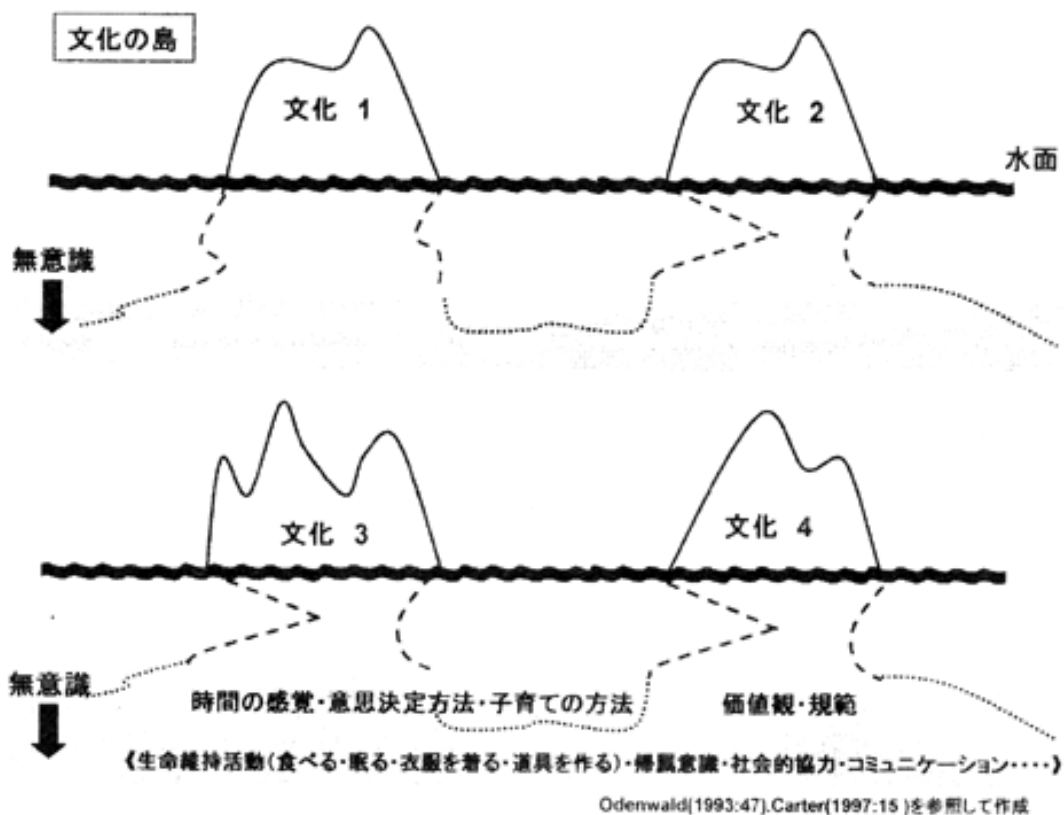
初対面のあいさつに違和感を感じない＝情動

異文化接触をする/違う国にいて暮らす

→やれと言われてできない事はない（「認知」して「行動」は出来る）が、気分はよくない（「認知」して「行動」は出来る）ということは「情動面」

異文化接触で一番問題になるのは、「情動面」である。

★ 「文化の島」



一見したところ似通っているが、無意識の部分（前提のシステム）が違う。

見える部分は見えやすい

→でもそれはどういう考え方に基づいているのか？についてはあまり考えない。
また、一見したところ違うが、前提のシステムは似通っている場合もある。

*****第5日目感想*****

- ・バルーンバ文化の手法を体験したが、まったく条件に気がつかなかった。感性が弱いのかと自戒している
- ・相手の価値観を無視しているつもりはないけれど、知らず知らずのうちに自分の範囲で判断していることを反省するきっかけとなった。
- ・異文化を知るときに、どうしても先入観を持って接してしまう。これでは知りたいことの半分も分からなくなってしまうことに気づかされた。
- ・自分がいかに固定観念にとらわれているかということに気づかされた。
- ・ついつい自分の社会や文化の尺度で考えたり、接したりするのは気をつけないと思った。
- ・視点をまるきり変えることの難しさを痛感した。
- ・文化の違いを見破れない（自分の固定概念に固まっている）少し分かったが、本当に難しい。
- ・異文化体験学習は初めてだったので驚きの連続だった。
- ・異文化を理解することの難しさが分かった。
- ・多くのことに気づくいいきっかけを作っていただき、勉強になった。
- ・とても興味深い話で、これからの活動に大変役に立ちそう。
- ・シミュレーションが楽しかった。
- ・とても楽しいシミュレーションができた。
- ・今日のシミュレーションは今までしたことのないようなものだったので、まだ不思議な感覚が残っている。
- ・今日はいろいろ考えさせられ、多くを学びすばらしい年始のひと時となった。
- ・自己分析をする機会がえられてとてもよかった。
- ・今までにない講義で非常にためになった。
- ・異文化に接する感覚を味わうことができた。
- ・とても楽しいワークショップだった。手法も体系的にまとめたプリントを教えていただきよかった。
- ・バルーンバ文化の活動が思いがけない結末でとても新鮮な驚きだった。これから体験するかもしれないボランティア活動に大変役立つように感じた。
- ・充実した研修だった。
- ・バルーンバ文化にはとても驚いた。いいことを教えていただいた。
- ・とても楽しく参加でき、勉強になった。
- ・自分はACタイプに当てはまったが、楽しく学習することができた。
- ・見えない部分が見えるようになるための訓練を受けるひとつとしてこの講座を受けている

つもりなので、一步一步進歩していきたい。

- ・(ロールプレイでバルーンバ人の役割をやった方) 自分を振り返ってみても多分同じなのだろうと思うが、単純な約束事でもことばの内容に引きずられるためか行動面に明白な違いを気づいてもらえなくて非常に居心地が悪かった。
- ・(バルーンバ人をやった方) 「はい」「いいえ」でしか答えられないもどかしさを感じた。相手の言っていることが分かるから余計感じることなのかもしれない。言語・文化が違うということはこういうことなのだろうか。
- ・(バルーンバ人をやった方) 自分のことばで伝えられないもどかしさにストレスを強く感じた。異文化の人は生活全般に一日のほとんどの時間でストレスを感じており、少しその大変さを味わえたように思う。今後やくだてたい。
- ・異文化を探るには自分の中にある尺度から離れてみる必要がある。
- ・異文化を理解することは理解だけでなく、ほかにも何か必要なものがあることに気づいた。もう一度いろいろ考えてみたい。
- ・異文化のちがいの捉え方が以下に違うのかを痛切に感じた。
- ・気持ちが通じないときには、もう一度原点に戻って、さまざまなアプローチをすることの大切さを学んだように思う。
- ・文化の問題点、の意味がうまく理解できなかった。

第7日目(1月12日)

題目：第二言語教育の理念と理論

「国語教育、英語教育との違い」 / 「第二言語教育の理論と理念」

講師：大阪大学大学院文学部教授

青木 直子

0. 前回の講義を振り返って

「教師と支援者は同じ・・・自分は自分である」と書いた方がいらっしやった。

→これは正論。しかし、教師と支援者では「自分」は同じだけど、周りの制約・環境などが異なってくる。だから教師の場合と支援者の場合で行動を変える必要がある。

1. 「国語教育・英語教育と日本語教育のちがい」

	国語教育	日本国内の英語教育	成人のための日本語教育	子どものための日本語教育
何を学ぶのか	*日本で生まれ、両親が日本語話者である子どもは、小学校入学前に日本語の発音、文法、基本的な語彙をすでに身につけている。 *重視されるのは読み書きの能力？	*発音、文法、語彙？ *重視されるのは読んで理解すること？	*発音、文法、語彙を意識的に学ぶ必要がある。 *それに加えて、社会言語能力、ストラテジー能力も *ほとんどの学習者が話せるようになりたいと考えている。 *日本語の読み書きが必要な人も、必要でない人もいる。 人によって必要の度合いも異なる。	* 日常的な話し言葉（生活言語）は、日本語を話す友だちがいれば、教えられなくても、身につけられる。 *援助が必要なのは学習言語の習得 *日本の学校に進学するためには、読み書きができることが必要。
文字	*漢字があるにもかかわらず、日本の識字率がこれだけ高いのは奇跡に近い。	*アルファベットはたった26文字。読み書きを覚えるのは比較的簡単。	*漢字がある。 *特に非漢字圏出身者が読み書きを覚えるには、多大な努力を必要とする。	*漢字がある。 *特に非漢字圏出身者が読み書きを覚えるには、多大な努力を必要とする。
認知的能力の発達	「国語力」と、その他の認知的能力は並行して発達する。	認知能力は英語力に先行して発達している。	認知的能力はすでに発達している。	認知的能力は母語の発達に伴って発達する。
社会文化的事柄の扱い	日本国民として共有してほしい価値観、行動規範、文化、伝統の	英語話者の価値観や行動規範を身につけることは期待されて	*支援者は、日本社会への適応を強制しないように注意しなく	*支援者は、日本社会への適応を強制しないように注意しなく

	国語教育	日本国内の英語教育	成人のための 日本語教育	子どものための 日本語教育
	継承も目的とする？	いない。	てはいけない。 *ただし、社会文化的 事柄に関する知識は、 言語能力の不足を補 うためにも必要。 *異文化調整能力も 必要。	てはいけない。(学校 文化の中ではこれは とても難しいだろう が。)
学び手のニーズ	ニーズというより好 き嫌いの問題か？	差し迫った具体的ニ ーズはない。	生活、仕事、育児等の ために差し迫ったニ ーズがあることが多 い。	生活言語を身につけ ることは、仲間の中で 生き延びるためには 絶対に必要だろう。 学習言語に関しては、 日本の学校に通って いれば絶対に必要だ が、子ども自身の意識 は個人差が大きいだ ろう。
目標言語に触れる機 会	常にある。	教室外で、英語に触れ たり、使ったりする機 会は少ない。	常にある。 ただし、生活環境によ っては、日本語を話す のは日本語教室だけ という人もいる。	常にある。
学び手の意識	教科の一つ？	英語は学校の教科の 一つ	日本語は成人として 自立した生活を営む ための手段	個人差が大きいだろ う。

★上の表を見て、グループ（５人程度）で間違っている点や、疑問点などを話し合う。

＜各グループから＞

Q. 日本で生まれ・・・など書いてあるが「外国籍」は対象になるのか？

A. 国籍とことばはイコールではない。

例) 在日韓国・朝鮮人

日本語教育では、国籍で分けるのではなく、これまで日本語とどのように接してきたのかで。

C. 英語教育の中で、ニーズと出てくるが、試験や TOEIC の成績などは差し迫ったニーズがある
と感じている人もいるのでは。

Q. ニーズと意識とのちがいは？

A. 日本で日本語を勉強している人たちにとって、日本語はただの「教科」ではなく生きる手段。

- C. 国語教育は、文部科学省の検定を通った「国語」の教科書を使って学ぶから「国語教育」になるのでは。
- C. 「日本国民として共有してほしい価値観」といわれた場合、在日朝鮮人の児童・生徒などがはみ出てしまう。いまは人権意識にとっても気を使っているので、一人一人の子供の文化的な違いを考慮して等しく教育していかなければ。
- C. 「好き嫌いの問題」というよりは、国語教育はすべての教科の基本にあるので、それがニーズとなるのでは。
- C. 日本の英語教育の中で「伝達手段としての英語」を学ぶのでは？よって「読んで理解すること」が求められていたのは大昔では。
- C. アルファベットは確かに 26 だけど、読みが非常に困難であるといっている・・・。
- C. 英語はあくまで「選択」教科である。ただし学校裁量なので生徒たちに選ぶ余地はない。

2. 日本語教育の理念について

理念というものは価値観ですから、どれが正しいということはできません。あくまでも「私はこんな教師／支援者」でありたい、だから、この理念に最も共感できる、という話でしかないでしょう。以下、私の個人的な考えです。

- *第二言語教育の目的は、一人一人の学び手が尊厳をもって自分らしく幸福に生きていけるようになるのを助けること。
- *そのために必要なことは一人一人違う。だから、何を学ぶか、どのように学ぶか、いつまでに学ぶか、どの程度できるようになりたいかは、一人一人違っていい。
- *だから、学び手が主体的に自分の学習をデザインできるようになるのを助けるのも教師／支援者の仕事である。
- *学び手はそれぞれの歴史と生活世界と未来への希望を持っている。それらを包括的に理解しなくては、本当に役に立つ学習支援はできない。
- *言葉と文化、人のアイデンティティは密接に結びついている。第二言語を学ぶということは、自分の中に 2 つ（あるいはそれ以上の）言語と文化を持つということである。これらの言語と文化が学び手の中で平和に共存し、学び手が複数の言語と文化を持つ人としてのアイデンティティを構築していくのを助けるのも、教師／支援者の仕事である。
- *これらの事柄について、必要なら学び手のためのアドボカシー（支援や弁護）を行うのも、教師／支援者の仕事である。

3. 第 2 言語教育の理論について

（1）言語を使う能力とは何から構成されているのか

＜コミュニケーション能力の下位分類＞

- ・言語能力(発音、文字、語彙、文法)・・・言語のシステムに関する知識
- ・社会言語能力・・・ことばの使い方の T P O
- ・談話能力・・・一文以上の単位の塊を、どうやって組み立てていくか
- ・ストラテジー能力・・・言語能力の不足をどう補うか （谷口 2001）

＜コミュニケーションに必要なのは言葉に関する知識だけではない＞

- ・ 社会文化能力・・・例) 日本のレストランではお勘定の際、レシートを持ってレジに行くこと、を知っていること
→日本での生活術

(ネウストプニー1995)

＜能力とは、何を知っているかではなく、何ができるかである＞

(ヨーロッパ協議会 2004)

自己評価表の紹介

聞く、読む、話す、書くの4つのスキル（技能）について、学習者ができることを把握することが大切であり、学習者がどの段階まで学習したいのかというニーズを考え、話し合うことが大切である。

自己評価表 A1～B1

		A1	A2	B1
理解すること	聞くこと	はっきりとゆっくりと話してもらえれば、自分、家族、すぐ周りの具体的なものに関する聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる	(ごく基本的な個人や家族の情報 買い物、近所、仕事などの) 直接自分につながりのある領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。 短い、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞き取れる	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。 話し方が比較的ゆっくり、はっきりとしているなら、時事問題や、個人的もしくは仕事上の話題こついてもラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。
	読むこと	例えば、掲示やポスター、カタログの中をよく知っている名前 単語、単純な文を理解できる。	ごく短い簡単なテキストなら理解できる。 広告や内容紹介のパンフレット、ニュー、予定表のようなものの中から日常の単純な具体的に予測がつく情報を取り出せる。 簡単で、個人的な手紙は理解できる。	非常によく使われる日常言館や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。起こったこと、感情、希望が表現されている私信を理解できる。
話すこと	やりとり	相手がゆっくり話し、くり返したり、言い換えたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現するのに助け舟を出してくれるなら、簡単なやりとりをすることができる。 直接必要なことや身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりすることができる。	単純な日常の仕事の中で直接やり取りが必要ならば、身近な話題や活動について話し合いができる。 通常は会話を続けていくだけの理解力はないのだが、短い社交的なやり取りはできる。	当該言語権の旅行中に最も起こりやすいたいいていの状況に対処することができる。 例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係あることや個人的な関心ごとについて、準備なしで会話に入ることができる。
	表現	どこに住んでいるか、また、知っている人たちについて簡単な語句や文を使って表現できる。	家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴を簡単な言葉で一連の語句や文を使って説明できる。	簡単な方法で語句をつないで、自分の経験や出来事、夢や希望、野心を語ることができる。 意見や計画に対する理由や説明を簡単に示すことができる。 物語を語ったり、本や映画のあらすじを話し、またそれに対する感想、考えを表現できる。
書くこと	書くこと	新年のあいさつなど短い葉書を書くことができる。例えばホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人のデーターを書き込むことができる。	直接必要のある領域での事柄なら簡単に短いメモやメッセージを書くことができる。短い個人的な手紙なら書くことができる。例えば礼状など。	身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。指針で経験や印象を書くことができる。

自己評価表 B2～C2

		B2	C1	C2
理解すること	聞くこと	長い会話や講義を理解することができる。また、もし話題がある程度身近な範囲であれば、議論の流れが複雑であっても理解できる。たいていのテレビのニュースや時事問題の番組も分かる。標準語の映画なら大多数は理解できる。	たとえ構成がはっきりしなくて、関係性が暗示されているにすぎず、明示的でない場合でも、長い話しが理解できる。特別の努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。	生であれ、放送されたものであれ、母語話者の速いスピードで話されても、その話し方の癖に慣れるれる時間の余裕があれば、どんな種類の話し言葉も難無く理解できる。
	読むこと	筆者の姿勢や視点が出ている現代の問題についての記事や報告が読める。現代文学の散文は読める。	長い複雑な事実に基づくテキストや文学テキストを文体の違いを認識しながら理解できる。自分の関連外の分野での専門的記事も長い技術的説明書も理解できる。	抽象的で、構造的にも言語的にも複雑な、例えばマニュアルや専門の記事、文学作品のテキストなど、事実上あらゆる形式で書かれた言葉を容易に読むことができる。
話すこと	やりとり	流暢に自然に会話することができ、母語話者と普通にやり取りができる。身近なコンテキストの議論に積極的に参加し、自分の意見を説明し、弁明ができる。	言葉をことさら探さずに流暢に自然に自己表現ができる。社会上、仕事上の目的に合った言葉遣いが、意のままに効果的にできる。自分の考えや意見を正確に表現でき、自分の発言を上手に他の話し手の発言にあわせることができる。	慣用表現、口語体表現をよく知っていて、いかなる会話や議論でも努力しないで加わることができる。自分を流暢に表現し、詳細に細かい意味のニュアンスを伝えることができる。表現上の困難に出会っても、周りの人がそれにほとんど気がつかないほどに修正し、うまく繕うことができる。
	表現	自分の興味関心のある分野に関連する限り、幅広い話題について、明瞭で詳細な説明をすることができる。時事問題についていろいろな可能性の長所、短所を示して自己の見方を説明できる。	複雑な話題を、派生的問題にも立ち入って、詳しく論ずることができ、一定の観点を展開しながら、適切な結論でまとめ上げることができる。	状況にあった文体で、はっきりとすらすらと流暢に記述や論述ができる。効果的な論理構成によって聞き手に重要点を把握させ、記憶にとどめさせることができる。
書くこと	書くこと	興味関心のある分野内なら、幅広くいろいろな話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。エッセイやレポートで情報を伝える。一定の視点に対する支持や反対の理由を書くことができる。手紙の中で、事件や体験について自分にとっての意義を中心に書くことができる。	適当な長さでいくつかの視点を示して、明瞭な構成で自己表現ができる。自分が重要だと思う点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。読者を念頭に置いて適切な文体を選択できる。	明瞭な、流暢な文章を適切な文体で書くことができる。効果的な論理構造で事情を説明し、その重要点を読み手に気づかせ、記憶にとどめさせるように、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。仕事や文学作品の概要や評を書くことができる。

Council of Europe (2004)

<4つのスキル：聞く、読む、話す、書く>

この4つのスキルがあることを常に念頭においておく必要がある。

聞く（吉田 1989; 門田 2007）

読む（津田塾大学 2002）

話す（バイゲイト 1995、羽藤 2006）

<子どものバイリンガリズム研究>

生活言語と学習言語の2種類があり、日本語を問題なく話せるようになったからといって、日本語教育の必要はなくなつたと考えてはいけない。

（バトラー後藤 2003）

(2) ことばを使う能力はどのように習得されるのか

<伝統的第2言語習得研究の知見>

- ・ 転移：自分がもともと知っていることばが、これから勉強しようとすることばに与える影響。プラスの転移とマイナスの転移（干渉）とがある。
- ・ 中間言語・・・ことばの発達段階にもシステムがあ（間違いにもその時点での規則が存在している）り、それが目標言語に近づいていく。
- ・ 習得順序・・・習得していく順番がある。
- ・ インプット・アウトプット・インターアクション仮説
- ・ ...インプット仮説→×、アウトプット仮説→×
インターアクション仮説→
実際にコミュニケーションを行っていく中で習得が起こる？
- ・ 気づき仮説・・・コミュニケーションの中で相手との交渉があつて、その中で自分が「気づいた」ときに習得が起こる。
間違いの直し方・・・むやみやたらに訂正してもダメ。

(迫田 2002)

<認知心理学的知見>

記憶の仕組み・・・かなり明らかになっている
スキル習得のメカニズム
トップダウン処理とボトムアップ処理・・・私たちがものを理解するときに脳が行う処理の仕方。

(小林 2001)

<社会文化理論から見た学習>

最近流行のヴィゴツキーの理論

- ・ 能力は個人の中に存在するのではない・・・相手によって話す（話せる）内容も異なってくる！他者との関係の中に存在する
- ・ 能力は、他者との関係、諸々の人工物に支えられている・・・電子辞書
- ・ 学習は社会的実践への参加によって起こる・・・正統的周辺参加理論
学習の成果とは社会的実践への参加の仕方の変化である。
学習はアイデンティティの変化を伴う。

(佐伯ら 1995,西口 2005)

<第2言語学習に果たす母語の役割>

プラスの役割もすごくたくさんある。

(3) ことばを身につけようとする気持ちはどこから来て、どのように維持されるのか

動機付けの歴史的流れ

あめとムチ

↓

統合的動機付け（人や文化に対する好意から）と道具的動機付け（具体的利益を求めるところから）

↓

内発的動機付け（自分の中から）と外発的動機付け（周りからほめられたい）



獲得したいアイデンティティへの投資

始める動機 VS 続ける動機

（ドルニエイ 2005）

（4）言葉の学習を支援する教師・支援者の役割

規定の事柄ではなく、一人一人のニーズにあった事柄へ、

知識を提供するだけでなく学習者の相談に乗ることも

「させる」のではなく、「やりたい」「やろう」と思う気持ちを支えることへ、

教室の中での「勉強」だけでなく、社会的実践への参加を助けることも

（ノールズ 2005，青木 2001）

参考文献

青木直子（2001）「教師の役割」青木・尾崎・土岐（編）所収

羽藤由美（2006）「英語を学ぶ人・教える人のために－『話せる』のメカニズム」世界思想社

門田修平（2007）「シャドーイングと音読の科学」コスモピア

小林由子（2001）「認知心理学的視点」青木・尾崎・土岐（編）所収

佐伯肝・藤田英典・佐藤学（編）（1995）「学びへの誘い」東京大学出版会

迫田久美子（2002）「日本語教育に生かす第二言語習得研究」アルク

谷口すみこ（2001）「日本語能力とは何か」青木・尾崎・土岐（編）所収

津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編）（ZOOZ）「英文読解のプロセスと指導」大修館書店

ドルニエイ，Z.（2005）「動機づけを高める英語指導ストラテジー35」大修館書店

西口光一（編）「文化と歴史の中の学習と学習者：日本語教育における社会文化的パースペクティブ」凡人社

ネウストプニー，J.（1995）「新しい日本語教育のために」大修館書店

ノールズ，M.S.（2005）「学習者と教育者のための自己主導型学習ガイドーともに創る学習のすすめ」明石書店

バトラー後藤裕子（2003）「多言語社会の言語文化教育：英語を第二言語とする子どもへのアメリカ人教師たちの取り組み」くろしお出版.

ヨーロッパ協議会（2004）「外国語教育く2）外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」朝日出版社

吉田研作（1989）「英語リスニング上達の方法」ジャパントイムズ

吉田研作・柳瀬和明（2003）「日本語を活かした英語授業のすすめ」大修館書店

秋田喜代美（2002）「読む心・書く心—文章の心理学入門」北大路書房

第 8 日目 (1 月 19 日)

題目：日本語支援法一 1 「自己学習、自己学習支援について」

～ポートフォリオ作成について～

講師： 大阪大学大学院文学部教授

青木直子

1. いまさらですが、かんたんに全体の状況のおさらい

(1) 日本に住む、日本語を第一言語としない人たちの数
2005 年末現在、全国の外国人登録者数： 2,011,555 人
総人口の 1. 57%

外国籍だが、日本語が第一言語である人：40 数万人

日本国籍だが、日本語が第一言語でない人：10 数万人

外国籍だが、外国人登録をせずに日本に住んでいる人：
20 万人程度



足し算引き算すると、日本には現在、200 万人近い、日本語を第一言語としない人たちが住んでいる。

このうち学生は 157,715 人

(2) なぜ地域の日本語教室が必要なのか

就学・留学以外の在留資格を持つ人で、日本語学校に行っている人は極めて少数（多く見積もっても 1 万人前後）。学校に行かない理由は以下のようなことであると考えられる。

- ・授業料が払えない
- ・日本語学校は都市部にしかない
- ・週末、夜間にコースを開講している学校が少ない

(みんな日本語教室に行ってしまうから、開講しても採算がとれない、ということかもしれない。)

- ・子どもを連れていける日本語学校がない

(3) 地域の日本語教室に関わる統計的数字

文化庁の統計から推測すると、2005 年 11 月 1 日現在、

地域の日本語教室 全国で 800 から 900 程度？

日本語ボランティアの数 15,000 人程度？

学習者数 50,000 人前後？

日本語を第二言語とする人で、日本語学習支援を受けている人は少数派
残りの人たちはどうなのか？

日本語がすでに十分できる？

日本語ができるようになる必要がない？

日本語はできるようになりたいが、なんらかの理由で日本語教室に行けない？

日本語はできるようになりたいが、なんらかの理由で日本語教室に行かない？

日本語教室に満足していないけれど、先生（支援者）が「ボランティア」であることが理由でそれを言い出せない…というケースもある。

(4) 成人への日本語学習支援の課題

- ・ ニーズの緊急性・多様性・一人一人のニーズには対応しきれない
- ・ 学習時間の圧倒的不足
- ・ 動機の維持・・・言葉の分かる人が学習支援をすることはとても大切
- ・ 媒介言語の確保

☆日本語を勉強して出来るようになった人に学習支援をしてもらうのがいいんじゃないか？

☆元学習者であるからできること、日本語ネイティブだからできること→お互いに補完しあう。

- ・ 生活支援団体・機関との連携

(いくら頑張っても日本語を勉強しても、できないものはできない。医者に質問するとか、公営住宅の入居申込書を書くとか。)

たとえば病院の日本語→病院で使う日本語を教えるよりも、「病院に行くときにはどこで通訳を探しましょう」と伝えるとか。

日本語習得を義務化する前に必要なこと

☆ 支援を受けたい人すべてが支援を受けられる態勢作り

☆ 学習支援の質の改善

☆ 限られた学習時間でできるようになると現実的に期待できることは何かの見極め

2. 日本語教室に来る人の目的は日本語の学習だけとは限らない

日本語ポートフォリオ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/pdf/JLPJK.pdf>) の p.2 ページ「日本語教室に来ようと思った理由」

- ・ 自分の母語で話せる友達に会いたかった
 - ・ ほかの人と情報交換をしたい
 - ・ 毎日の生活で言葉に困ったとき助けてくれる人に会いたかった・・・etc.
- いろいろな理由で来ている。

どの理由が重要かは人によって異なる。

大切なこと：

一人一人の目的を理解する

目的に合わないことはたらない

日本語教室を居心地のよい場にするのが大切！

3. 学習者が学習活動の計画に参加することはなぜ必要か

【理由 1】

日本語教室での学習時間は、通常、1 週間あたり 1 時間半ないし 2 時間しかない。従って、生活や仕事で必要とされる言葉をできるだけ早く覚えたいと思ったら、学習支援者に依存しないで、自分で学習のイニシアティブをとり、仕事や生活の中でも言葉を学んでいけるようになる必要がある。言い換えれば、学習者の方たちが日本語の学習に対して当事者意識をもって、積極的に取り組むことが大切だということ。

【理由 2】

特定の属性を持っている人のニーズがすべて同じではない（『ソフィーの選択』）。一人一人のニーズは日々刻々変化する。学習スタイルも異なる（『日本語ポートフォリオ（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/pdf/JLPJK.pdf>）』34～36 ページ参照）。学習に費やせる時間も異なる（週 6 日、1 日 12 時間働いている人と、週 5 日、8 時間働けばいい人とか）。利用可能なリソースも異なる（コンピュータを持っているか、電子辞書を持っているか等）。規制のカリキュラムや教科書は、こうした個人差には対応できない。教師／学習支援者が一人一人の学習者の今日のニーズを正確に把握して、学習活動のプランを作ることもまず不可能である。

4. 自分自身のニーズに合わせた学習のデザイン

- ・長期的目標と短期的目標を明確にする

長期的目標：日本語がもっとうまくなったら何をしたいか

短期的目標：今できることは何か、次にできるようになりたいことは何か

- ・学習計画を立てる

☆ 学習計画を立てるときに大切なことは？

- ① 具体的に（ぺらぺらになりたい→だれと？何を話すときに？いつまでに？）
- ② 何ができたら OK とするかを考える
- ③ 計画を実行するための方法・工夫 例）手帳に書く、誰かに話しておく
- ④ リソースを探す 当事者意識を育てるためにも、リソースを学習者自身に持ってきてもらうのもいい
- ⑤ 記録を残す ポートフォリオ 31 ページの学習の日記（自分の学習について振り返り、それを残しておく）

【記入例】

- ・学習した日：～年～月～日
 - ・できるようになりたいこと：レストランで料理を注文する
 - ・できるようになったらどうするか：実際レストランへ行ってみる…etc.
 - ・いつまでにできるようになるか：～年～月～日
 - ・評価（まったくだめ・まあまあ・かんぺき）
- ⑥ 必要なら軌道修正していく

5. 『日本語ポートフォリオ』（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/pdf/JLPJK.pdf>）

自分で自分の学習をデザインする能力（学習者オートノミー）は、誰でもが初めから持っているわ

けではない。この能力を育てるためには、何らかの仕掛けが必要。『日本語ポートフォリオ』はそのための道具。

『日本語ポートフォリオ』は、ヨーロッパ・ランゲージ・ポートフォリオ（ELP）というものをもとにしている。ELP は、人の移動が激しい EU 諸国内で外国語学習の継続性を維持することを目的に開発されたツールで、小学生用、中等教育用、大学用、成人用などいろいろなバージョンがある。（ELP の背景にある外国語教育の理論に関しては、ヨーロッパ協議会（2004）を参照。）

『日本語ポートフォリオ』は、現在のところ、ふりがな付きの漢字かな混じり版、ローマ字版、英語版、中国語版があり、今年度中にポルトガル語版、スペイン語版を完成させる予定。これらはレイアウトがまったく同じになっているので、学習支援者がこれらの言語をできなくても、学習者と『日本語ポートフォリオ』を介して、学習の計画についてある程度意思疎通をすることができる。

- ・学習者が学習活動の計画に参加する
- ・学習者ひとりひとりが当事者意識をもつ必要がある
- ・他人がニーズの押し付けをすることはとても危ない
- ・ニーズは日々変化する
- ・学習者の学習スタイルはそれぞれ違う
- ・実際にはどうだろう？日本語ポートフォリオ 36 ページをやって、周りの人と比べてみる。

参考「日本語ポートフォリオ 36 ページ」

【勉強するとき】～自分の学習スタイル～

- ☐ ひとりでしたい
- ☐ ほかの人と一緒にしたい
- ☐ 家でしたい
- ☐ 図書館でしたい
- ☐ 喫茶店でしたい
- ☐ 静かな場所で行いたい
- ☐ 音楽を聞きながらしたい
- ☐ 時間があるときに集中して勉強したい
- ☐ 短い時間でも定期的に勉強したい
- ☐ 朝、勉強したい
- ☐ 夜勉強したい
- ☐ そのほか

やってみたい勉強の方法

--

6. 日本語教室での学習支援者の役割

(1) 学習計画を立てる手助け（アドバイジング）

質問、傾聴、承認（本間・松瀬 2006）

第二言語習得に関する専門知識の提供（前回の講座でご紹介したようなこと）

学習者間の情報交換をする機会、場作り

（リソースや学習方法に関しては、学習者のほうが詳しいこともままあるので。）

(2) 気持ちのサポート

日常生活のストレスが忘れられるようないい人間関係を作る

深刻な問題を打ち明けられたら、その道のプロに紹介する

学ぶ意欲を保つのを助ける

学習の進行状況に関心を持つ

しかし、それがプレッシャーになってはいけない

やったこと、できるようになったことは共に喜ぶ

できないことは共に心配する（不用意に「日本語がお上手ですね」の類の発言をしない。）

(3) 会話のお相手

「勉強」と教室の外での言語使用の橋渡し

覚えたことを思い出して使う

流暢さが増す

話す自信がつく

話題は、学習者が話したいことなら何でもよい

まだ日本語で言えないことは、得意な言葉を使ってもよい

学習支援者の役割

待つ

聞く

必要な言葉を提供する

少しぐらい間違っても気にしない

学習者の言いたいことが理解できなかったら質問する

学習者の理解できる言葉を使う

学習者の味方（「日本」を背負った発言を避ける）

求められたら、必要な情報を提供したり、専門家に紹介したりする

会話の補助に使ったメモなどは持って帰ってもらう

(4) その他の学習活動の手伝い

7をご覧ください。

(5) 言葉の知識の提供

こういう時はどう言えばいいか、この表現はどういう意味か、この漢字の読み方は何かなど、辞書を引いてもわからないこと、聞いた方が速いことについて、尋ねられたら情報を提供する

(6) 日本社会への橋渡し

地域の生活などに関する情報の提供
人とひきあわせる

7. 例えば、どんな学習活動をするようになるのか

以下、阪大の日本語教育実習で学生たちがやっている日本語教室で実際にあったことです。

- * 電化製品に書いてある言葉を知りたいという学習者：この人の家にある電化製品の写真をデジカメでとってきて、写真を見ながら、漢字の読み方と意味を学習した。
- * 一時帰国するので飛行機の予約をしたいがやり方がわからないという学習者：インターネットにある予約のフォームを印刷してもってきて、書き方について質問した。
- * 家族を連れて旅行をするので、目的地についての話をしたいという学習者：インターネットで英語で書いてある情報を探し、印刷してもってきて、それを話題にして日本語で会話をした。
- * お子さんを幼稚園に通わせている学習者：幼稚園から来たお知らせをもってきて、漢字の読み方やわからない表現について学習した。
- * 日本に来たばかりで初めて教室に来た学習者：いまいちばん困っているのは携帯の使い方がわからないことだということで、彼女の携帯を使って、発信、受信その他メニューにある言葉を学習した。
- * 電話の受け応えができるになりたい学習者：お連れ合いが日本語ができるので、手伝ってもらってモデル会話を作ってきて、同じグループの他の学習者に解説し、一緒に会話の練習をした。
- * アニメ好きの学習者：エヴァンゲリオンの主題歌をパソコンに入れて持ってきて、歌詞の意味について質問した。

8. 学習の体系的性はどうなるのか

学習者が必要だと思う行動から出発して、あちらこちらからリソースを集めてきて学習したら、体系的な学習ができないのではないかという危惧は、ボランティアの中にも学習者の中にも持つ人がいる。以下は、それに対する私の考え。

- * 体系的とは文型を積み上げることだけではない。言葉の能力は実は語彙の量が勝負という側面がある。
語彙をトピック別に整理して増やしていくのも立派な体系である。
- * 学習に使ったリソース、学習しながらとったメモ、作文などできあがった産物を記録としてファイルしていくことで、学習者一人一人の学習の体系ができあがる。
- * 文型を学ぶ方法は一つではない。ある行動ができるようになるための学習計画の中に、特定の文型の練習を含めることもできる。また、学習活動の中で遭遇した文型について母語で解説を読んでもよい。
(『みんなの日本語』の文法解説書はそのように使ってもよいはず。) ある程度行動

のレパートリーが増えた時点で、文型積み上げ式の教科書や文法書を頭から、読んでいって、自分の知識を整理することもできる。

- * 教室外に日本語を使った行動のしかたを教えてくれる人、見習える人がいる場合、日本語教室では文法の勉強をしたいという選択もありうるだろう。
- * 逆に、文法の勉強は一人でもできるから、日本語教室では会話をしたいという人もいるだろう。
- * どうしても教科書を1課から順番にやらないと気持ちが悪いという人は、そうしてはいけないという理由はない。

9. 難しいこと

具体的目標を考えてもらうこと・・・どうしても漠然とした目標になってしまいがち
限られた時間の中で、学習相談と学習活動の両方をする事
のんびり学習したい人に、学習計画を立ててもらうこと
媒介語がない人が来た時

グループの作り方・・・学習者によって、学習スピードのちがい、やりたい内容のちがい、使える媒介語のちがいなどある。

また、学習者オートノミーが高い人ほど、グループを作りにくい、という例もある。

参考文献

- 青木直子（2001）「教師の役割」青木・尾崎・土岐（編）『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 青木直子（2007）「学習者オートノミーを育てる教師の役割」『英語教育』2007年2月号，pp. 10－13.
- 青木直子（2007）『日本語ポートフォリオ改訂版ユーザーガイド』
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/index.html>
- ノールズ，M.S.（2005）『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイドーともに創る学習のすすめ』明石書店
- 本間正人・松瀬理保（2006）『コーチング入門』日経文庫
- ヨーロッパ協議会（2004）『外国語教育く2）外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社
- 前回もれていた参考文献
- バイゲイト M（1995）『オーラル・コミュニケーション：考え方と進め方』大修館書店

第9日目（1月27日）

題目：日本語支援法－2：学習者のニーズに応えるための戦略－1

「実践演習－1」

講師： 港島日本語教室「こんにちは」 コーディネーター 尾形 文

1. 教材について、どんな教材があるか

2. 教材選び

2. 1 「みんなの日本語」について

地域日本語教室で使用する時、以下の問題点がある。

- i. 『みんなの日本語 I』を終えるのに、1年かかる。50課までだと、2年かかる。
- ii 学習者の質問が、文法的なことに集中するため、適切に答えられない。
- iii 家での準備に、膨大な時間がかかる。
- iv 2冊（みんなの日本語1，2）終わっても、学習者はほとんど話せない。

などなど。

2. 2 以上から考えたこと

① 私たちと学習者は、どんな関係か。

私たちは先生！?????

学習者は生徒！?????

- ・ 文法中心に教えているが、こちらは専門知識はさほどない。ということは、先生ではない。

② 学校型と地域型の違いは何？

「選抜と契約」があるかないかの違いである。

・ 選抜

学生は、外国語学習に関して適性が高く、日本語学習のための時間があり、それを支える経済力もある人。教授者は、高い専門性を持っている人。

・ 契約

学生と教育機関の間には、日本語教育の期間や内容などに関する契約関係がある。また、教授者と教育機関は、報酬・教授方法・授業内容・労働時間などに関する契約が結ばれている。

- ・ 選抜と契約を否定して成り立っているのが地域型である。学習者も支援者も、自由に参加し自由に退会し、自由な活動ができる。

③ 考えた結果、『みんなの日本語』はうちの教室には合っていない、という結論が出た。

- ・ 学習者は、日本語だけを学びに来ているわけではない。教室に来る期間が長ければ長いほど、友だちとして付き合うようになる。
- ・ 日本語能力検定試験を目的にしている学習者もいる。しかし、そのような学習者のサポートをしようすると、支援者も勉強しなければならない。それには、



膨大な時間を費やさなければならない。

- ・ 基本的な日本語文型を決められた順番で学習するより、明日使う日本語や日本のシステムを提示したほうが、役に立つ。

3. 生活者としての外国人のための日本語教育について

教室を以下のように「学校型」と「地域型」に分けて考える。

「学校型」・・・留学生、就学生を対象にした日本語教育
「地域型」・・・それ以外の人を対象

<ワーク>

そのほかの「学校型」と「地域型」の違いについて考えてみる。

	地域型	学校型
採用基準	支援者：誰でも参加できる 特になし 学習者：誰でも参加できる 特になし	教師：組織が決めた能力基準に従う（日本語教育能力検定試験合格者、大卒以上、修士以上、420 時間修了者などなど）。 学習者：ビザの有無から始まり日本語能力、学習意欲、学習時間の有無、授業料の支払い能力など組織が提示する基準に従わなければならない（選抜）
組織との契約	支援者：特になし 学習者：特になし。受講量をとっている教室の場合は、受講料を払わなければならない。1 ヶ月 500～2000 円	教師：就業時間、給与、就業形態（常勤・非常勤）、機密事項の厳守などなど 学習者：授業料の支払い、出席の約束（学校が入管に報告）などなど
活動（授業）の形態	マン・ツー・マン クラス形式（ひとりの支援者に数人の学習者） グループ形式（複数の支援者と複数の学習者） 時間：1 回 90 分～120 分程度で週 1,2 回	1 人の教師に複数（2～3 人の少数から 40～50 人という大勢までさまざま）な学習者のというクラス形式が主流では、同じ日本語レベルの学習者で構成される。 時間：日本語学校の場合、1 週間に 20 時間
学習者の目的	生活に使える情報を収集 相談相手（話し相手やおしゃべり相手）がほしい 悩みを聞いてもらう 地域のことや日本のことを知る ほかの人との交流	日本語、日本文化、日本事情を勉強して、その後で専門的なことを高等教育機関で勉強する ビジネス目的
双方の関係	双方がおなじ立場 友人、隣人関係	教える者と教わるもの 時には、友だちのような関係や

	地域型	学校型
	助言者 地域に住む先輩・後輩 ☆支援者は教える、教えられるという優位の枠組みから離れるためにどういう関係を作ればいいのかを考えなければならない	親代わりのような関係も必要だが、基本的に教師は教育者であらねばならない。教育者は、常に、学習者がよりよく変化していくための助けとなることが理想
活動（授業）の内容	学習者と支援者が相互に学習できる内容を考えていかなければならない 日本語ができる人ができない人に日本語を教えるということを考えてはいけない。支援者は、学習者と時を過ごすことにより、自分の視野を広め、自分自身の成長を期待するという気持ちが大切 また、学習者は、異文化の中で、いかに自分らしく暮らすかを考える場として、活用してほしい	学校が立てたカリキュラムにより、学習者の目的に合った授業を行う。 入門、初級段階では、教科書を使った文法重視、積み上げ方式の授業が主流
学習期間	学習者が望めばエンドレス	半年～1年（長くとも2年）
学習時間	1回 60～120分 週 1、2回	週 20時間

<ケースワーク>

（架空の）学習者のために、どんな教材を使ってどうやって支援するのかグループで考えてみよう！

Aさん タイ 35歳 男性 就労ビザ 来日一年 3年滞在予定

・・・アフター5の行動や会話、一年間生活した中での疑問や困った点を中心に考える（日本の慣習など）→あまり家庭には関係なく、彼自身の生活に即して。一年間生活してきた中で「おかしい」とか「困った」と感じたことを中心に組み立てていけば良いのではないかな。

・・・日本の生活習慣・マナー、日本人の行動様式、日本の文化・伝統行事→今後「日本とタイ」のパイプ役として仕事していくために知っておかないとトラブルが起きるかもしれない場面設定から教材を作っていけば良いのではないかな。

Bさん インドネシア 30歳 女性 配偶者ビザ 来日半年 永住予定

・・・地域マップ、子供の学校、夫の親族と、仕事を始める→本人のニーズを掴んでから教材を作成
・・・近隣の地図、回覧板、スーパーなどのチラシ、学校・幼稚園の配布物、市役所のホームページ、インターネット→普段の生活から教材を持ってくる。

Cさん 中国 25歳 男性 就労ビザ 来日1ヶ月 3年いる予定

・・・近隣の地図（生活に必要な店・役所 etc...）、職場の通勤するために必要な資料、おにぎり関係資料、スーパー・コンビニ、アフター5、国際電話のかけ方→仕事に関して指示されて分かるように、来日1ヶ月なので生活に必要なもの。

4. 自分で教材を作りましょう。

港島日本語教室こんにちはでは、学習者と一緒に教材を作っている。

最初は、私一人で作り始めた。その際、最も難しかったのは、学習者にとって何が必要かという点をどのように把握するかということだった。

結局、当人である学習者に聞くのが一番いいということに落ち着き、『学習者とともに作る教材 わくわく』ということで、現在製作中である。

『わくわく』は、現在製作中であり、これは、永遠に製作中である。それは、進化し続ける教材でなければならないという考えからである。

5. 日本語ボランティアとして大切なこと。

・はじめに学習者ありきと考える。

（教科書ありき、文法ありき、ではない。）

・自分で考える。

（「何をすればいいんですか。」「どうすれば、いいんですか。」と聞く前に、学習者を見て、自分が何をすべきかを考える。）

・常に、問題意識を持つ。

（今の自分の行動さえも、問題視することが必要。）

・ネットワークを持とう。

（唯我独尊に陥らないために。）

・目の前の学習者をよく見て、自分で考えて動く！

提示教材

1. 「みんなの日本語初級 1、2」 スリーエーネットワーク
2. 「げんき」 Japan Times
3. 「生活日本語」 文化庁
4. 「機能別日本語表現集」 大和定住促進センター
5. 「わくわく」 港島日本語教室 自主教材

*****第9日感想*****

具体的な支援対象者を設定しての活動や教材をグループで考えたり、発表したりというのは今後の自分の活動にきっと役立つと思った。

学校型・地域型の違いについて考えてもいなかったもので、日本語教室についてよく分かった。学習者のニーズも知り、それに対する教材を考えて作るということもわかった。教材を作るのは大変だが、今のところ楽しそうだな、と感じた。

最初、この講座を申し込んだとき私が考えていたものと、講座内容があまりに違っていたので戸惑った。今日の講座を受けて、日本語学習者が学校型と地域型に分けられることを知り、私がぼんやり感じていた違和感、どの部分にすっきりしないものを感じていたのかがはっきり分かった。ありがとうございました。

地域型と学校型の区別の大切さは参考になった。より具体的なイメージの元で学習者への支援のあり方についてもイメージがいろいろ生まれ、地域型学習へのイメージがより具体的に理解できた。

学習者のニーズにこたえるための戦略、尾形さんの講義を受講して、三つのパターンで教材を設定する場合の例題でたくさんの教材が考えられてよかった。貴重な資料ありがとうございました。

具体的な活動についてのお話で、考えさせられたことは既成の教材があっても使いこなす技量がなければ難しいということ。ワークショップで自分たちが必要な教材や方法について話し合ったが、なかなか意見が出なかったことから、自作の教材を学習者に合わせて発掘するというのも大変だと思った。

とても参考になった。ただ（私はまだボランティアを始めたばかりですが・・・）「みんなのにほんご」のテキストも学習者によっては、絶対に役に立たないというわけではないのでは？とおもいます（若い人とか永住目的の人とか）。本は文系的に分かりやすいところもあるので、教科書的に使うだけではつまらない（私は90分のうち30～40分使って、あとは学習者のニーズにあった教材で進めているが）「みんなの日本語」も少しずつやっていきながら、この中でもテーマを決めて使うのもいいとか、いまは考えている。

具体的にどう教材作りを考えるのか？かなりいろいろな内容が出てきたので、実際の教材作りのためのどんな教材を使うのかわかった。でもことばをどう教えるのかまだいろいろ不安は残る。尾形さんは長年苦勞して実践されているので、もっともっと詳しく聞きたい。

日本語教師には学校型と地域型とがあり、とくに地域型では支援者がどうかかわるかがとても大切であるかが勉強になった。少しでもお役に立てるようになりたいと思った。ありがとうございました。

地域型と学校型のちがいがよく教えてもらった。教材を自分で作るということが参考になった。学習者のニーズにあわす方法が分かった。ありがとうございました。

だんだん日本語指導の具体的な方法についての話になりイメージしやすくなった。教材作りのヒントがいろいろ出されたので、役に立ちそう。

有益な情報、経験談をありがとうございました。ぜひ一度教室を見学したいと思った。

学校での日本語教育とボランティアのそれとは違うし、区別すべきだという発想はまるでなかった。自分が学校現場に身を置いている立場であることからきっと学校教育の延長でしか考えられないだろうということに今日気づいた。

教科書や教材はどのように使うのかが問題のように思う。ただ、教科書・教具は道具なので頼りすぎるのもだめだと思う。

よく勉強になった。ありがとうございました。

実践演習が非常に参考になった。

後半の学習者を設定して具体的に想定するとイメージがわきやすく、ほかの意見や見解も分かり認識を深めることができた。前半は少しの講義で分かることなので、後半部分をたくさん学習してもよかったのでは？

地域型と学校型とのちがいについてよく分かった。長年教師としてやってきたので、どうしても教え
たがるよう泣きがしますが、今日の講義をこころにとめてその弊害が出ないよう気をつけたいと思う。

テキストに頼らず、いろいろなことが教材になることが分かった。そして学習者にあったニーズに即
したことを支援していくことが大切だということがよく分かった。

第 10 日(2 月 2 日)

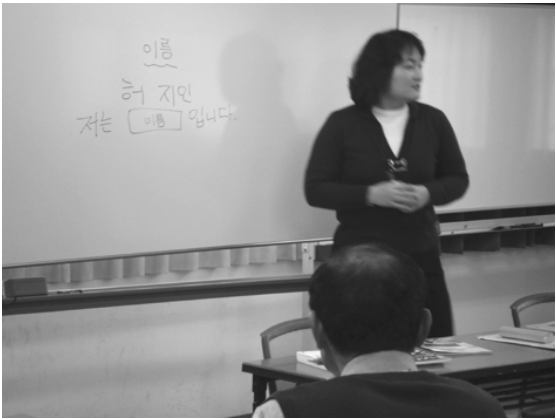
題目：日本語支援法－2： 学習者のニーズに応えるための戦略－2
「実践演習 2」

講師： 神戸定住外国人支援センター
兵庫日本語ボランティアネットワーク
港島日本語教室

高橋 博子
後藤ひろ子
許 智 仁

1. 韓国語で「みんなの日本語 I」の第一課を学習する。(許 智 仁)

제 1 과 문형 1. 저는 허지인입니다. 2. 산토스는 학생이 아닙니다. 3. 미라는 회사원입니까? 4. 산토스도 회사원입니다.	회화 처음 뵙겠습니다. 사토: 안녕하세요. 야마다: 안녕하세요. 사토씨, 여기는 마이크 미라씨입니다. 미라: 처음 뵙겠습니다. 마이크 미라입니다. 미국에서 왔습니다. 잘 부탁드립니다. 사토: 사토 게이코입니다. 잘 부탁드립니다.
--	--



【ねらい】：学習者の気持ちを体感する

直説法でやってみてどうだったか？→全く分からなかった！

「学習者のかたは、もしかすると日本語教室でたった一人だけ日本語が分からないかもしれない。何か聞かれても、それを自分が答えなければならないかどうかすら分からない。どれほどストレスのたまる思いをするか・・・」

2. 地域の日本語教室で使うテキストを比べてみる。

『みんなの日本語』、『げんき』、『にほんご宝船』の3冊について、グループで話し合う（20分程度）

↓グループから出た意見↓

	みんなの日本語 I スリーエーネットワーク	にほんご宝船 アスク	げんき II Japan Times
課	14 課	22 話「料理」	14 課 バレンタインデー
対象者	・学校型	・長期滞在者向け	・英語圏の日本語既習者向け ・学生向け ・若い学習者向け
価格	2500 円＋税	1000 円＋税	3000 円＋税
特徴	・時間をかけて積み上げる ・堅苦しい印象（中高の英語の教科書のような） ・順を追って学習するので、途中から入れない ・継続の必要がある ・NHK 英会話の教科書のような	・絵がたくさんあって見やすい ・書き込みができる ・字が大きい ・目次のどの項目からでもできる ・日常生活に密着したトピック ・誰でも使えそう ・生活場面に分かれている ・地域の日本語教室で最初に使えばよさそう ・学習者の必要・興味に応じて使える	・会話のトレーニングに役立つ ・文法も重視されている ・英語が分からない人には無理 ・トピックにも偏りが見られる ・内容に興味を持って学ぶ意欲がわくようなものではない
副教材	とても多い		

【それぞれの教材に対する講師のコメント】

「げんき」

高橋さん自身は「げんき」を学習活動にしたことはない
なぜ？→定住者の方々には、トピックがあわない。
本が厚くて持ち歩くのが大変。
値段が高い。
でも→英語が分かれば CD もあるので自学自習ができる。
トピック自体は参考になる

「にほんご宝船」

- ・みんなで作っていくノート（まだ日本語が読み書きできない学習者は、支援者に書き込んでもらったりする）。
- ・本自体が薄いのもって歩きやすい
- ・漢字に振り仮名がついていない（目に頼らず、音で覚えることで早く身につく）
- ・楽しんで交流することが目的の本。

「みんなの日本語」

- ・本が厚い（重い）
 - ・日本地図や世界地図なども載っている
 - ・副教材が充実している（各国語訳、文字を勉強しない人のためのローマ字版など）
3. 「みんなのにほんごⅡ」を使った模擬授業。

文法積み上げ方の弊害—2冊終わっても話せない、達成感がない
→それでは、この教材をどうやって使っていけばいいか？

【実際に「みんなの日本語」を使った活動のビデオをしてみる】

（2007年7月31日撮影 保育クラスの様子）

- ・学習者が来たときに、その国の民話や文化の知識を支援者側がもっておくのがいい。
- ・教室の様子を外の人に見せることがあまりない（人権問題などへの配慮から）が、ビデオをみてどう思ったか？
→丁寧に指導されているという印象を持った。



【みんなの日本語Ⅱ32課を使つての模擬授業】

文型1「～たほうがいいです」の導入案

「日本語が上手に話せますか？」→

学習者「話せません」→「毎日勉強したほうがいいです」

→話題を変えて「～がおいしいです」→学習者「おいしいですが、ふとります」

→「運動したほうがいいです」

→新しい単語運動しますの練習（絵カードを見せて口頭練習）

文型2「～でしょう」の導入案

→一週間の天気予報の表を見せて、まず日付の読み方の確認

→学習者に天気予報をしてもらう→「八日は曇りでしょう」等

4. 地域の日本語教室

クラス形式とマン・ツー・マン形式にはどういう違いがあるか？

- ・クラスならほかの人の言うことが聞ける、意見が分かる
- ・クラスに仲間がいれば、教室にやってくるのが楽しみになる
- ・マン・ツー・マンなら相手にとことん合わせられる

支援者はどういうきっかけでボランティアを始めるのか？

- ・ボランティア養成講座を受けたことをきっかけに。
- ・友達の紹介
- ・専門で勉強したから etc...

学習者はどういうきっかけで教室にやってくるのか？

- ・知り合いの紹介
- ・市からの斡旋
- ・別団体からの紹介 etc...

学習者の背景を知らないと、いい支援は出来ない！

5. 質疑応答

- ・外国語ができないと日本語ボランティアはできない？
→これはウソ！でも自分が外国語を勉強する経験は大切（←学習者の気持ちを知るため）
- ・教室に教材は用意されている？
→教室による。絵カード等は個人で所有するには高価すぎる（4万円近く）

*****第10日感想*****

実践されている場面をビデオで見せていただいたこと、教える内容の例で実際にされていること。私も実践者として身近に感じてうれしく思いました。やってみたいとは思いますが、まず教室を見学をしたと思います。灘区の村山氏の教室をぜひうかがいたいと思います。現場を見てからが一番と思います。ありがとうございます。

具体的に教材や支援法を提示していただき、分かりやすかったです。さまざまなケースがあり、手探り状態というのも納得がいきました。また、それだからこそ自分の創意工夫が生かせるところがありやりがいいそうです。

勉強になりました。ありがとうございました。

学習者がしっかりと日本語の構造を捉えるために、さまざまな工夫をすることが指導者に必要だということがよく分かりました。教科書だけでは理解も運用も十分にできるようになるものではないということもよく分かりました。肩肘張らずに長続きするようなボランティアの活動をめざすという気持ちが必要なのだと改めて思いました。

初めて具体的な授業のやり方に触れて日本語支援がどんなものか少し分かったような気がします。最初の韓国語だけの模擬授業は初心者の「わからなさ」が本当によく分かりました。ことばでいくら説明しても分からない、ということもとてもよい体験でした。学習者のためにさまざまな工夫をする楽しさもあると知り、ボケ防止にもなるのでは、なんて思いました。

ことばが理解できない教室で耐えて座っていることのつらさをこの体験でよく分かりました。日本語の使い方を正しく知ることがとても大切ですね。「どう違うのですか？」との質問に答えられないことはつらいです。

はじめの体験では「なにも」分かりませんでした。「ことば」が分からない学習者の不安な気持ちと同じなのかもしれません。きょうは具体的なことがよく分かりました。いままで「できるのかなあ」と思ってきましたが、外国語が出来なくても・・・という話から「できるのかもしれない」と思えるようになりました。

今日の講義で具体的な様子（現場）が見えてきました。授業のやり方、工夫点など、ちょっと分かってうれしかった。英語を中学校で教えていることが少し生かせるかな？共通点があってよかった。けれど授業の文型（て形、ます形、た形）など自分自身がぜんぜんわからないので、まだまだこれから勉強しないととても高橋さんのようにすぐに現場では出来ないと思いました。実際にボランティアとして自分がやれるのかもまだよく分かりませんが、いままで受けてきた10回の講座の意味が少し分かりつつあります。残り3回で答えが出るのかな？

学習支援に関する実際のやり方を教わり、いろんな教材を工夫され、たのしく実践されている様子がよく分かりました。話術の巧みさが講座の楽しさにつながっている気がします。

日本語支援の方法について学習者の背景をしる、よく分かりました。ガンバローと思いました。

具体性のある話でよかった。不安な外国の方に教えるのは、表情の和やかさもおいおいに決め手になると思った。今日の高橋さんは相手を安心させられる表情でした。なにか人に役立てることが何かしたいと思っていますが、今日のお話はよかったです。

支援は始めてみるとますます問題点が見えてきて、難しい！奥深い！というのが実感です。特に何気なく使っている「日本語」を毎回見直すチャンスになっています。私はほかに子供の支援もやってみたいと思っています。

日本語支援法、実践演習を受講して、具体的な方法を学習させていただきました。決め細やかな計画を立てておられるのが分かりました。

テキスト（みんなの日本語、にほんご宝船、げんき2）の特長とか教材の作り方、大変勉強になりました。支援者はその学習者・教室のニーズに合わせたものにしなければと思います。ありがとうございました。

具体的な内容でとても分かりやすかったです。ありがとうございました。

現場の具体的な問題や教材についてずいぶん理解できた。実際に活動を始めれば、今日学んだ様なことがきっと役立ったり、助けられたりするんだろうと思いました。



第 11 日目 (2 月 9 日)

題目：「外国」から来た子ども支援の状況と課題－1

自己開発のためのストーリーテリング (4)

「総論：学校での日本語支援」

講師： 神戸市立本山第二小学校 教諭 村山 勇

1. キーワード

(1) 生活言語と学習言語

生活言語は生活するうちに身に付く言集で期間に上達する。

学習言語は、場面の依存度が弱く抽象的であ
で計画的に指導されなければなかなか身に付
日本の教員の大半が良い英語教育を受けてき
英語で平行四辺形と言える人はわずかしかい
ろう。

しかし、子どもたちが生活言語を習得するま
言語を含む教科学習をしないわけにはいかない。子どもは、日本に来たその日から年齢に応じた教科
学習を始めなければならない。生活適応指導、日本語学習、母語学習も同時並行でらせん的に始める。

・ 話しかけの原則：

簡単、ゆっくり、はっきり、実物、動作、(意味ある繰り返し)、しゃべりすぎない

・ 生活適応指導：サバイバルレベルから、まずトイレ、いい、だめ。

・ 日本語学習：日本語教授法を取り入れ子ども向けに応用（文法をおもしろく身につける方法）。

・ 教科学習：認知発達がとぎれないように即開始、翻訳教材も併用し年齢に応じた学力をつける。

・ 母語学習：母語を育てれば、日本語も伸びる。

・ サバイバルレベルからの教科書『日本語学級』がある。

(2) 「抽象的概念獲得年齢の壁」

俗に「九才の壁」と呼ばれるものである。小学校 3 年生ぐらいまでは、目に見える具体的な物が対象だが、それ以降は、具体的でない物、抽象的な事柄についての学習が多くなる。そこで、小学校低学年には、楽しく具体的な方法で行い、それ以上の子どもたちには、抽象的な学習内容を分かりやすく噛み砕いて指導している。また特に書き言葉が習得できるように力を入れている。高学年にとってもおもしろいことは必要なので、この境目は斜めである。



あり、短
る。学校
かない。
ているが、
ないであ

で、学習

おもしろい、呪文的 / 分かった、役に立つ、知的好奇心、意味ある繰り返し

2. 日本語教授法を取りれよう

(1) 日本語教授法とは

ここ 10 年ほどの間に、多くの大学に日本語学科ができ、民間の語学学校では日本語教師養成講座が盛んだ。しかし、まだ小中学校では一般的な概念とはなっていない。日本語指導者は、日本語教授法を取り入れることと、それを子供向けに応用することが大切である。教員、語学派遣員、日本語指導員、行政担当者も日本語教授法を学ぶべきである。横浜国大では教員免許の必須単位としている（「外国語として日本語、その教え方・学び方」佐々木瑞枝、講談社現代新書）。

(2) 国語文法と日本語文法は違う

国語とは日本語の環境で育った者を対象としている、日本語の語彙が豊富にあり、自分で説明は出来なくても、用法に慣れている者が対象となる、日本語とは日本語を外国語として学ぶ者を対象としている。日本語を客観的に分析することが必要となる。例えば、次の表のように動詞の分類も違う。

国語文法	日本語文法
五段活用	①グループ（あ段）
上一段・下一段活用	②グループ（い段・え段）
か行・さ行変格活用	③グループ（くる・する）

(3) 日本語文法の指導順

外国から来た子どもたちには、まずサバイバルレベルの日本語指導が必要である。「いい、だめ」「分かる、分からない」などを状況と動作を付けて指導する。）またすぐに必要な給食、体育、けんか、いい訳等の用語も始める。この時は、丁寧な日本語よりも、友達にも通じる簡単な日本語を教える。次に、動詞の「ます形」から指導する。これは、「書きます」「書きません」「書きました」「書きませんでした」「書きましょう」など語尾が規則変化するから初級者にとっては、覚えやすいのである。次に「普通形」を指導する。これは、不規則変化だから時間をかける。

(4) 「て形」

日本語文法では、「て形」は、特別に取り上げて教える。私は、子ども向けに次のように替え歌を作って指導している「て形の歌（ABC）の歌は世界中にあるので替え歌に適している（村山勇案）動詞の末尾がこうなら、手形はこうなります。（逆に歌ってもいい）

「う・つ・る」は「って」、「む、ぶ、ぬ」は「んで」

「す」は「して」、「い」は「くて」、「ぐ」は、「いで」ですよ。（ここまで①グループ）

「いって」（①グループの例外）、「みて」（②グループのい列）、「たべて」（②グループのえ列）、「きて」「して」（③グループ）、「おぼえて」（②グループのえ列）

*成人向けのオーマイダーリンは子どもには難しい。

(5) 形容詞など

国語文法の形容詞、形容動詞は、日本語文法では「い形容詞」、「な形容詞」と呼んでいる。形容詞も活用するところが日本語の大きな特徴であり、来日した子どもたちにとっては非常に難しい「絵カードと活用形を繰り返し練習している。

(6) 日本語教授法を子ども向けに応用

- ・VT法（わらべ歌のリズム、手の動き）、TPR法（身体反応）
- ・動詞カード（表にイラスト、裏に「辞書形」、「ます形」、「て形」）
- ・形容詞カード（表にイラスト、裏に「辞書形」、「ない形」、「て形」）
- ・双六（動詞活用イラスト）、・文作りさいころ（5W1H）、又作りルーレット
- ・替え歌

動 詞 活 用 歌（ABCの歌の替え歌、Aの人とBの人のかけあいで歌う）

ます形	A かく 辞書形	A かきます	A かいてくだ さい	B かきません	A かきましょ う	B かきました
普通形	A かける	A かいてる	A かいて	B かかない	A かこう	B かいた
命令・使役 など	A かけ	B かかない	A かけば	A かかせる	B かかれる	B かかされる

「日本語動詞活用歌」

ビデオ2 「日本語の教え方」で各種の技法をみる

【資料】：日本語指導 51 連発（逆 50 音図（辞書引きに有効）、一息三回、カードの入れ替え、手品等）

(7) 漢字指導

非漢字圏からの子どもには漢字の 300 字の壁がある（波多野ファミリスクール大蔵 氏）と言われる。そこで、次のような教材を作って指導している。

- ・1字で意味のある字（表にイラスト、裏に読み）日、木、月など
- ・偏とつくりの組み合わせ（表にイラスト、裏に読み）を切り離したパズル
- ・音読みと訓読みを熟語と文で「三月と月曜日など、表にイラスト、裏に読み）
- ・口唱法による筆順指導（たて、かぎ、よこ で 口、さん、ひと、ひ で 春）

【資料】：漢字の口唱法での言い方

(8) 作文指導

- ・イラストを参考に特定の語だけで作文する。（大蔵氏 GLOBE 誌より、無料）
- ・先に、テーマに関する単語、文型を与える。
- ・単語や助詞カードで文作りをする。入れ替え可能で作文が作りやすくなる。
- ・いつ、どこで、なにを、どのように、どうしたを確認してから書かせる。
- ・感情語を入れる、「」で人の言った言葉を入れる、（ ）で人の思った言葉を入れるなどの段階的指導をする。

- ・ 定番表現の書き写し（行事作文など）
- ・ 母語作文もすすめる（母語刺激を与える、母語が伸びれば日本語も伸びる）
- ・ インターネットの「作文メールマガジン」の各種の作文方法を活用している。
見たこと、うそ、再話、五七五、ラブレター、げらげら、数字、などなど等

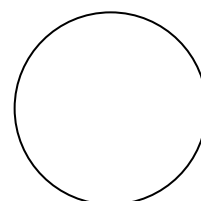
(9) 音声指導

国語の教科書を音読し、それをカセットテープに録音して子どもたちが家庭で練習できるようにする。その際に、音読の方法としては、「文節読み・同じ長さの空白」、「一文読み・同じ長さの空白」、「シャドーイング」を取り入れる。

(10) 日本語教材作成のための留意点（又は作成された教材の評価の観点）

- ・ 字体はできるだけ教科書体に近づける。（き、さ、で、む、り等）
- ・ 初期には書き込みの枠をつける。（ ） だけでは難しい。

り	ん	ご



- ・ イラストは、単純で一つの意味しかないもの、子どもの生活に近いもの、妥当性のあるものを著作権に留意して、イラスト集から選ぶか自分で描く。
- ・ 練習ワークは、線で結ぶ、色を塗る、迷路にするなど楽しく作業しながら、力がつくように工夫する。子どもができる分量も考慮する。
- ・ ある母語の子どもは特定の誤りをするので、母語別誤り矯正、母語発想の問題を作る。（leg と foot、かぶる・きる・はく、自・他動詞、アミーゴ・アミーガ）

(11) 日本語教授法を加味した教科学習の方法

最近、各地で研究されてきている。日本語を簡略なものに言いかえる。複文を短文にする、キーワードを強調する。省略してある助詞を補うなどである。横浜国大の研究冊子より）こうして、より子どもが分かりやすいようにと努めることは、結局日本の子どもを含めて全ての子どもたち役立つのである。

3. 教材の紹介と流通

日本語指導を必要とする児童生徒の状況は、非常に多様である。従って誰にでも使える教材は、誰にも使えない教材となりかねない。指導者は、子どもの状況に応じて個人カリキュラムを組み、各教材の部分を取捨選択していくことが望まれる。

(1) 初級教材

「日本語学級1・2」（凡人社）、「ひろこさんのたのしいにほんご」（凡人社）、「にほんごだいすき」（むぎ書房）、「学校生活日本語ワークブック」（凡人社）、「こどものにほんご」（スリーエーネットワーク）などが、ここ数年で市販された。これらのテキストは大学での日本語教授法と現場での子どもへの指導経験が加味された良質のもので絵カード、ワークブック等も付属されている。全国的に流通しているので転居しても使える。もはや初級テキストを自作する必要は無くなった。これからは地

域教材（社会科 3 年生で市，4 年生、県）

中級教材、教科教材、翻訳教材、録音教材、パソコンソフトの開発が必要である。

(2) 各地の自治体や学校の開発した教材

東京都、川崎市、大和市、名古屋市、三重県、奈良県、大阪市等を初めとして全国で制作されている。ほとんどは制作部数が限定されているのと著作権のために、他地域の者が入手するのは困難である。正式に著作権をクリアし使用できるようにするべきである。（神戸市教育委員会にあり）

文字読み取り（OCR）か PDF にしてデータにする

(3) マルチメディア教材

文部科学省は、マルチメディア版「にほんごをまなぼう」CD-ROM（コピー可）を制作し全国に配布した。このような教材が、もっと制作されねばならない。「そのためにも、コンピューター技術者やイラストレーターも参加するべきである 三択教材制作ソフトやデジカメでの写真取り込み、パワーポイントやワードのテキストボックス、エクセル等（差替簡単）等で作成中。

(4) 共有・流通のために

教材を私蔵しているのは死蔵しているのと同じである 制作教材を公開、交換し追加 改良していくことが大切である、また紙では量的にかさ張るので、フロッピーや CD-ROM に書きこんでいくのが良い。さらに今後は制作された教材をインターネットにのせ、自由にダウンロードできるようにすることが望ましい。川崎市では既に一部そうになっている。教材の収集、編集、保管ライブラリー化し貸し出しをするリソースルームの設置が急務。

(5) 情報の収集、発信、指導者のネットワーク化

学校教員、巡回指導員、語学派遣員、指導補助員など全ての指導者が情報交換出来るようにネットワーク作りが必要である、既に、所沢市が中国帰国者センターが「子どもメール」、「あちこちメール」というメーリングリストを主催し、全国から多くの指導者が参加している。いながらにして、日本及び世界の情報に接することができる。各地の用途に応じた連絡会をメーリングリストで作るべきである。もちろん E メールが扱えることは必須条件である。（本校では海外からの転入相談も E メールでしている。）またインターネットには日本語教育、作文教育、国際理解教育に関連するサイトが豊富にある。（実践シェアの会、海をこえて等）適宜取り入れている。

(6) 文部科学省「学校教育における JSL カリキュラム開発について」

「外国人児童生徒教育支援ホームページ」<http://jsl2.u-gakugei.ac.jp>

第一期 平成 13 年 トピック型（月、火、水、木、金、土）

第二期 平成 14 年 小学校の教科対応型（国、算、社、理）

第三期 平成 17 年 中学校

AU カード（段階的アクティビティーユニット、段階的スピーチレベル）と指導案集を作成している。ほとんどの日本語教室は、指導者が一名なので、学年、年齢、母語、来日時期、日本語の力が

異なる子どもたちが同時に学習しなければならない。そのため、プリント学習が主になることも現実だ。この JSL カリキュラムを使えば、授業として日本語指導や教科指導が可能である。また原学級での総合的な学習の時間にクラスの子どもたちと同時に学習することも可能である。活用されたい。スリーエーネットワークから概論、国語、算数、理科、社会の五冊発売中。

4. 最後に

(1) 日本語学習でどんな力をつけるのか

- ・ 確かな学力（日本語も母語も活用して）、
- ・ 自己実現（日本と母国を結ぶ人材、〇〇人というアイデンティティだけでなく、母語 も日本語も使える、両方の文化に親しんでいるというアイデンティティ）
- ・ 日本語での意見表明の力（日本批判も OK、多文化共生社会の実現へ）、

(2) 母語教育（アイデンティティとしての母語、生活言語としての母語、学習言語としての母語、コミュニケーション言語としての母語などに分けて子どもの状況に応じて母語教育をする。）

(3) 地域日本語ボランティアへの援助

- ・ 地域ボランティアによる子どもや保護者への日本語教室に空き教室の使用を
- ・ ボランティア教室の母語指導講師の謝金補助（語学派遣員と同じ扱いとする）
- ・ 児童生徒のボランティア日本語教室への出席を学校出席に扱う
- ・ 学生ボランティア、地域ボランティアの学校導入（アクティブプラン、地域チューター等）
- ・ 役所の窓口で外国人児童生徒の名前の読み方、語順に配慮を（南米系などは姓と姓だけ、名と名だけにならないように、中国系などは漢字の読み方で、変な意味にならないように）
- ・ 郵便受けの名前に配慮を（日本での生活の必要により、漢字、カタカナ、ローマ字、本名、日本風名を使い分けている）

(4) 地域ボランティアとして支援する際の問題点

- ・ 場所・時間の確保、教材・教具の保管場所、運搬方法
- ・ 学習者の募集、学習者の意識・動機付け（遊び感覚、指導者への態度）、会費
集中できない子、迷惑をかける子への対処、参加を迷う子、たむろする子
- ・ 支援者の募集（学習者の三倍）、会費
支援者の意識（どうせボランティアだから？、子どもの方が簡単？）
学習以外の相談（金銭、就職、住居、恋愛）
- ・ 週一・二回でできる内容、指導方法、研修会
- ・ 学習記録の管理、引継ぎ

参 考 文 献

- 「エルクラノはなぜ殺されたか」(明石書店)
- 「ベトナム難民少女の十年」(中央公論社)
- 「ブラジルから来た娘タイナ 十五歳の自分探し」(小学館)
- 「ニューカマーの子どもと日本の学校」(国際書院)
- 「外国人の子どもと日本の教育」(東京大学出版会)
- 「異文化に育つ日本の子ども」(中公新書)
- 「入国児童のための日本語教育」(スリーエーネットワーク)
- 「ブラジルと出会おう」「韓国・朝鮮と出会おう」「中国と出会おう」「フィリピンと出会おう」(国土社)
- 「パトリシオーブラジル生まれの日本人たちー」ブラジリアン・ベストコレクション社編
(柏書房)
- 「DEKASSEGUI-OS EXILADOS ECONOMICOS 素晴らしき夢・出稼ぎ」(柏書房)
- 「ことばを越えて」日向 ノエミア(世論時報社)、
- 「はじめのいっぽポルトガル語版」(スリーエーネットワーク)
- 「ブラジルの大地に生きて〜渡辺トミ・マルガリータの生涯〜」(くもん出版社)
- 「パウラちゃんのニッポン日記」(国土社)
- 「ガイジン生徒がやって来た」(大修館書店)
- 「かな練習帳ポルトガル語版」「漢字練習帳」ⅠとⅡ(スリーエーネットワーク)

【教科支援ワークショップ】

- (1) 算数、国語、理科、英語での具体的問題を提示し、「外国」から来た子どもたちに分かりやすくするための方法、また、彼らが文化の違いから混乱する例をあげた。

例：国語 6 年生「次の俳句の季語は？」

「菜の花や 月は東に 日は西に」

英語 中学 1 年生「() の中に適当な語を入れよ。」

How old is Sayuri? () is 14 years old.

- (2) 外国人児童の気持ちの体験

中国の算数の教科書の問題を中国語の分からないものが見たら、どう感じるか？

1. 改写成阿拉伯数字。

五千六百八十二 三千七百零三

2. 有 15 只猴子。

猴子比兔子多 4 只。

兔子有多少只？

略

題目：(2) 中学校からの報告

「神戸生田中学での体験から」

講師：神戸市立神戸生田中学校 教諭 榎木 一彦

1. まず知っていただきたいこと

(ア) 外国人生徒はなぜ日本に来たのか。

本人の希望で来た子どもはいない。

親の事情・家の事情で来ている。教師側が「支えてあげよう」という気持ちが必要。

(イ) 外国人生徒は日本語を自然に習得できるのか。

学齢段階でやってきた子どもは、かたことでは話せるようになるかもしれないが、正しい日本語・授業が分かるレベルは身につかない。

保護者がこれ↑を理解していないことが多い。

(ウ) 外国語学習は（年齢的に）早ければ早いほどいいのか。

母語がしっかり固まっていないと外国語は伸びない。自分の母語のレベルの日本語までは理解できるが、それ以上のレベルになるのは非常に難しい。かつ日本にきた外国人の子どもは母語のレベルを上げることはとてもとても難しい（おそらく、母語が話せる教師の指導が毎週毎週必要になるだろう）。



(エ) 日本語が話せたら日本の授業についていけるのか。

ついていけない。とくに中学校の教室で教師が話している日本語はとてもレベルが高く、学習言語（学校でしか使わない言語）が山のようにある。子どもたちには本当に分かりにくい。

(オ) 日本語ができる人なら日本語を教えられるのか。

だれでも出来るわけではない。日本語教師のノウハウがあり、それを学んだ人でないと教えにくい。外国人に対する日本語の教え方と、日本人に対する国語の教え方とは違う。

2. 神戸生田中学校での実践

(ア) 神戸生田中 JSL 教室（日本語指導教室）

背景：南京町がある関係で、中国人生徒がおおい（8割～9割）

最近では JSL 指導教室があるから生田中学に入学してくる子どももいる

- ・放課後に月曜日から金曜日まで毎日本語教師による指導
- ・日本語指導暦 10 年以上で子どもへの指導経験ありの方ばかり
- ・初めて日本にくる外国人が今年は特に多い
- ・「みんなの日本語（初級）」をテキストとして使用、テキストに載っていない学校用語は別に補う
- ・「書く」重視、宿題毎日→ノート整理、テスト対応等、教科指導につなげる
書くことがしっかり出来ないとテストで点数が取れない→進路が開きにくい
- ・初級後も（希望者には）つづけて教科指導
- ・教科書が読めて、理解できることを目標に→なるべく今学校の授業で学習していると
ころを指導
- ・生徒によって進度が全く違う。
- ・部活動への参加も進める。（日本人学習との交流の中で学ぶこと）

(イ) 社会科の取り出し授業

- ・社会科教師による外国人生徒の個別指導（教室での授業をよりわかやすく）
週に 1～2 時間（社会科は通 3 時間）で音読指導が中心
- ・日本語力に応じた指導
翻訳・リライト教材活用～教科書活用
- ・JSL カリキュラム中学校版版を実践する場としている。
日本語指導を進めながら、教科指導も進めることを目指したもの。しかし、実は使いにくい。かなり読みこなして使わないと使いづらい。

(ウ) 子ども多文化共生サポーター

- ・授業での同室翻訳指導が中心
- ・母語によるカウンセリングがとても大事。子どもは思い悩むことがあっても日本人教師には相談しにくい。特に受験を控えている子どもたちはストレスをためている。子どもたちにとっては心の支えになる存在。

(エ) 外国人生徒にもわかる授業

- ・一斉授業の中で外国人生徒にもわかる場面を少しでも設ける。
板書の漢字にふりがな、ゆっくり短い文で話す、教科書音読、教科書中心の展開
いま進行中の箇所を適宜提示しながら教える etc..

(オ) 日本語教師と中学校教員の合同研修と連携

- ・日本語教師は JSL 教室での教科指導に活用
- ・中学校教員は授業で外国人指導に活用

3. 現実と課題

(ア) 外国人生徒編入に中学校は対応できているのか

- ・ある日突然、受け入れ経験が無い学校に編入して来る。
- ・意思疎通をどうする。、日本語指導をどうする。誰がする。いつする。
JSL 教室がある神戸生田中学でさえ、対応が大変である。ましてやほかの中学校をや。
行政レベルでの変革を期待する。
- ・他の生徒への指導をどうする。(多文化教育の機会と教師が捉えられるか)
外国人生徒の持っている文化を、全体の中に還元できないだろうか？
(たとえば、中国人学生に漢文の授業で音読してもらう)

(イ) 非漢字圏から来る生徒の教科指導は困難

- ・学習言語のほとんどが漢字であるため漢字でつまづく

(ウ) 高校入試の大きな壁

- ・全日制公立高校への入学はかなり難しい
中国人の生徒であれば、中 2 時での編入であっても、本人の努力しだいで公立高校の入試を突破することは可能。しかし非漢字圏出身の子どもの場合、中学から編入してきた子どもが全日制公立高校への入学はほぼ無理。おそらく小学校時編入でも難しい。高校も選ばなければ入学できるが、私立の学費を払っていくのが難しい→定時制高校へ進学するものが多い。

JSL 教室で指導した外国人生徒の進路状況（過去 4 年間）

編入時期	私立	公立	昼間定時制	定時制	帰国して進学
小学校	2	2	0	2	0
中 1	0	1	0	0	0
中 2	3	1	1	1	1
中 3	2	0	1	2	2

題目：（３）「地域支援ボランティアからの報告」

講師：兵庫日本語ボランティアネットワーク運営委員

「えんの会」 永安 龍三郎

1. 「えんの会」について

生活支援のボランティア団体。

99 年に浜の宮中学校にはじめて外国籍の子
編入したことをきっかけに、学校側から依頼が
援を始めた。



どもが
あり、支

2. 外国人児童生徒の立場

- ・突然来て、突然いなくなる子ども
親が出産したため、家で生まれた赤ちゃん
の面倒を看ないといけなくなった。
両親の仕事が変わり、急に引越しをした。子どもは親に付いていかざるを得ない。
- ・子どもたちの学校生活は？
学校に、自分のことばが通じる（自由に話せる）人が全くいない子どもが多い。
「いじめ」が存在する。ことばの暴力（ブラジルのこどもに「ブタジル」など）
ある程度のコミュニケーションが出来るようになると、周囲の人はそれ以上のレベル
を相手に期待してしまう。
部活動をしている子どもは日本語を覚えるのが早い
授業には出席するが、宿題はお手上げ。子どもは本当は宿題を提出したいという気持
はあるが、先生は仕方がないものと、最初からあきらめている。
- ・支援体制は？
年少者を支援するボランティアの数がとても少なく、手が足りないという現状。
学校の中に入って支援する回数は多くて週 2 回、普通は 1 回もないくらい。
- ・親の考えと子どもの進学への思い
子どもはほとんど、高校への進学を希望する（進学できるものだと考えている）。
親からしてみると、学費の捻出が頭の痛い問題。
- ・どうして日本に子どもをつれてくるのか？

ブラジルの家族観は「家族はみんな一緒」という考え方。

学校側はそれを理解できず、「親の仕事の都合でこどもを振り回すのはどうか？自分自身まいた種は、自分自身で刈り取ってほしい」と考える人もいる。

【加古川市内の中学校に在籍する外国人生徒への支援活動と進路状況】

① H 中学校 編入生徒

1999年9月～2004年3月まで支援活動

99.4	日系ブラジル人 女生徒2名	1年に編入	2名とも就職（母と同じ会社）
99.9	日系ブラジル女生徒	1年に編入	昼間の高校受験不合格 M高校（定時制） 現在 アルバイト
00.4	日系ブラジル男生徒	2年に編入	H工業高校→専門学校 現在 K会社正社員
01.4	日系ブラジル女生徒	1年に編入	M高校（定時制） 08.3 卒業予定
02.4	フィリピン人女生徒	1年に編入	03 家庭事情で退学
02.4	日系ブラジル人 男、女（兄、妹）	3年に編入	02.6 家庭事情で県外に引越し

② I 中学校 編入生徒

2000年1月～2002年3月まで支援活動

99.12	中国人男生徒	1年に編入	02.4 H工業高校進学
-------	--------	-------	--------------

③ R 中学校 編入生徒

1999年～2002年3月まで支援活動（えんの会メンバー）

99	中国帰国者のこども 男、女（兄、妹）	1年に編入	02.4 N高校進学（実業高校） （2名とも）
99.	中国帰国者のこども 男生徒	1年に編入	02.4 私立高校進学
99.	ベトナム難民のこども 女生徒	1年に編入	02.4 通信制高校進学
05.9	日系ブラジル人男生徒	1年に編入	06.4 退学 母と同じ工場で働く

④ Y 中学校 編入生徒

06.6	フィリピン人女生徒	1 年に編入	在籍中
------	-----------	--------	-----

⑤ その他 現在支援進行中

K 中学校	フィリピン人女子 3 年	
HM 高校	ペルー人女子 1 年	家庭学習支援中
S 小学校	ペルー人女子 6 年	家庭学習支援中

*****第 11 日感想*****

村山先生の実践例を見て、ボランティアとして取り組むとしても何回か教室に入り学ばせてもらう必要があると思いました。そういう機会はあるのでしょうか？

教える具体的な場面の断片、本当にここに異なる子どものおかれた状況と現実の具体例が知ることが出来よかったです。ありがとうございました。

小学校での日本語指導の状況をビデオでみることができ、実際の指導の様子を知ることが出来ました。子どもの反応はストレートなので、効果も実感することが出来た。ただ、さまざまな教授法が紹介されていて、これは経験だけでは発想できないようなものも多く、具体的な指導法を学ぶことも大切だと思った。

子どもに対する支援はとても根気が必要なのだとわかりました。日本語を教えるスキルも大切なことがなんとなく分かりました。

初めて日本語支援教室を見学させてもらった。灘区のわくわく教室。子どもが多かったので、急にエジプトの 5 年生の女子を見ることになった。3 年の難しい漢字をした。コミュニケーションはとれて、楽しく出来た。手が足りない状態より、かわりが出来て、ましというべきか、いやしっかりと指導が出来る力をつけてからすべきなのか迷うが、現場で楽しく過ごせることがまずいいのではと思った。まず開かれている教室のサポーターとして、支援者としてのかかわりの中で腕を磨き、地元で教室を開き、ひとり立ちして役立てたらと考えている。やはりノウハウを学ぶ必要があるので、「ます形」「て形」など学んでいきたい。

4～5 年前に県下で「多文化サポーター」の派遣をしてくれていると聞いた。しかしサポーターが必ずしも来てくれないことが多い、しかし、日々の指導とまではいってないようだ。日本でも徐々に進んできているらしい。今日の村山先生の具体的な日本語指導を示してもらったのが、すごいなとびっ

くりした。とてもいろいろな工夫があるのは自分で編み出したものが多い？のでしょうね。どこかに指導法など載せているのかな？いろいろ自分でこれから指導するためには学習しなければならないことが多いな、と思った。

小学校、中学校にいる外国人児童・生徒の現状や課題が具体的によく分かった。とくに国語教育とは違う日本語教育の具体的な方法についての話や映像は分かりやすく興味深かったです。ありがとうございました。

ますます実践での問題点など具体的なことが多く、支援の仕方が個々に違うことなどいろいろな視野からのサポートが必要だということを前回、前々回の講座を聞いてよく分かりました。

具体的な指導の内容や方法を少し教わりましたが、指導する方のご苦労は並大抵ではないと感じました。中学校で使われている学習用語に対しての抵抗感というか苦手意識の大きさも教えていただき、子どもたちの苦労も大変なのだと思います。日本語指導も相当専門性を要する仕事だと思います。

ビデオで実際の場面が見られてよかった。文字やことばを楽しんで覚えている様子を見られて工夫次第で楽しく出来ると思った。あの教具、教材などの購入はどんなシステムでできるのかなと思った。

生活言語と学習言語のちがいが分かりました。子どもの場合、生活言語は早く覚えられるとは思いますが、学習言語がなかなか難しいのだろうなあと感じました。ただ進学の問題を考えると、学習言語の支援がとても必要だと思います。

村山先生の「外国」から来た子ども支援の状況の講座はとてもすばらしいと思いました。また教えていただける機会を楽しみにしています。

日本語を教えるのは難しいですね。話しているから教えられるものではないのですね。学力もつきにくく、進路の保障もないのでは在日外国人の将来は明るくないですねえ。それにわれわれは効果的なサポートをできるのでhそうか？

村山さんの話、実践的で分かりやすかった。わくわく教室はとても実践的だった。

いろいろかかわる、取り出して指導できるよう校長先生と交渉してみます。

村山先生のお話とビデオとても興味深かったです。「教え方」をもっと勉強しなくてはと思いました。ただ、ビデオの子どもたちの様子をみて、ことばが分からない中で頑張っている大変さを少しでも後押しできたらとおもいました。私もわくわく会を一度見学したいです。

「日本語学校」の教科書を一度見てみたいです。現場の教室を参観したいものです。

あと 2 回でこの講座も終わるのですか。このままで実際に外国人の支援ができるとはとても思えません。このような講座で次の段階（実践方法などの）の企画はないのでしょうか？実際に体験を重

ねて、苦勞しながらやってゆくことも大切だとは思いますが、もう少し実践体験の学習をする機会があればうれしく思います。最後の上野さんのお話をうかがって、そのような支援の仕方もあるのだなあ、と少し安心しました。ただ、近くにそのようなところがあるのかどうか心配です。

第 12 日目（2 月 16 日）

第 12 日目は（財）兵庫県国際交流協会「外国人児童・生徒への日本語支援ボランティア養成講座」第 3 回と合同して実施したので場所は「ひょうご国際プラザ」で行った。

題目：「外国」から来た子ども支援の状況と課題－3

～他地域での先見実践について～

外国の子どもたちが抱える「生きづらさ」をめぐって

（1）下福田中学での「選択国際」のとりくみ

講師： 大和市立大和中学校教諭 柿本 隆夫

1. ニューカマーの子どもたちの生きづらさ

① 学校で外国籍の子どもたらが会えること・・・同化と排除

生活の様々な場面

（例）制服 校則 あいさつ

学習の場面

わからない言葉で進み続ける授業 / 行事

日本人のための「国際理解」の質：見せ物



資料 1：「日本に来てからのこと」

僕は 2001 年の 1 月 12 日に日本に来ました。僕は最初に宮城県の仙台に住んでいました。そして仙台の小学校へ入りました。僕は最初に 5 年生に入りました。僕は 5 年生の教室に入りました。教室に入って、僕は日本語が分からないから他の人が何を話しているかがわかりません。僕も話しかけませんでした。話しかけてきた人は 1 人くらいはいました。でも何を言っているか分からなかった。僕はそのとき家に帰りたかった。でもその日はなんとなくがんばってすごしました。でも、次の日からやな事がありました。たとえば、掃除の時間、僕が雑巾で床を拭いているとき、いきなり後ろから僕を押して、そして僕がこけて、僕が怒ってほうきを持ってその人にほうきを投げようとしてみんなに止められたんです。そして僕は先生に言いに行きました。あの時僕は日本語もあんまり分からないがうまく話せなかった。そして先生が連絡帳にそのことを書いて僕に渡して、日本語が分かる親戚のお姉さんが通訳して連絡帳に「なぜけんかになったか」書いて先生に渡しました。

小学校のとき悪口を言われたことが多かった。2 ヶ月くらいのときから悪口を言われた。最初何を言っているか分からなかった。同じ人が他の人に話をして、自分のほうを見て笑っていた。同じ事を言っていた。1 回だけなら気にしないけど、何回もあった。

理科の実験で、日本語分からなくて、誰も教えてくれないから、自分でやったら間違えて、友達に怒られたこともあった。小学校のときは、ケンよりも話せなかった。

小学校の卒業前に渋谷小学校に転校した。

中学校に入って、最初、誰も知らなくて誰にも話しかけなかった。日本語に自信なかった。だんだんみんなの名前は分かるようになったけど誰とも遊ばなかった。日本語分からないから、何

を話しかけていいか分からないし、話しかけたくてもなんていっていいか分からない。みんな「この子つまらない子」と思っているんじゃないかなと思った。

2年生になって、また知らない人が増えた。2学期になって、「自分がつまらない」「何でこんな生活してるんだ」とおもって、中国に帰りたくなった。2年になって、つまらなくて、めんどくさかった。起きるのが遅くて、朝ごはん食べる時間がなくて、体育つまらなくて、学校へ行ってもつまらないから、休むことが多くなった。体育は、たとえば、ソフトやっていると、やり方がわからないけど誰も気づいてくれないし、聞こうとしたけどやめた。そのままたっていた。間違えると、ちゃんとやれ」といわれた。

日本語分からないからすぐく傷つく。たとえば「死ねよ」って、遊びのときに言われても傷つく。日本語分からないから、考えたらそういうこと言わないと思うから。その人にとっては普通かな。でもかなり傷つく。だから遊んでもつまらなくなる。

3年になって、女子から悪口を言われた。言葉は聞こえなかったけど、こっち見て笑って、変な顔していた。体育のとき、やり方間違ったら、笑って何かしゃべっていた。

今は、クラスの中で、毎日そのまま過ごしている。誰にも話しかけない。話しても「友達じゃないけど話してるな」という感じで話している。話すと、「ふーん」という感じで終わってしまう。他の人と話している人に話しかけると、気づかない振りされて、何回か言ってたまに気づくと「なーに」といわれて、話したくなくなる。「今日も早く終わっちゃった」と毎日思う。つまらないと一日が早い。

今、学校も家でもつまらない。家の人に気持ち分かってもらいたい。でも、ゲームしているとおこまれる。家の人には僕の気持ちも知らない。「いやだ」「恥ずかしいから」家の人には言わない。

選択国際の時間に見たビデオに「話してくれればわかりあえる」ということをいっていた日本人がいた。僕は話せばわかってくれる人はいると思うけど、僕のあった経験の中では、話を聞いてくれる人はなかなか見つかりません。僕が今まで学校で知ってた人だけで、もし100人いたら、3、4人しかいないと思っています。僕が、この人達にわかてもらいたいことは、例えば、僕が小学校のときにやな事があったことです。僕は最初、そのことを誰にも言わなかった。でも、ある日、日本人の一人の子にそのことを話しました。でも、何もならなかった。そして、それからそのことを誰にも言わなかったです。何で言わなかったかという、日本人の子に言ってもわかってくれないと思ってたからです。だから誰にも言わなかった。で、僕は日本人の子に話しても分かり合えないと思ってます。

この資料は中国から来たこどもの置かれた状況を国際学級の先生が聞き取り調査したもの。

- ・ 外国の子どもたちが日本に来ると、子どもたちも頑張ってなじもうとするし、周りもそれを要求する。→理科の実験、ソフトボール
- ・ マジョリティはマイノリティがマジョリティ側に寄ってくるのを期待している。
→日本の生活に「同化」することを強要される。
- ・ こどもは学校で起こったいやなことを、親に話さない。
なぜ? →「言ってもしょうがない」「心配させたくない」
故に→学校でも、家庭でも孤立してしまう
力関係という目に見えない力学（マイノリティとマジョリティ）

→同化と排除の狭間でもみくちゃにされる

- ・外国人の子どもの進学率は低い

→「外国人の子どもは頭が悪い」「親が悪いから仕方ない」と外国人のこどもたちを切り捨てる教師も少なからずいる。

② 言葉にまつわる話・・・言葉をめぐる困難さとどこへ向かえばいいのか

- ・学校は「同化」と「排除」のサイクルを持っている。

その中で、ことばを教えること＝「同化」？「排除」されないでそこに生活していくためのツール？ それとも他の意味を持っている？

- ・「ハイ」が生み出す誤解、すれ違い

相槌としての「ハイ」が「理解しています」という意味の「ハイ」に受け取られる。

→誤解の積み重ね、すれ違い

- ・家庭での母語の違い（幼少期、来日。日本生まれ）

→外側と内側がつかない あきらめることの多さ

- ・母国での記憶は、ただ日本に「同化」していく中で失われていく

→ 失われる母国の記憶（子ども期、途中来日）

セミ・リンガル状態（母国語のレベルも子どものまま、日本語のレベルも上がらない）

③ 強いベトナム人

- ・暴力や犯罪を否定し、なおかつ同化を拒むときどのような言葉があるのか

→「くそったれ日本人」「日本人には解りっこない」私たちに向かう言葉

そしてその先にどのような言葉を紡ぎ出せるのか

- ・暴力・犯罪に走る子どもたち

→「強いベトナム人」という合言葉

マイノリティの枠に押し込められて、抑圧された外国人の子どもたち

- ・「なんで外国の子どもたちだけ犯罪の道に走らなければならないのだろうか？鑑別所に入っている子どもたちが出所したあとに、何かできることはないのだろうか？」

→「すたんどばいみー」の設立

- ・「くそったれ日本人」ということば

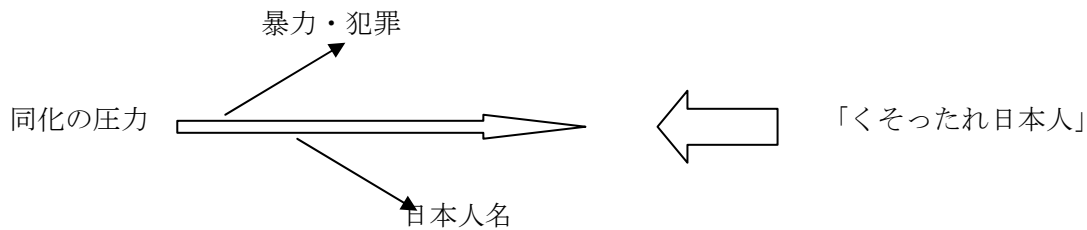
→暴力・犯罪ではなく「力を持ったことば」で。

（「同化」の圧力を避け）日本の中で生きる外国人としての質。

④ 名前にまつわる話

学校の中での位置 周辺化した子どもたちに何が起こるのか

外来の人になにもきません。学校きたから
 みんなでわるいのなしいわれました。この
 人ともたちいない自分できふしかたです。こ
 の人を中国からきました。いろいろがわがな
 いしたれかおしえて欲しい。でもみなでわらし
 のきまちなんがわがないぞすわたしはわかる
 一年前にわたしは日本にきたの学校にきたと
 きにみんな怖い学校いきたぐない。ころをと
 きときする教室の中にみなでなかいわれました
 わしはいろいろかわかりません。たれかたず
 けて自分で怖いからわたしは学校でいじめ
 ることありますあのとき怖いからあの人のも
 ちわたしはわかりますあのとききふしいかた
 ともたちいないなにもきませんな人がみな
 といわれましたあの人とかわいそをいろいろか
 りられましたともたちいないとかなんにもと
 きないなああのときわたしはチームカッパです
 あの人にわたしのきもちおんなじおもいまし
 た。なにかみんなとあの人にいじめらなれと
 ともたちなるほしいです。外来の人をいじめ
 らないでいま日本と中国とまたちな方とほう
 中国じの人日本きたのなかとまたちなたほし
 いでしょうかんじかめるし中国語をきるし日
 本語をきるし漢字かめないときおしえても
 りたいみんなとたのしいのとまたちときる
 よにいてしょうこれはわたしのかんそうです。



2. 「選択国際」での試み

名前 「選択教科 国際」

ステップ 1

きっかけ その頃の子どもたちの様子：「知識に飢えている」外国人の子どもたち
 外国人の子どもたちのための授業 教育課程に位置づける意味（取り出しとの違い）
 学校中から「主力」の先生を投入。
 学校外の人とつながる意味 研究者・ボランティア・外国人青年
 忘れたい（？）自分の部分と向き合う難しさ 「ベトナムはくさい」
 ⇒ 国別学習（地理・歴史）

資料 3

選択教科「国際」基本方針

大和市立下福田中学校

1、子どもたちの実情

- ① 日本で生まれた外国籍の子どもたちが、「外国人」であることを意識するのは、小学校3年生頃からのようだ。「今まで仲がよく、何も意識したことがなかったのに、急に友達たちが『あいつは外国人だ』という日で見ている気がしてきた。」と語る者もいた。そしてそのとき以後、彼らは『多数の中の少数』として、じぶんが外国人であることをマイナス要素として感じ続け、生きづらさの中におかれることになる。生活の中でうまくいかないことの原因の多くを『外国人であること』に見いだし、**外国人としての自尊感情は、否定的に個人の中で拡大されている。**
- ② 一方、学校教育の中を考えてみると、教育課程は日本人のためのカリキュラムがそのまま当てはめられ、取り出しの授業も、『多数の日本人の学習についていくため』に行われていると言ってよい。つまり、外国人籍の子どもたちのための授業は本質的には存在していないといえる。言葉を換えれば、学校は**日本への同化を常に要求されている場所**と考えることもできる。
- ③ また、こうした「多数と少数の力関係」の上に学校現場で行われる『国際理解教育』は、**少数が多数に奉仕する形**しか生み出してこなかった。それはまた、日常の裏にある力関係の再確認、再生産につながる場合も多くあり、外国籍の子どもたちは、ますます「母国的なるもの」とつながりがたく、疎外されてきた。
- ③ 視点を変えて家庭の中を考えてみても、子どもたちは構造的に疎外されていることが多い。
 - ・親たちの日本の学校システムへの無理解は、子どもたちの学校生活を支援するよりも、学校への子どもたちの振る舞い方を難しくしている。

- ・母語を理解できても扱えない子供が増える中で、家庭では母語を遣う親たちとの間に意志疎通がうまくいかない事態が生まれている。そうした中で、母国文化が子どもたちに伝達されない状況が進んでいる。
- ・家族の移動過程を話したがない家庭も多くあり、移動の記憶が継承されていない。

2. 求めるもの

上記の現状をふまえ、選択教科「国際」を次のように位置づける。

- ① 教育課程の中に、「**外国籍の生徒たちのための学習**」を明確に位置づける。
- ② 家族の移動過程を学習することにより、**自分が日本にいる理由**を理解する。
- ③ 国ごとの学習を通じ、母国的なるものを少しでも理解し、**アイデンティティの形成**に役立てる。
- ④ **自尊感情の回復**をはかり、他の場面でも「自分の足で立つ」事を目指す。
- ⑤ 孤立化することのないよう、同学年・異学年の中で仲間意識をもてるようにする。
集団形成の素地を創る。
- ⑥ 様々な立場、様々な年齢、様々な人が関わる中で、一人一人への**サポート体制**を創る。
- ⑦ 地域外国籍の青少年が年齢を超えてつながることで、**地域の中での相互支援体制**を目指す。
- ⑧ 日本人の子どもたちと外国籍の子どもたちが、**多数と少数の力関係を越えた相互認知**ができる素地を学校の中に創る。
- ⑨ 「日本の中で外国人として生きる」**生き方を考える契機**とする。

『なぜ自分はここにいるのか、自分は誰なのか。』

そして『自分はどう生きたらよいのか。』

ステップ 2

お互いの存在を知り、認める・・・つながる

⇒ 国別・地域別・グループ別学習（移動の歴史・戦争）

同じ国同士でのアイデンティティ⇒外国の子どもたちがお互いの存在を知り認める

→横のつながり

「まとめ」の発表

→話を聞いた日本人がその後に**代弁者**となれるように。

自分の話を少しでも聞いてくれそうな日本人を探して発表につれてくるという試み。

ステップ 3

日本人に「聞く力」をつけ、代弁者とする

聞かなければならない聴衆はだれなのか？

→日本人の子どもたち、その保護者たち、etc。

そのときの**壁**「わたしは差別していないけど・・・」

「そんなに辛かったら言ってくればよいのに・・・」という日本人の感想

同情ではなく、背景にマジョリティを背負う強さが要求される

資料 4

平成 15 年度「選択国際」を展望して

大和市立下福田中学校

1. 本校における外国籍生徒を取り巻く状況と、選択国際が果たした役割

数年前は「生徒指導の対象」という視点で取り上げられることの多かった外国籍生徒の問題は、現在では「周辺化されたマイノリティな存在」としての教育課題へと、学校内での位置づけも徐々に変化してきた。そのことは、意識的にしろ、無意識的にしろ、日本への「同化」という質を越えることのできなかつた外国籍生徒への『学校教育活動』が、新しい方向性で展開し始めていることでもある。

そうした学校内の動きは行事や日常の生活場面から始まり、今では学習場面や進路指導場面へと広がりを見せている。もちろん、それぞれの場面を細かく検証すれば、多くの間違いや誤解などが現実には起こっているのだが、学校総体の流れとしては、そうした間違いや誤解を正し、よりよい方向を生み出そうとする模索が行われていると言ってよい。

こうした学校総体の流れは外国籍生徒だけに向かうのではなく、疎外的構造に置かれたその他の生徒たちへの働きかけをも生み出してきた。各学年で取り組まれてきた『補充学習』jなどは、その例である。

しかし、こうした新たな流れもまだ十分であるとは言えず、取り組むほどに、外国籍生徒が抱える問題の深さや複雑さを認識させられている。特に、近年増加してきた南米の子どもたちに対しての『問題理解』は、学校の課題として昨年度立ち上がったばかりである。こうした現状をふまえると、教育社会学的視点による分析を基盤とした教育活動の質が、今後ますます問われてくるだろうことは間違いない。

以上に述べた学校の『動き』を俯瞰するとき、「選択国際」が果たしてきた役割は大きいと言える。

「外国人」であることに否定的なアイデンティティを感じ、みずから同化の姿勢を示したり、周辺的存在に自己を規定したりしてきた外国籍生徒が、親の移動過程やその背景を学ぶことは、少しでも『外国人としての自己を確立』する営みであった。逆に言えば、『外国人としていることを求められる』時間や場所として「選択国際」はあった、と言えるかもしれない。

こうした目的を持った教育活動の場の設定は、学校教育現場では今までおこなわれてこなかった。そのため、そこで見えてきた子どもたち一人一人の有りようは、はっきりとした輪郭を持って語られ、整理され始めたのである。そこには、今まで教員が感じることのできなかつた子どもたちの姿があり、学年や全校の職員へとフィードバックされていく必要性があった。そうした一人一人に関する情報や問題提起が積み重ねられることで、学校総体の流れが変化し始めたと言っても過言ではない。

2. 現在の問題点と課題

学校全体を見渡すとき、問題点の 1 番目こあげられるのは、教員の意識の格差である。外国籍生徒を教えていない教員はいないものの、様々に発信された情報や問題提起を主体的に「関わる者」として受け取る教員と、受け身的にしか受けとれない者とがはっきりとわかれ始めている。1 で述べた学校の「動き」が進みつつあるだけに、このことは早急に取り組まなければならない課題と認識すべきであり、このあとに述べる三つ目の問題点にも関係して考えていかなければならないことでもある。また、取り組みにあたっては、個々の教員の姿勢や資質の問題にするのではなく、解決への有効な組織的方途を探るべきである。

「選択国際」の中をみれば、平成 14 年度、3 年生の中国籍生徒による、2 年生のペルー籍の子どもに対する暴力事件をきっかけに、今までは語られることのなかった様々なつらい体験や傷ついた姿が語られるようになった。こうした『自分語り』を 3 学期の発表へとまとめていった者も多くいた。自分を語りながら流す彼らの涙は、学校教育の中では初めて見せるものであり、数々の「思い」を押し込めて生きてきたつらさの現れでもあった。

彼らのこうした言葉の『重さ』を、いったいだれが受け止めていくことができるのか。

このことが 2 番目の問題点である。彼らの『自分語り』をどう受け止めるのか。その場に直面した選択国際ボランティアスタッフだけでなく、『言葉』は、学校のすべてに、そしてすべての日本人へと向かって発せられているのだ。

外国籍の生徒たちが生きる「場の母体」としての日本人生徒たち、そして日本人の大人たち、マジョリティな存在として、彼らに同化を要求し、周辺化させていく日本人の我々は、今彼らの言葉を受け止めるべきどのような力を自己の内側に見いだすことができるのだろうか。それはもちろん、追体験のように彼らの言葉を感じるのではなく、今後どのようにお互いの『生き方』を保障しあえるのかという命題に答えていくことである。

「場の母体」である日本人を、こうした『問い』の中で育てていく必要性が痛切に感じられる。

14 年度「選択国際」に参加していた日本人の生徒の変化を考えると、それはけっして不可能ではないと思われる。1 年間の学習が終わる頃、明らかに彼女の外国籍生徒への「まなざし」は変わっていた。外国籍生徒のことを学ぶことで成長する日本人生徒。こうした姿をどこまで学校の中に広げていくことができるかが、本当の意味で、『選択国際』を学校に位置づける」ことになるに違いない。

しかし、ここで見逃してはならないのは、その日本人の女の子は、日常の中でも生活や学習を外国籍生徒とともにしていることである。このことは、無自覚的な「ふれあい」では求めるものは学べないという現実と、こうした課題の深さを意味しているのではないだろうか。

同時代、両地域に生きる子どもたちの関係の基盤は学校を通して作られる。できれば、共生の新しい視点が学校教育の中から生まれんことを望みたい。

2 番目の問題に関して、もう一つ確認しておかなければならない課題がある。それは地域の外国籍青年の存在である。『自分語り』を正面から受け止めたのは、「選択国際」のボランティアスタッフの外国人青年たちであったと思われる。3 学期まとめのサンプル発表では、中学生の『自分語り』と同様の経験を持ちながらも、それらを乗り越えてきた姿がはっきりと見て取れた。

学校だけでなく、地域においても様々な壁にぶつかっている外国籍の子どもたちにとって、地域における外国籍青年たちの存在は直接的な理解者であり、目指すべきモデルでもある。こうした位置づけを考えると、彼らを学校教育の場に参入させることで生まれる可能性は非常に高いと考えられる。

3. 平成 15 年度『選択国際』方針

以上に述べてきたような現状、課題をふまえると、15 年度は「選択国際」のあり方を大きく変更する必要がある。以下を方針としたい。

(1) 授業の中心を教員が担っていく

選択国際立ち上げから、多くの研究者やボランティアの方たちの力を借りながらすすめてきた。そのことからたくさんの成果が生まれてきており、今までにない連携が学校現場に作り出されてきたと言える。しかし、現状の課題に向かうためには、以下に述べる 3 点の理由から、教員がより主体的に『選択国際の場』を作り出すとともに、研究者、ボランティアとは、今までとは違った形の連携を

模索する必要があると考える。

ア．寄りかかきの危険性

専門的な知識は浅いものの、過去3年間のカリキュラム蓄積から、授業の内容にはある程度めどが立つ。そうした中、このまま研究者やボランティアスタッフに中心的役割をお願いし続けることは、連携ではなく、寄りかかりになる危険性を内包することになる。

イ．『自分語り』を受け止める

子どもたちが語る言葉のほとんどが「学校」と関係していることから、それらの言葉を教員が全面に出て引き受けていく姿勢が必要である。

ウ．学校全体との連動

教職員集団の意識を高めるためだけでなく、具体的に見えてくる一人一人の問題を解決していくためには、学校全体とのシステムチックな連動が大切である。そのために、選択国際と学年・学校との組織的結合が重要になる。

(2) 日本人生徒の参加

様々な条件を検討しながらも、日本人生徒を可能な限り参加させる。外国籍生徒だけでなく、日本人にとっての「選択国際」の意味を模索していく。

(3) 相談役としての研究者・ボランティア

今まで中心的役割を担ってきていただいた研究者・ボランティアのかたは後景に退くが、残念ながら現在の学校だけでは完結できない部分もある。そのため、数人の研究者、ボランティアのかたを相談役として位置づけたい。

(4) 地域の外国人青年の参加をよりすすめていく

課題で述べたように、できる限りの外国人青年の参加を要請していきたい。その意味では、方針1も、本来的には過渡的な形態であるかもしれない。

学区の再編の現状から、下福田中学校における「選択国際」もあと1～2年でその役割を終えと考える。しかし、そのときを迎えるまでは、「終わり」を前提にするのではなく、見えてきた課題にしっかりと取り組んでいくことが必要なのではないだろうか。

ステップ4 （状況の変化を受けて）

- ・下福田中での「選択国際」の授業は消滅
→「すたんどばいミー」において継続中。

題目：外国の子どもたちが抱える「生きづらさ」をめぐって
(2) 当事者団体「すたんどばいミー」とわたし

発表者：すたんどばいミー CHUOP SARARN

1. スタンドバイミーの立ち上げ以前

地域の学習支援教室（外国人と日本語教室）ではボランティアの自己満足・子どもたちにとっては遊べる場であった。

高座渋谷日本語教室で反省会を開き、以下のように変わった。

勉強をしている子ども

大人と子どもを交えての反省会：子どもたちの話を聞いてくれる大人たち

イベントの企画には子どもも参加→やってみたいことを提案しやすくなった。

子どもたち主体の新しい教室、新しい試み（母国語教室）

出会った仲間... お互いのストレスをシェアする相手

いろいろアドバイスを提供してくれる大人たち

他のベトナム人の子どもたちの状況を知る

→他の外国の子どもたちに自分ができることはないのだろうか？と考えるようになった。

2. スタンドバイミーの立ち上げ

地域の教室からの独立... 広がっていく子どもたちの「やってみたいこと」と地域の教室の方向性との「ずれ」が多くなってきた。

→柿本先生やそのほかの大人の方々の協力を得て独立。

親や周囲の人々... 最初はあまり良い感情をもたれていなかった。

自分の活動意義を親に説明、説得

→親の理解を得る→自身の自立を獲得

3. 現在の活動

- ・自分たちの活動が評価される立場になった

→自分たちの活動を知った人たちが、その活動をどうやって捉えていくのか？

- ・お互いの愚痴を吐き出す溜まり場ではない場作り

→ひとりの住民として日本で生活していく



4. 活動をととして

- ・日本名へのシフト

なぜ通名を使うのか？～学校に入るため、これからの生活を便利にするための一手段

- ・名前を変えずにいかに日本社会で自立していけるか

何を次の人たちに残していけるのか が「すたんどばいみー」の活動者の今後の課題。

外国籍の苦しい状況は、日本が少しでも変えてくれれば変わるものなのに、簡単にはいかない。外国人が外国人同士で状況を変えることはできない。外国人と日本人が弱い外国人のために働くことで、今に日本社会で起きている外国人問題が明らかとなる。

題目：外国の子どもたちが抱える「生きづらさ」をめぐって

(3)「選択国際と中国人としての自分」をえらんだこと

発表者：すたんどばいみー 西岡 歩

1. 選択国際は自分にとってどういうものだったのか

- ・自分自身がなぜ日本にいるのか気づかせてくれる

「選択国際」で自分の家族のルーツを調べる。満州事変・残留孤児...

→授業でシェアすることで、周りにいる外国人の友達がなぜ日本にいるかも分かるようになる。

- ・差別やいじめ等の外国人の子どもたちの問題が顕在化していく

2. 自分のなかの変化

資料5

「中国人」で生きることを選んだ理由

西岡 歩

私は、私の父方の母が日中戦争による残留孤児で、それ以外は中国人のクォーターである。そして、日本で生まれ、生まれながらにしてすでに日本国籍であった。、当然中国語は話せない。私が中国人であるか日本人であるかを真剣に問われたのは中学二年生の2月、選択国際の1年間のまとめであった。その中で私と同級生のAという中国



人が発表をした。

〈ぼくの親は中国人？ぼくは〇〇人？〉

(1) ぼくの親は中国語で話をしている

(2) ぼくのお母さんはときどき中国語でぼくと話をする。

(3) ぼくは中国語を話せないけど、聞き取れることはすこしできる。

(4) おばあちゃんは、ぼくには日本語で、お母さんには中国語で話をする。

(5) お父さんは、たぶん中国人、お母さんは、たぶん中国人、おばあちゃんは、日本人。

(6) じゃあ、ぼくは~~~~??

ぼくは、たぶん日本人だと思う。

日本で生まれて、ずっと日本で育ったし、日本のものしか食べてないし、日本の友達しかいないから。

でも・・・西岡 歩は僕と同じ、日本でそだったけど自分は中国人と言うだろう。

このちがいは、なになー。

(『選択教科「国際」授業のあしあと』1年間のまとめ 13 より抜粋)

私は A と小学校 2 年生からずっと一緒に国際教室で中国語を学んでいた。国際教室に行くきっかけは担任の先生に私が「僕は中国人だよ」と言ったことであった。このとき私は、小さい頃から中国人の親戚が多く親が中国人だと気づいていたから「中国人」だと言えたのだろう。国際教室では、私は一番中国語ができなかった。というより全くわからなかった。親からはたまに中国語を使っているいろいろなものの単語を教えてくれるが、ただ同じことを言い返しているだけで全く頭の中に留める事はなかった。国際教室では中国語をノートに書く勉強をするようになったが難しくて読めない漢字をただひたすら書き写すだけで嫌気が差したときもあった。たぶん、この頃になぜ私は中国語を勉強しなければならないのか、なぜ私が中国人なのかという問いが浮かび上がったのだということは覚えている。「中国人って言わなきゃよかった。」と思ったこともある。たぶん、A も同じことを考えていただろう。でも私は A があの問いをかけるまでずっと自分の頭の片隅においていた。そして、A が「ぼくは、たぶん日本人だと思う。」と答えたときには今までにないショックを受けた。それと同時に私が「中国人」である理由が一瞬で消えた。私より中国語が話せる、聞ける存在の A が「日本人」だと言ったことで私は「中国人」と言う自信がなくなったのだった。

中学校を卒業して「すたんどばいみー」の母国語教室の中で中国語教室を開いてみたらと勧められたことがあった。講師は同級生の中学校 2 年生の時に中国から来た B である。B は私と同じ残留孤児のクォーターで、私からは根っからの中国人に見えた。私は当然その頃「中国人」とは言い切れなかったが、高校生活が始まると同時になぜか中国語教室は始まってしまった。最初はとりあえずやるかと思えたが、しばらくするとやりたくなくなっていろいろな理由をつけて何回か休むようになり、部活や学校の勉強が忙しくなるから高校三年生になってからやると言って教室を閉めてしまった。

今だから言えることだが、高校では、最初の自己紹介の時にとりあえず「私は中国人だ。」と言おうと決めていたが言えなかった。部活動では同じ中学校だった先輩がほかの先輩に私のことを「中国人」だといったことがあった。でも、その先輩の反応が全くなかったからなぜか怖かった。本当は私のことを嫌がっているのかもしれない、クラスの人に言ったら同じ反応をとられるかもしれないと思ったから、それ以来怖くて高校の人には「中国人」だと言えなかった。だから、清水さんがたま

に聞いてくること、『歩は高校の人には「中国人」だって言ったの?』という質問に対して、「最初の自己紹介のときに言いましたよ。」と答えている自分にわけがわからなくなっていた。

そんな中で私の兄が「すたんどばいみー」の活動から抜けていった。原因は自分が任された会計の仕事をほったらかしにしている、やりきれなくなったからである。でも、兄はここを頼らなくても学力的にはそんなに苦労しないし、なによりも、中国人として生きるという選択もできるし、日本人と同じように生きる選択もできるのである。そう考えるとどちらも布かった。たとえ、中国人として生きる選択をしても、私は中国語が全く話せないしわからない、ましては周りの日本人がどんな目で見ているのか考えただけでぞっとした。では、日本人として生きる選択をしたらどうなるのか。自分の家族が中国人であるということがわからない限り、確実に日本で生きていくうえで他の外国人よりも有利になるだろう。でも、もし、家族が中国人であることがわかったならば、今まで自分が中国人であることを隠してきたことが学校や職場、近所にあつという間に広まって私への視線が変わるだろう。やがて態度は冷たくなり、人間関係はうまくいかなくなって、その中でいじめや仲間はずれにいい周りが波のようにどっと攻めかかってくるだろう。そうならなためには、いつも「中国人」だということをばれないようにすべてのことに対して気を使わなければならない。それを考えただけでも、気が狂いそうになる。かといって、私には「日本人」だと言えなかった。なぜならば、私の親は中国人の血筋のほうが多いし、親が中国人だということも他人からすればわかるからである。だから、「すたんどばいみー」の中で自己紹介をする時はいつも曖昧なことを言っていた。「中国人」と「日本人」のクォーター、日本国籍、じゃあ何人だ?とりあえず、「中国人」だ。といったような感じだった。そうやっているうちにある時、『なんで「すたんどばいみー」で活動をしているの?』という質問に答えられなかった。それは、外国人が運営しているこの活動で外国人と言えない自分がいるからである。自分が自分に引きずり込まれるている感じがした。

高校3年の夏になって高校生教室では私とグスタボ、リュウレイホウ、早川太一、Bの高校生と大学生のティン先輩の6人でいつも大学受験の勉強をしていた。レイホウも同じ残留孤児のクォーターであるが、Bと同じぐらい中国にいて、レイホウを見ても中国人だとしか思えなかった。レイホウはその年の夏から徐々に「すたんどばいみー」の活動に参加していくことになった。その中で、私はレイホウが大学に向けて書くPR書をみせてもらった。その内容の中には中国での過酷さがにじみ出るような内容があり、私には想像もつかないほどの苦労をしてきたのだろうと思わせるほどの内容であった。

そんなことも感じながら大学受験を迎える頃、「でも・・・西岡歩は僕と同じ、日本で育ったけど自分は中国人と言うだろう。このちがいは、なにかない」と書いたAの言葉が頭に浮かんだ。私の周りには、私からすれば中国人と言える人がたくさんいるが、その中でもAのように自分の中に中国人だと言えることもなく日本人に向かう人もいれば、Bやレイホウのように誰が見ても中国人といえるし、中国語も話せるという人もいる。私の兄のように日本人と同じように生きるか、中国人として生きるかを選びながら生きられる人もいる。では、いったい私は何なのか。中国語は話せない。親の血筋で言えば中国人でもあるし、日本人でもある。でも日本人としては生きられない。もし日本人だとしたら、親は何人になるのか?でも、Bやレイホウのような中国人でもない。もし、中国人でありたいならば、どうしたらいいのか。私は必死に考えた結果、私なりの中国人を考えた。

それは、私という日本人に最も近い立場から中国人へ向かう中国人になれないのかと考えた。つまり、たとえ日本人に見えても気持ちのベクトルが中国人へ向かえば私は中国人になれるのではないか

と思った。だから、そのベクトルを強くするために、まずは中国語を 0 からがんばってみようと思っている。そして、大学では私は中国人だといえるように少しでも中国人として生きようと思っている。だからもう日本人には向けないと決心することにした。こういう風に考えることができたのは、いろいろな中国人に出会えたからであって、そこから、自分はその中国人たちから比べてどのくらい遠いのか、またどれくらい自分が日本に近いのかを確認できたからである。私のように日本人に近い中国人が中国人だと言えている人は見たことはないし、この道はまだまだわからないし、日本人として生きるよりももっともっと厳しいかもしれない。でも日本人として生きたときの見えているジレンマにはまるよりは、中国人として生きて新しい道へ歩んで生きたいと思っている。すこしでも私と同じような日本人に近い外国人のモデルになりたい。これは私の決意であって私が中国人として生きることを選んだ理由である。

3. 皆さんに伝えたいこと

・親世代と子ども世代の違い

母国の意識の違い：自分のなかで母国を形成できる親世代

両国の狭間でゆれる子どもたち

・母国語のちがい：子どもたちには、さまざまな形での言語の生活がある。

日常的な日本語は流暢に使いこなせるが、学校のことばはうまく理解できない→
学力差がでる

親と子の言語力の差→意思疎通が図れない

・日本名、日本国籍への帰化

「生きづらさ」から名前を変える。

題目：外国の子どもたちが抱える「生きづらさ」をめぐって

(4)「選択国際と私」

発表者：すたんどばいみー グエン・ゴック・バオトラン

概要

小学生のころから「ばいみー」に関わる。

中3時、塾通いをはじめ、すたんどばいみミに行かなくなる

高校受験終了後、再び活動開始した

高校一年、「ばいみー」副代表に

名前の問題

日本で生きやすくするために改名を考える
「何人として生きていくのか？」との問い
外国人であることを忘れてはいけない

題目：外国の子どもたちが抱える「生きづらさ」をめぐって
(5)「運営委員会のこと」

発表者：すたんどばいみー 宮脇英理

概要

すたんどばいみー運営委員会：12名の運営メンバー、月2回のミーティング。
もろもろの問題点（家庭のこと、学校のこと）やイベントの計画などを話し合う。
最初のころは、運営委員会は意味があるのか？と思っていた。
しかし、運営委員会がなければ、それぞれの教室の状況は分からない。
教室の状況をスタッフ同士で把握することで、教室がまとまる。

話し合いの重要性

それぞれの子には、それぞれの問題があるので、理解しあうことができる。

外国の子どもたちの問題

- ・親と子どものことばの壁
- ・親と子どもの考えの差

問題や悩みがある子のために、何ができるのか？
考えたことを実行に移せるようになっていきたい。

☆日本人がやれること

いま現在のスタンドバイミーの日本人スタッフ... 2名

(これまで多くの日本人がスタッフとして関わってきたが)

→疑問：当事者団体「すたんどばいみー」において日本人は当事者ではないのか？

→答え：日本人は日本人としての当事者意識を持たなければならない。

E d.ベンチャーの立ち上げ

もう少し違った視点で、関わってくれる日本人を。
国や地方公共団体にやってもらえない部分を補うために立ち上げた。
自分たちの持っている知識を広げていく場として、考えたい。

<質疑応答>

Q すたんどばいミーは何箇所かにあるのですか？

A 今現在は大和市と横浜市の地域だけの活動

Q 選択国際という名前を残している理由は？

A 特に考えていなかったが、「選択国際」が「私たちのためのものである」から。

Q 学校の組織的な取り組みは、教育委員会の取り組みは？

A 市から日本語指導員が派遣される。通訳も市にはいる。しかし不十分。
日常的な問題に対応できるリソースがあるかといったらそうではない。

Q どうやって取り組みを理解してもらい活動に移したのか？

A 必要なときは生徒指導などの立場をとって。

Q 荒れる子どものスタンダードは？

A 実はここ数年、荒れる子どもたちは少なくなっている。それは学校側が何かをしたとかいうわけではなく、スタンバイミーの地域のOB・OGの子どもたちの努力。スタンバイミーは当事者の子どものための、その子にあった活動をしている。

Q 何時くらいまで活動しているのか？

A 遅いときは11時くらいになることもある。送り迎えとかもしている。

Q 辛さは分かるが、ボランティアはどういう支援をすればいいのか？最終目標はなにか？

A 支援のあり方に絶対的なものはないし、最終目標もなく、常に変化していくものである。子どもたちが「自分の力」でやれることを増やしていくことが大切で、その積み重ねが社会も変えていく力になる。



*****第12日感想（一部です）*****

日本人からいじめを受けたり「生きづらい」日常の中で“スタンバイミー”の中で支え合いながらがんばっている姿がよく伝わってきました。

外国人であることの栗しみが少しはわかった気がする。

柿本先生を含めて当事者でなければ、語れない話を聞いた。聞いて私は何ができるのかという問いを突きつけられた。

選択国際について書かれた本を読んでいました。まさか、ご本人たちが講演してくれるとは。

私（外国人）の子どもの考えを少し理解することができた。母国語も日本語も勉強しいとだめな外国人の子供の立場についても考えさせらる時間でした。

外国人の子どもたちの「生きづらさ」が頭で考えていたものよりもずっと苦しいものであることが直接的に伝わってきたので、関るときには、本気で取り組む覚悟でかかわらねばと意識させられた。

学習支援以前の問題が多い（不登校、非行など）。選択国際、すたんどばいミーなど積極的な活動があるので非常に参考になったし、ヒントになりました。

Minority は日本の社会ではなく、どこの社会でも見世物である。問題は人格形成されていない子どもたちが自分の選択ではなく親の都合で日本に來らされている状態なので、自分の **identity** ができていないし、でき難いであろう。なので選択国際はすばらしい試みだと思う。

すたんどばいミーの発表者の一人一人の皆さんの過去と現在の状態がよくわかりました。日本人の考え方が考えさせられました。

勉強以前の問題である人との係わり合いができるようになることが大事なことだと思う。

余りにも自分が外国人自動の現実を知らないということがよくわかった。

日本で生活していく外国陣の大変さが何となくわかっていたように思っていたましたが、今の自分の認識をはるかに超えていたことがわかりました。

いろんな現実がわかった。子どもたちが「自分」であることの困難さもよくわかりました。

リアリティを感じる事ができた。それにより、自分が傍観者でなく、いかに当事者たりえるかを考えるきっかけとなったので。

外国人の子どもたちが置かれている現状に対する自分の認識がいかに甘かったか痛感した。すたんどばいみーの立ち上げ、活動の話を伺えてよかったです。

下福田中学校での実際起きたこと、そして子どもたちの生々しい声を聞くことで、外国人児童生徒への支援とは何か、またそのとき子どもたちと向き合う時、何が大切なのかを考えさせられた。とても深く重いものを突きつけられました。

キレイ事でない生の声をきくことができた。本日の講座を聞いて子どもたちへの支援の重要性がよくわかった。

通常、支援する側の話を聞く機会が多いが、今回外国人の生徒や学生が中心になって運営されているグループの現状や活動について生の声を聞くことができてよかった。

私は在日韓国人として生まれました。3世です。私は20歳のときに日本国籍に帰化しました。私も韓国語を話せるわけでもなく、私は何人なんだろうと考えたことは多かったです。日本で住んで生まれているけれど、家の文化は韓国もある。私もかくしたり、変に韓国を嫌いだったりしました。しかし23歳のときに韓国に留学してみました、私は1年間留学して、世界が広がりました。でもけっきょく、国籍にこだわらず、何人ということに偏見を持たずに生きていけば何人でもいいのではないかなと感じました。だから、自分は日本人だ、中国人だと決めなくてもいいと思います。国籍はどちらか決まっていますが、心の中はどちらか決めることはできないと思います。日本でいるから日本人じゃないことで差別を感じるかもしれませんが、日本から出て見れば、そんなものはないのです。もっと自分自身で世界を広げてください。よければ生徒さんに伝えてください。

現在、小学校、中学校の外国人の子どもたちへの日本語指導に少しかかわっています。その中で不安に思っていること、今日の話の中で大変共感ができ、参考になり、本当に何とかしていかなければならないと危機感を感じています。

“遠くの小さな声こそ「今」を変える力” 柿本先生のレジュメより。この言葉がとても気に入りました。今日は2時間かけてここにさんかできてとても感謝しています。E d アドベンチャーの立ち上げは大賛成です。

第13日目(2月23日)

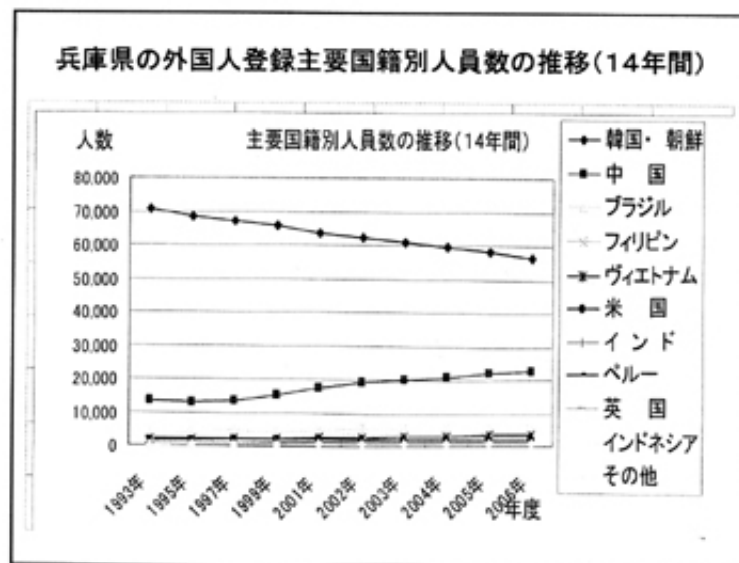
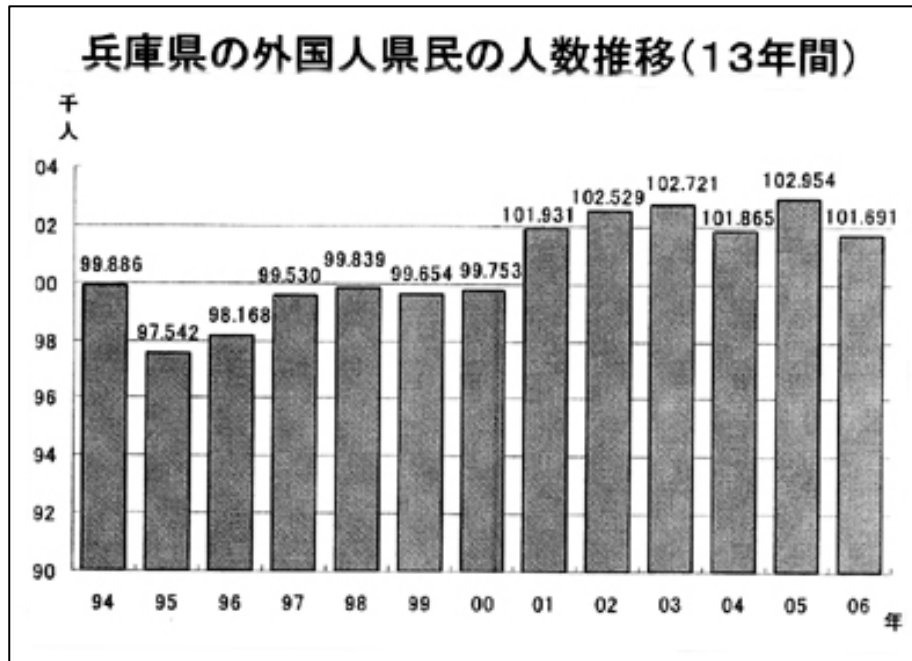
題目:「学校での支援活動について」

～兵庫県の子ども多文化共生教育の取り組みについて～

講師: 子ども多文化共生センター 樋口正和

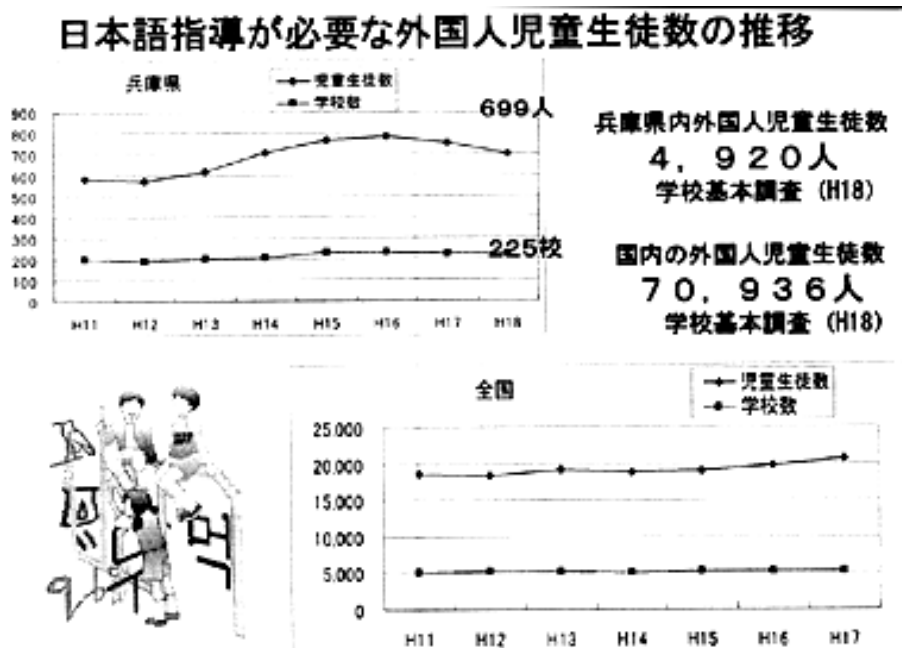
キーワード: 自己実現、共生、組織的・計画的な取組、ネットワーク

兵庫県の外国人県民の人数推移

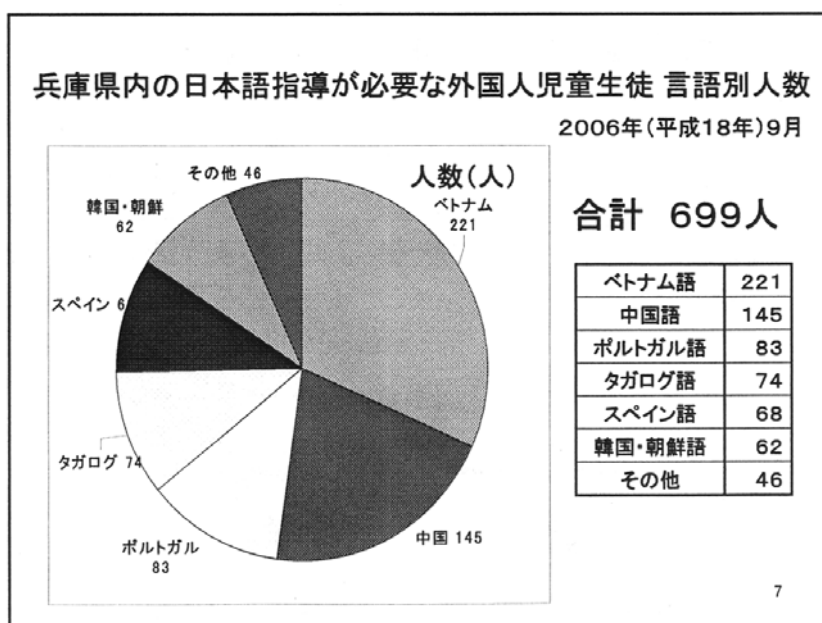


- ・約 10 万人（外国人登録者数）
- ・韓国・朝鮮人が 6 万人（減少中）
 - 日本国籍取得者が増えている。少子・高齢化が進んでいる。
- ・続いて中国、ブラジル
- ・ 兵庫県下では神戸地域に多く居住している

日本語指導が必要な外国人児童生徒数の推移



- ・ 兵庫県内で 4920 人の児童生徒の中で日本語指導が必要な児童生徒の数は 699 人。



- ・言語別で見ると、ベトナム語を話す児童生徒が一番多い→姫路に難民定住促進センターがあったため。
- ・外国人生徒が在籍している学校数 225 校（ほとんどの学校が外国人生徒が一人 or 二人しかいない・・・分散型）→集住地域の学校と違い、どのように指導していいか分からなくなる。
- ・小学校に 7 割、中学校に 2 割程度の割合で在籍

外国人児童・生徒の課題

- ・不就学児童数

文部科学省調査：（平成 18 年度 1 県 11 市）9889 名中不就学 112 名（1.1%）

理由

1. 学校へ行くためのお金がない（15.6%）
2. 日本語が分からない(12.5%)
3. すぐに母国に帰る(10.4%)
4. 母国の学校と生活や習慣が違う(8.9%)
5. 勉強が分からない(8.1%)
6. 仕事やアルバイトをする(8.1%)
7. 学校へ行くといじめられる(7.4%)

兵庫県下全市町調査(41 市町)

不就学 8 人（外国人登録者中）

（神戸 2 伊丹 3 姫路 2 丹波 2）

理由：ホームスクール、宗教上の理由

- ・生活習慣や文化の違い・・・イスラム教徒の児童生徒に対する配慮
- ・学校制度・履修学年の違い・・・例）平行四辺形を何年生で習うのか？

各国の学校教育制度の違い

	義務教育 年限	初等教育	前期 中等教育	後期 中等教育	学年暦
ベトナム	6～11歳	初等学校 5年	下級中等学校 4年	上級中等学校 3年	9月～5月
中国	6～15歳	小学校 5～6年	初級中学 3～4年	高級中学 3年	9月～7月
韓国	6～15歳	初等学校 6年	中学校 3年	高等学校 3年	3月～2月
ブラジル	7～15歳	初等学校 8年	中等学校3～4年		2月～12月
ペルー	6～12歳	初等学校 6年	中等学校5年		4月～12月
フィリピン	6～12歳	初等学校 6年	中等学校4年		6月～3月
ネパール	義務教育制度はない	初等学校 5年	前期中等学校 2年	後期中等学校 3年	3月～12月 12月～11月

- 実年齢から2年間学齢を遅らせると、私立高校を受験できないという問題も。
- ・親子のコミュニケーション不全・・・子どもは日本語が上達、母語は停滞、親は日本語ができない。
また、親子の生活時間が異なり、会話が無い。
- ・高校への入学率が高くない

兵庫県の多文化共生施策としての取り組み

- ・ 95年の阪神淡路大震災を機に変化してきた。
- ・ 98年「人権教育基本方針」作成
- ・ 99年「地域国際化推進基本指針フォローアップ方策」
外国人県民共生会議・外国人県民モニター
外国人児童生徒指導補助員派遣事業（→多文化共生サポーター）
- ・ 00年「外国人児童生徒にかかわる教育指針」
ニューカマー児童生徒に対する教育関係校協議会(2年)
- ・ 01年「兵庫県人権教育及び啓発に関する総合推進指針」

兵庫県の人権教育（98年「人権教育基本方針」）：自己実現の支援、共生、それを阻害する要因（差別や偏見）を取り除く

外国人児童生徒の自己実現を支援する取組（00年「外国人児童生徒にかかわる教育指針」）：多様な文化的背景を持った人々共に暮らし、共に自己実現を目指す人間性豊かな社会の構築に向けて、国籍や民族を超えて人と人、心と心をつなぐ教育

「子どもたちの力が原動力」

すべての児童生徒に豊かに共生する心をはぐくむ取り組み

→新しいもの、自分とは異なるものを受け入れる感性をはぐくむ

外国人自動性の自己実現を支援する取り組みとして

日本語指導・母語/母文化の保持・自立支援・学習支援・進路支援を行う

子ども多文化共生センター：<http://www.hyogo-c.ed.jp~mc-center/>

- ・ 5年まえ（2003.3）に設置
- ・ 機能・・・教育相談、学習教材の提供、ランティア登録・指導者研修等
- ・ 過去のイベント

子ども多文化交流&JICA国際協力フスティバル

→いろいろな文化に興味を持ってもうことで、他文化を理解するきっかけになればということで毎年開催している。

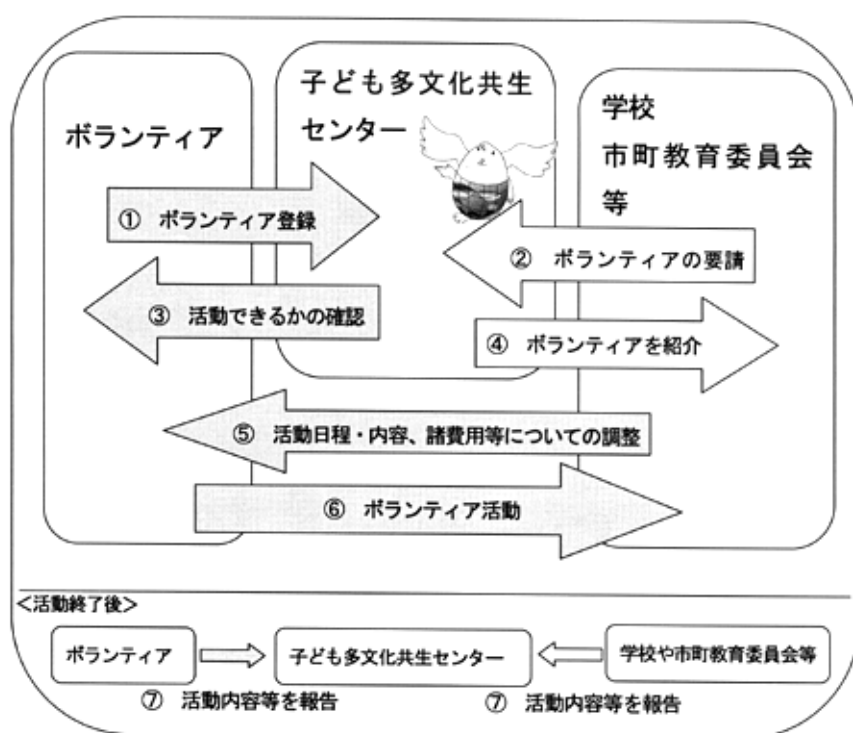


ボ
エ

- ・子ども多文化共生サポーター派遣事業・・・現時点では、来日 3 ヶ月未満で指導が必要であるという書類さえ出してもらえればサポーターが必ず派遣できるという状況。
- ・こども多文化共生ボランティア養成講座の実施、ボランティアバンクの開設

学校における指導のあり方

- ・まずはサバイバルな日本語から（トイレ、保健室等）＜…サポーターの派遣
続いて生活言語（友達・人間関係をつくるため）
学習言語 ＜…日本語指導ボランティア
- ・先生と子どもとサポーター／ボランティアとの信頼関係、お互いのコミュニケーションがとても大切・・・学校側の「好きなようにやって下さい」という態度が一番困る。
- ・守秘義務への配慮が求められる
- ・セクハラ・体罰等にならないように
- ・政治と宗教に関しては十分に気をつけて。



ボランティア登録：子ども多文化共生センター（TEL0797-35-4537）の登録申込書で行う

題目：「地域での支援活動について」
 ～兵庫県内の日本語支援活動について～

講師： 兵庫日本語ボランティアネットワーク 長嶋 昭親

兵庫県の外国籍児童・生徒への支援体制は全国的に見ても一歩上をいっている

- ・サポーター制度
- ・母語教育支援

実際は、予算が削られ、民間の団体に依存しているという状況が現実である。

兵庫日本語ボランティアネットワークについて

20 年ほど前から中国帰国者・ベトナム人難民支援のための団体が立ち上がり、地域の日本語支援が始まった。

- ・入国管理法改定（1990 年）により、日系南米人の居住が増えた地域周辺にボランティア教室が始まった。
- ・1995 年の阪神淡路大震災を機に「被災ベトナム人日本語支援教室」を立ち上げる。
- ・そのほかの場所でもさまざまなボランティア教室が立ち上がる。
- ・その際、ボランティア団体が集まり、ボランティア教室をどのように運営していけばいいのか、どのように指導していけばいいのか等の情報を交換しあっていく中で、1997 年に兵庫日本語ボランティアネットワークが設立された（当初 13 団体现在 28 団体加盟）
- ・日本語支援ボランティア養成講座や研修会等を開催し、そこから派生してさまざまな外国人支援活動を展開している。

☆ これからの皆さんの活動について

まずボランティア教室の見学から始めてください

まず、やってみて、学びながら実践してほしい。

県内の日本語支援教室(☆子ども支援団体・★大人・子ども両方支援を行っている団体)

	地区	市町	日本語教室名
1	阪神北	三田	三田市国際交流協会「日本語サロンさんだ」
2		猪名川町	猪名川町国際交流協会「日本語教室」
3		川西	川西市国際交流協会「日本語講座」
4		宝塚	TIFA(宝塚国際交流協会)「日本語個別事業と日本語教室」
5		伊丹	伊丹ユネスコ協会日本語教室
6		伊丹	伊丹市国際交流協会「日本語教室」
7	阪神南	尼崎	そのだ日本語サロン
8		尼崎	カトリック尼崎教会「日本語教室」
9		尼崎	尼崎自主夜間中学

	地区	市町	日本語教室名
10		尼崎	尼崎市国際交流協会「日本語教室」
11		尼崎	尼崎市中央公民館「日本語よみかき学級」
12		尼崎	尼崎市立大庄公民館「日本語よみかき学級」
13		尼崎	尼崎市立小田公民館「日本語よみかき学級」
14		尼崎	国際交流会 優一you
15		西宮	国際交流サークルオッペ日本語教室
16		西宮	西宮市国際交流協会「外国人のための日本語講座」
17		西宮	西宮市国際交流協会「西宮日本語ボランティアの会」
18		西宮	西宮市国際交流協会「日本語おしゃべりひろば」
19		西宮	☆西宮市国際交流協会「日本語なかよし広場」
20		芦屋	芦屋市国際交流協会「ACA日本語教室」
21		芦屋	芦屋市立公民館「にほんごがっきゅう」
22		芦屋	こくさいひろば芦屋日本語教室
23	神戸	東灘	東灘日本語教室
24		東灘	☆こうべ子どもにこにこ会
25		東灘	御影よみかき教室「大空」
26		東灘	ECHO:神戸帰国子女親の会
27		東灘	神戸市立住之江公民館「日本語教室」
28		灘	神戸学生青年センター六甲奨学基金「日本語サロン」
29		灘	☆「灘わくわく会」
30		中央	港島日本語教室「こんにちは」
31		中央	兵庫県国際交流協会「日本語事業」
32			神戸国際協力交流センター 神戸国際コミュニティセンター
33		中央	アジア教育福祉財団難民事業本部関西支部
34		中央	兵庫県海外同友会日本語教室
35		中央	日本語でこんにちは
36		長田	★KFC 日本語プロジェクト
37		長田	アジア女性自立プロジェクト「AWEP日本語教室」
38		長田	☆ワールドキッズコミュニティ学習サポーターMANGO
39		長田	☆聖ビンセンシオのボランティア「鷹取土曜学校」
40		須磨	南須磨公民館日本語教室
41		西	神戸市外国語大学日本語学習を助ける会
42		西	☆ニューキッズサポートクラブ
43	東播磨	明石	明石小コミュニティセンター「日本語教室」
44		明石	西明石日本語教室
45		明石	明石市国際交流協会 日本語学習会「いろはクラブ」
46		播磨町	ボランティア日本語教室はりま

	地区	市町	日本語教室名
47		稲美町	稲美町国際交流協会「日本語教室」
48		加古川	加古川市国際交流協会「外国人のための日本語教室」
49		高砂	高砂市国際交流協会「日本語教室」
50		高砂	国際交流クラブ高砂
51		高砂	伊保南小学校「日本語学習会」
52	北播磨	三木	三木市国際交流協会「ことばの教室」
53		小野	小野市「日本語教室」
54		加西	加西市「かさい日本語クラス」
55		加東	北播地区在日外国人教育講座実行委員会「加小日本語教室」
56		西脇	西脇市国際親善交流協会「にほんごきょうしつ」
57	中播磨	姫路	姫路獨協大学日本語ボランティアグループ「城東日本語教室」
58		姫路	姫路市国際交流協会「在住外国人のための日本語教室」
59		姫路	姫路市国際交流協会「日本語ひろば」
60		姫路	★ベトナム in HIMEJI
61		姫路	がんばろうにほんご
62		姫路	白浜日本語教室
63		姫路	☆カトリック姫路教会内「勉強会」
64		姫路	☆城東寺子屋
65		姫路	☆城東町補習教室
66	西播磨	たつの	テクノ日本語ボランティア会「テクノ日本語教室」
67		宍粟	「さつき日本語教室」
68		赤穂	赤穂市国際交流教会「日本語教室」
69		上郡	上郡町 日本語教室「話書居茶屋」
70	丹波	篠山	丹波日本語ボランティアネットワーク
71		篠山	日本語教室「うりぼう」
72		丹波	★日本語教室「こんにちは」
73		丹波	ひかみコミュニケーションクラブ
74	但馬	豊岡	豊岡市国際交流協会「Tia 日本語教室」
75	淡路島	洲本	にほんごさーくる淡路

受講生の会(提案とご案内)

昨年の11月24日から始まった講座も11回目となり、あと2週で終わろうとしています。もう皆様もお気づきのように、「外国」人への日本語支援や「外国」から来た子どもたちへの日本語・教科などの学習支援については、広くて深く、13回の講座では、とても語りきることができないということがお分かりだと思います。

でもこの講座をきっかけに、私たちの近隣の地域で、あるいは学校で、文化の違いや日本語が不十分なために呻吟している大人たちや子どもたちの存在に気づき、地域や学校で、彼らが学び、共に生きようとしているときに、彼らと共に悩み、考え、学びあうことはできるのではないかと思います。

そんな営みをし、継続するために、講座修了後も、互いに情報交換しあい、この講座をさらに高め合う場として以下の会を提案します。

- (1) 年に2～3回(夏休み・冬休みなどに)会合を持つ
 - ① お互いの情報交換
 - ② 研修会を行う
- (2) メイリングリストを作り、日ごろの情報交換をする
- (3) その他
 - (ア) 当面の世話人
 - a. メイリングリスト担当：
 - b. 研修会企画担当

**** 講座反省と「受講生の会」発足のための会****

日時：2008年2月23日(土) 17:15～19:00

場所：県民会館「地下食堂」

会費：3000円

-----✂-----✂-----✂-----✂-----

～「2月23日の会」の申し込み書(2月16日まで)～

お名前：

ご住所：

お電話(携帯)番号：

E-mail：

- ・「受講生の会」に：賛同 (する、しない、わからない)
 - ・メイリングリストに (加わる、加わらない、わからない)
 - ・世話人になってもよい(メイリングリスト担当・研修会などの計画担当・その他)
- ご意見：

平成 19 年度文化庁生活者としての「外国」人に対する日本語教育事業

「日本語教育指導者養成講座」

アンケート結果（実施日 2008 年 2 月 23 日）

修了者：28 名 回答者 25 名（2 名欠席、1 名早退）

1. この講座をどこで知りましたか。

- a. 学校で 20 b. 兵庫日本語ボランティアネットワークの案内で 1
c. 知人から 2 d. 地域の日本語教室で 0
e. その他 2：（兵庫日本語ボランティアネットワーク養成講座などで）

2. 講座について

(1) 内容について

- a. よかった 13 b. まあまあよかった 10 c. ふつう 2
d. あまりよくなかった 0 e. 全然よくなかった 0

【理由・意見】

- ・ 本当に内容が豊かでもっとしっかり聞いて学び吸収できればと申し訳なく反省しております。週末は別に予定が入ったり時間を割くの苦勞し、ここに参加するだけでほっとする自分がいました。4 月以降フルタイムで再任用を希望しておりますので、まだお役に立てることは時間的にも難しいかと思いますが、個々で学んだことを必ず活かす日々が来ることは確信しています。ありがとうございました。
- ・ 新しい分野の知識ができたこと
- ・ 初体験で勉強になりました
- ・ このような講座ははじめてであったため新鮮
- ・ 大変濃密な内容で毎回、充実感がありました
- ・ 支援者、ユーザー、日本語支援、大学関係者等などの様々な立場の方の体験や学習法について直接お話が聞けたから
- ・ ボランティア指導の困難さがよくわかりました
- ・ 指導ではなく支援と言うことを肝に銘じねばと思った
- ・ 技術、知識よりも心構えや学習者側のニーズを重視する内容であった
- ・ 今までこのような体験がなかったので勉強になりました
- ・ 現状が分かってよかったです
- ・ 外国人の事情などの話しは重なることが多かったように思う。
- ・ その文整理して具体的な日本語指導法をもう少し増やしてくれたほうがよかったのではないかなと思う。このままでは不安です
- ・ 日本語を教えることだけのボランティアだという認識があったが、そうではなく生活のことなどいろいろあるということが分かり、楽しそうだった
- ・ 自分が知らなかったいろいろな話が聞けてよかった。外国に住むことの大変さがよく分かった

(2) 期間（3 時間×13 回）について

- a. 短かった 1 b. ちょうどよかった 14 c. ふつう 8 d. 長すぎる 3

【理由・意見】

- ・ 往復 3h×2 かかるのでよく参加できたと思う。
- ・ これ以上やったとしても専門的になりすぎると思う。後は自主的に各自が取り組みばいい。
- ・ これ以上やったら 1 回くらいは欠席したかもしれません。時間的にもよかったです。
- ・ 技術的なことも入れてほしかった。
- ・ 10 回以上出席なら可というのがよかったです。校務や使用で「皆勤」しようと思ってもできなかったと思います。
- ・ 毎週土曜日というのはなかなか出席が難しかったです。部活動の出張や会議などで参加(出席)できない日があり残念でした。
- ・ 奥が深かったが、興味深かった。ただし、日本語の指導はこれから自分なりに作っていかなければならない。方向性が見えてきたのでよかった。
- ・ 日本に住んでいる外国人の事情が少し理解できてよかった。
- ・ 3 ヶ月くらいならがんばればどうにか出られそうだが、これ以上長い期間だとハードルが高すぎる気がする。
- ・ 各活動のことが理解できた。
- ・ 12～2 月に詰まっていたので大変だった。、もう少し早くからあればと思った。
- ・ 今まで毎日仕事していますので毎週というのは正直少しきつかったです。13 回というので頑張りました。

(2) 講師・スタッフについて

- a. よかった 13 b. まあまあよかった 12 c. ふつう 0
d. あまりよくなかった 0 e. 全然よくなかった 0

【理由・意見】

- ・ 現場体験的な話がよい。
- ・ いろんな立場の人が講師として参加されていてバラエティに富んでいた。
- ・ 大学の先生を始め研究者や指導者と多彩な顔ぶれで講話や体験談がとてもためになりました。
- ・ 青木先生の取り組みは新鮮でした。
- ・ 現場とは乖離した考えをお持ちの方もいらっしゃいましたが・・・でも参考になりました。
- ・ いろんな現場で教えておられる方、若い在日外国人の子ら、大人など、生の声をいっぱい聞けて「目からうろこ」の感じでした。
- ・ みんなあたたかい雰囲気でした。

3. 講座を受けて

(1) 日本語学習を必要とする「外国」人の事情が

- a. よくわかった 13 b. まあまあわかった 12 c. ふつう 0
d. あまりわからなかった 0 e. 全然分からなかった 0

【理由・意見】

- ・ 組織だった支援の少なさがわかった。
- ・ 詳しくは語られなかった部分もあると思いますが外国の人たちの思いが伝わってきた。
- ・ 仕事柄、知りえた情報と重なる部分が多かったが・・・。

- ・ 何も知らなかったなので、いろいろなことが分かってよかった。
- ・ これまで日本に来ていた外国人の方の大変さなど深く考えたこともなかった。今回の研修で思いや大変さがよく分かり研修を受けてよかったと思いました。

(2) 日本語学習支援法が

- a. よくわかった 4 b. まあまあわかった 14 c. ふつう 2
d. あまりわからなかった 5 e. 全然分からなかった 0

【理由・意見】

- ・ 系統性を知りたい。
- ・ 日本語の教材の例など印象に残っている。
- ・ ビデオや書物、教材、教具などの紹介があったりして分かりやすく説明していただいたように思います。
- ・ 支援法の内容が少なかったと思う。
- ・ ビデオや学校で支援されている方の話を聞いたのはよかったプライバシーもあるでしょうが、具体的にこの人にはこうして教えた提示してほしい。
- ・ ボランティアで社会人(大人) に日本語を教える場合は指導者としてよりもよき隣人、よき相談者としての付き合い、サークル活動のようなものだということが分かりました。しかし、学校内で学習活動の土台としての日本語支援を考えた場合、時には厳しい姿勢で”指導”しなければ、卒業後の日本における自立や進路保障につながらないという信念で望んでいます。
- ・ 法的なことはあまり分からなかったんですが、実際に携わっていないと分からないことが多いと思います。
- ・ 多く使用されている Text が学習者のニーズに合うとは限らないなど発見することは多かった。
- ・ 頭でっかちで本当の指導力は nothing。
- ・ 具体的な支援法は少なかったように思う。またその人にあったサポートをすることが大切だということが分かった。

(3) 「外国」から来た児童生徒の事情が

- a. よくわかった 10 b. まあまあわかった 12 c. ふつう 3
d. あまりわからなかった 0 e. 全然分からなかった 0

【理由・意見】

- ・ 支援の必要性を感じた。
- ・ 来日した年齢によって違ってくるのが分かって良かったです。
- ・ 義務教育ではないとは知らなかったのでびっくり。
- ・ 6カ国の国籍を持つ生徒と日々接し、国語、日本語の支援、指導をしているのである程度理解できているという自負があります。同じ母語話者でも言語環境、家庭環境によって日本語学習言語の習得、理解の程度は異なりますからやはり個に応じた指導や配慮が必要でしょう。
- ・ 国によって違いがあることが分かり、指導方法も異なる(一人一人の指導の違いが必要) ことが分かりました。
- ・ 今までは、日本社会の中で生活している日本家庭の人間の尺度で考えるだけだったので、定住外

国人の問題について理解できないことも多かったが、ずいぶん事情がわかるようになった。

- ・ 一度ブラジルから来た小1の女儿を受け持ったがもっと親身になって接してあげればよかった反省している。

(4) 「外国」から来た児童生徒への支援法が

- a. よくわかった 6 b. まあまあわかった 10 c. ふつう 5
d. あまりわからなかった 4 e. 全然分からなかった 0

【理由・意見】

- ・ 現場のイメージがまだしっかりつかめていない。
- ・ 単に日本語を教えることだけではないということが分かったのですが、彼らの抱える問題に対処する方法も聞くことができました。
- ・ 具体例を多く提示してほしかった。
- ・ 既に日々実践していますが、これが「絶対」という方策は確立できていません。永遠のテーマかも知れませんか。一般生徒の学習支援、指導も同様に人間相手ですぐに目に見えた成果は期待できないという所ですが、地道に取り組み続ける以外ないと思っています。
- ・ これから自分でやってみないと分からない。
- ・ いくつかのケースについては学ぶことができましたが、同時に学習者のニーズや背景は一人一人全部違うことも学んだ・したがっていくつかの方法を参考に自分にとってベストな支援法をそのつど採るべきだと知った。

3. これからのこと

- a. 学校や地域で日本語学習支援に関わっていきたい 13
b. 今は、関われないが、将来関わりたい 8
c. わからない 2
d. さらに研修を受けて考える 2
e. 関わりたくない 0

【これからのこと及び全体を通じてのご感想・ご意見】

- ・ 4月から40時間フルタイムで再任用を希望しております。32時間にすればよかったかと思っておりますが、でも近いうちの必ず活かす日々が来ることを確信しています。
- ・ 実際にこれから、活動できる場や機会が具体的にたくさんあるなと思います。
- ・ 2008年度は再任制度を利用し(24h)学校へ、その合間を縫って平日1日、土曜などで支援できればと思っています。西播磨地区と神戸市灘区の月1回(わくわく支援)へと。
- ・ 基本的には、日本へ来ている外国人が日本は少しでもよい国家であり、日本にいてよかったということを共有したい・何か役に立ちたいと考える次第です。
- ・ お世話になりました。今後ともよろしくお願いいたします。
- ・ 姫路のイーグレで資料など見たことがあり、その実態がなんとなくわかりかけた。
- ・ この結おうな講座を今後も続けていただきたいと思いますし、日本も「国際化」が叫ばれて何年か経ちましたたが、もっともっと意識が代わって言ってほしいと思います。
- ・ 放課後の授業を小学校でも実現させたいです。

- ・ 何かボランティアをしたいと考えている。日本語学習支援の選択肢の一つと考える。長く続けられるものを探して、何か釈迦に沽券で北らと考えている。中国残留孤児の方のお話はとても心に残りました。つらい人生だったでしょうが両国のために力を注ぎたいと思ってらっしゃって私も何か人のお役に立ちたいと思いました。
- ・ 土、日も校務（部活動の監督を含む）や在籍中の大学院のゼミ、研究会があったりしますが、お手伝いできることがあれば。喜んでいたしますので遠慮なくお申し付けください。
- ・ 出席できない日が多くて分かったとはいえませんが、今まで知らなかった事をたくさん教えていただきとても有意義な時間をありがとうございました。
- ・ 「ボランティア」ということが自分にとって動考えて継続していけるのか、今、まだ整理がつかねている。しかし、日本語指導にかかわってみたいと思っている。
- ・ 長嶋先生を中心としてかかわりを持っておられる方に敬意を表したいと思います。一步でもちかづける要にk頑張りたいと思いました。
- ・ 三木市国際交流協会のメンバーとして支援をしているが、学校の多忙化のため1学期はできていたが2、3学期はほとんど参加できなかった。来年度も機会を見つけてサポートを続けていきたい。
*外国での支援の機会があればぜひ行ってみたいです。
- ・ すぐには活動できないかも分かりませんが、やってみたいと思っています。次回は指導法等の講習会等あれば受講したいと思います。
- ・ まだ、退職していない。今の職場はかなり多忙なので、学校で在籍している外国石製との支援で精一杯の現状です。退職したら、もっと日本語学習支援に関わりたいと思っています。
- ・ 現在講師で勤務しており、来年度の予定が分からないのですぐにはできません。
- ・ 同期生を対象にした研修かを今後も開催していただきたい。
- ・ これからやっていけるかどうかとても不安でしたが、長嶋先生の最後のお言葉であと押しされたようで、とにかく踏み出してみようと思います。
- ・ 7年早く退職したため、2、3年は臨時講師などで仕事を続けたいと思います。でも仕事をやめた後はボランティアとしてお手伝いできればと思っています。

H. 19年度文化庁「生活者としての外国人に対する日本語教育事業
「日本語教育指導者養成講座」報告集

記録：北澤 美樹 (大阪大学大学院文学研究科学生)
写真：呉 琴 (大阪大学文学部研究生)
編集：長嶋 昭親 (兵庫日本語ボランティアネットワーク代表)

H. 19年度文化庁「生活者としての外国人に対する日本語教育事業
「日本語教育指導者養成講座」報告集

2008 年 3 月 1 日発行

編集・発行：兵庫日本語ボランティアネットワーク
〒650-0004 神戸市中央区中山手 1 丁目 28-7
NGO 神戸外国人救援ネット内

郵便振込先：00920-4-7430 「兵庫日本語ボランティアネットワーク」
発行責任者：代表 長嶋昭親（携帯電話 090-3161-6046）
TEL&FAX:078-752-8415

印刷：(有限) 木下印刷所